

い る
入 部 XV

— 東入部遺跡第 11 次調査報告 —

2012

福岡市教育委員会

IRU BE
入 部 XV

—東入部遺跡第 11 次調査報告—



9529 HG I-11

2012

福岡市教育委員会

序

福岡市には北方に広がる玄界灘の海を介し、大陸と人、物、文化の交流を絶え間なく続けてきた歴史があります。この地の利を活かした人々の生活を物語る多くの遺構、遺物は地中に残され、調査が進むにつれて明らかにされてきています。その中には、大陸の先進技術、文化を示す貴重なものが多く、学術研究上においても重要視されているところです。

本調査でも弥生時代において大陸からの文化を受容し、青銅器を持ち得ることができた拠点集落と中世の博多を中心にして輸入した高価な中国陶磁器を得ることができた屋敷跡が発見されました。

本書はこうした調査成果を収めたもので、やむなく多様な開発で消滅する埋蔵文化財について将来に残していく記録保存の一つです。研究資料とともに埋蔵文化財に対するご理解と活用への一助となれば幸いです。

最後になりましたが、早良区入部地区県営団場整備の地元関係者の方々をはじめ多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに対し、厚くお礼申し上げます。

平成24年3月16日

福岡市教育委員会

教育長 酒井龍彦

例　　言

1. 本書は入部地区県営圃場整備事業に伴い福岡市教育委員会が平成7年度に実施した東入部遺跡第11次調査の報告である。
2. 発掘調査および整理、報告書作成にあたって国庫補助事業として実施した。
3. 調査は荒牧宏行が担当し、遺構実測図は荒牧のほか黒田和生が作成した。
4. 本書に掲載した遺構、遺物写真は荒牧が撮影した。
5. 本書に掲載した遺物実測図は相原聰子、荒牧、斎藤は樋口久美子、相原聰子、荒牧が行った。
6. 本文は荒牧が執筆した。
7. 本書掲載の実測図、写真、遺物のほか調査で得られた総ての資料類は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管され、公開、活用されていく予定である。

凡　　例

1. 本書は入部地区県営圃場整備事業に伴う調査報告書のシリーズとして書名を「入部X V」とした。既刊の報告書は以下の通りである。

「入部 I」市報第235集 1990	「入部 II」市報第269集 1991
「入部 III」市報第310集 1992	「入部 IV」市報第343集 1993
「入部 V」市報第424集 1995	「入部 VI」市報第485集 1996
「入部 VII」市報第516集 1997	「入部 VIII」市報第557集 1998
「入部 IX」市報第613集 1999	「入部 X」市報第652集 2000
「入部 XI」市報第686集 2001	「入部 XII」市報第925集 2007
「入部 XIII」市報第1070集 2010	「入部 XIV」市報第1050集 2012発刊予定

「入部 X V」本書

* 市報は福岡市埋蔵文化財報告書の略称である。

2. 本書に用いた方位は磁北で、真北より6° 西偏する。
3. 掲載した遺物の番号は土器、石器、金属類に分けて通し番号とした。
4. 遺構の種類を示す略号として竪穴住居跡をSC、土壙をSK、掘立柱建物跡をSB、溝をSD、柱穴をSP、不明のものをSXとした。
5. 輸入陶磁器の報文には『大宰府条坊跡 X V』太宰府市の文化財 第49集 2000 太宰府市教育委員会、山本信夫・山村信榮「中世食器の地域性[10]九州・南西諸島」国立歴史民俗博物館研究報告第71集 1997の編年・分類を用いた。

遺跡名	東入部遺跡	調査次数	11次	調査略号	HGI-11
調査番号	9529	分布地図幅名	入部(85)	遺跡登録番号	0343
開発面積	9,200m ²	調査面積	1,330m ²	事前審査番号	7-1-17
調査期間	951004～960214		調査地	早良区東入部	

本文目次

I	はじめに	1
1.	調査に至る経過	1
2.	調査組織	1
II	位置と環境	2
III	遺構と遺物	5
1.	概要	5
2.	中世の遺構と遺物	8
(1)	井戸	8
	SE024	8
(2)	木棺墓	10
	SK066	10
	SK068	16
(3)	土壤	19
	SX001	19
	SX002	19
	SX023	20
	SX062	22
	SX006	25
	SX074	31
	SK028	33
	SK018	34
	SX004	35
	SX003	35
	SX030	35
(4)	溝	36
	SD056	36
	SD117、118	37
	段落ち052、SD032、033	39
	SD035	39
	SD036	41
	SX038	41
(5)	据立柱建物跡	43
	SB01～SB16	43～49
(6)	その他の柱穴、土壤等から出土した中世遺物	49
3.	弥生時代の遺構と遺物	
(1)	竪穴住居跡	
	SC013	50
	SC057	54

SC050	54
SC329	57
SC863	58
SC866	60
SC888、SC890	62
SC012、015、016	64
SC065	66
SC079	66
SC078	68
SC047、048、049	71
SC081	71
SC082	78
SC083	78
SC084	78
SC828、829	78
SC893	80
SC865	81
SC007	84
SC008	84
SC722、1077	86
SC080	86
SC1087	86
(2) 挖立柱建物跡	88
SB17～SB22	88
(3) 土壙	90
SK956	90
SX014	93
SX992	93
SX075	93
SX415	99
(3) その他柱穴等出土遺物	99
(4) 出土石器	103
IV おわりに	104

I はじめに

1. 調査に至る経過

福岡市早良区大字重留と東入部一帯の圃場整備に伴う埋蔵文化財調査が昭和62年度から開始された。本書は最終調査にあたり、平成7年度に実施した追加の暗渠排水工事に伴う発掘調査報告である。

平成7年6月7日付農水第476号「埋蔵文化財の事前審査について（依頼）」が埋蔵文化財課に提出された。当該地は平成3年度に試掘を済ませている区域で、この試掘報告に基づき埋蔵文化財課で審査を行った。その結果、調査が必要と判断し平成7年6月15日付教埋第273号で回答した。

調査は平成7年5月10日に開始し、平成8年2月14日に終了した。

2. 調査組織

調査にあたっては以下の体制で臨んだ。

事業主体 福岡県農林事務所農地整備部害課 福岡市農林水産局農業振興部農業土木課

福岡市入部土地改良区

調査主体 福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課

課長 荒牧輝勝 第1係長 横山邦維 第2係長 山口謙治 事前審査 濱石哲也

榎本義嗣 庶務 内野保基 調査担当 荒牧宏行 調査補助員 黒田和生

作業員 廣瀬梓 満田雅子 長嶋光儀 岩見敏子 川嶋ツキエ 中園登美子

山田ヤス子 三好道子 細川友喜 山尾タマエ 稲所通泰 吉岡勝野 緒方シマヨ

鶴田佑子 鶴田喜美枝 大鶴好子 青柳美智子 青柳寿子 海津宏子 坂原美佐子

百武照子 土生喜代子 土生ヨシ子 土生ヒサヨ 山口タツエ 平川富美子 平川史子

西嶋彰子 平川英子

第1表 入部圃場整備事業地区内発掘調査年度別一覧

次数	調査年度	事業面積	調査対象面積	本調査期間	調査対象遺跡
1	1987(昭和62)	5.0ha	12,500m ²	1988. 1. 6～1988. 3. 31	重留1次
2	1988(昭和63)	15.2ha	15,000m ²	1988. 6. 21～1989. 4. 7	重留2次・拌塙古墳
3	1989(平成元)	15.9ha	16,200m ²	1989. 8. 1～1990. 3. 26	重留3次・岩本1次・四箇船石1次
4	1990(平成2)	15.2ha	22,294m ²	1990. 7. 18～1991. 3. 8	清末2次・岩本2次・四箇船石2次・東入部1次・四箇古川1次
5	1991(平成3)	21.7ha	34,381m ²	1991. 5. 13～1992. 3. 5	清末3次・東入部2次・安通1次
6	1992(平成4)	14.0ha	13,832m ²	1992. 5. 20～1993. 1. 31	東入部3次
7	1993(平成5)	6.0ha	17,000m ²	1993. 5. 1～1994. 2. 28	東入部7次
8	1994(平成6)	1.3ha	5,000m ²	1994. 7. 7～1994. 11. 25	東入部10次
9	1995(平成7)	0.9ha	2,600m ²	1995. 10. 4～1996. 2. 14	東入部11次

II 位置と環境

(1) 東入部遺跡

本調査区である東入部遺跡群は福岡市西部に広がる早良平野の奥まった沖積地に位置する。南北に約1,300m延びた範囲を占め、東西には丘陵が迫り、南側が早良平野を形成した室見川で限られている。標高が南から北に39~29mと減じていく沖積地と低位段丘面の地形からなる。周辺の遺跡群が谷を隔て入り組みながら分布している。

(2) 東入部遺跡の弥生時代集落

東入部遺跡第2次調査の8区における調査にて青銅器を有した壇棺墓群が検出され（「入部XIV」市報1140集、今年度刊行予定）、この列状に占地した墓域に近接して堅穴住居群が形成された（「入部X」市報652集）弥生時代における拠点集落といえる。同じ早良平野内において拠点集落の指標となる青銅器を有した壇棺墓が出土した近接する遺跡群として、室見川を渡り、北西に約3km離れた吉武遺跡群、反対方向の南側に室見川をわたり、約800m離れた岸田遺跡があげられる。

これまでの調査から東入部遺跡内における弥生時代の変遷をみると先ず、前期では北西縁の第2次調査の6区において夜臼式→板付I式の壇棺墓16基が出土した。中期初頭になると、同じく北端の11区において、1基づつの中例であるが円形堅穴住居、金海式の壇棺、石棺墓が検出された。このように前期から中期初頭においては東入部遺跡の北端を中心に散在的であるが、住居や墓が展開している。

中期前半から後半になると、8区や本調査にみられるように南側の東入部遺跡群の内部に移動し、集中的に壇棺墓や住居群が形成されるようになる。

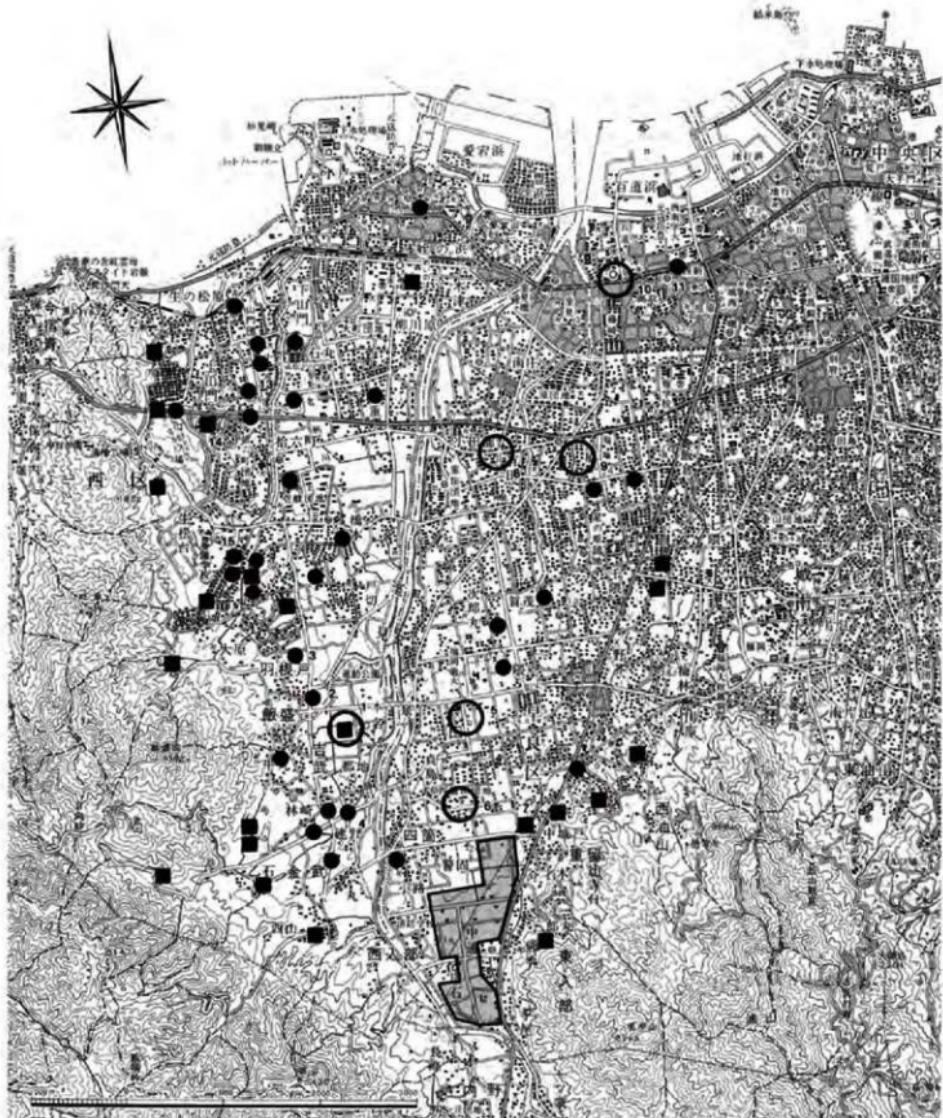
後期の状況は既往の調査からは不明であるが、弥生終末から古墳前期にかけては検出例がある。なお、弥生終末期の遺構はその後に集中した古墳前期までの住居跡群に混在して、1、2例みられる程度である。庄内から布留併行期の住居跡群は第1次調査4区で10軒、第2次調査11区では11軒が検出され、さらに近接した北西に位置した岩本遺跡群でも15軒が検出されている。東入部遺跡群の南側の状況は不明であるが、現在までに北端を中心にして分布していることが判明している。

(3) 東入部遺跡の中世村落

本調査において弥生時代中期とともに主要な遺構が多く検出された中世について概観しておきたい。南側に近接した8区においても中世の遺構が検出されているが、本調査よりやや古い12世紀前半代の遺構も含まれるようである。ただし、近世はあるものの中世後半期の遺構はほとんど検出されていない。南側の7次調査では11世紀から12世紀にかけての村落が検出されているが、その後は継続せず、12世紀中頃以降の遺構が多く検出された本調査区への移動も考えられる。

(4) 東入部遺跡第11次調査の地形と層序

本調査区の地山である淡明黄褐色砂質土の標高は北側で32.5m、南側で32.7mを測り、調査区内での比高差はほとんど無い。ただし、北西部から中央にかけてこの地山の上に厚さ約10cmの漆黒色土の包含層が堆積し、その上面から灰色砂の埋土からなる中世の柱穴が検出された。洪水後に整地され集落が形成されたものと考えられ、上述の中世村落が移動した原因の一つに洪水による自然災害もあげられよう。



- | | | |
|---------|----------|-------------|
| 1 吉武遺跡群 | 6 四箇遺跡群 | 11 西新町遺跡 |
| 2 大田遺跡 | 7 拝坂古墳 | 12 五島山古墳 |
| 3 羽根戸遺跡 | 8 有田遺跡群 | 13 捨六町ツイジ遺跡 |
| 4 都地遺跡 | 9 原遺跡群 | 14 宮ノ前遺跡 |
| 5 田村遺跡群 | 10 藤崎遺跡群 | 15 野方中原遺跡 |

(○遺跡群
 ●遺跡
 ■古墳
 13・15が整備事業地)

Fig. 1 早良平野地形図と遺跡分布図 (1/50,000)

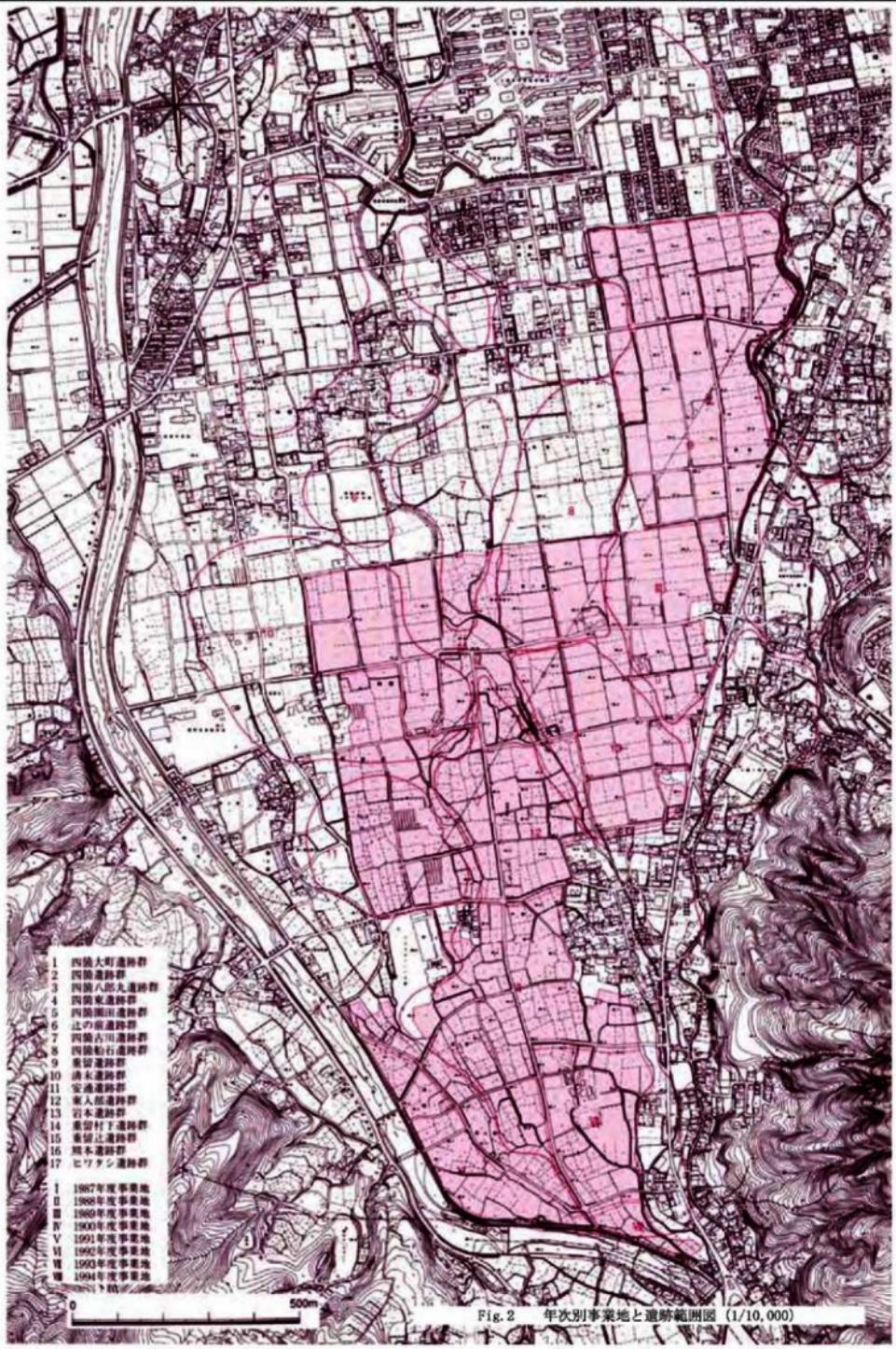
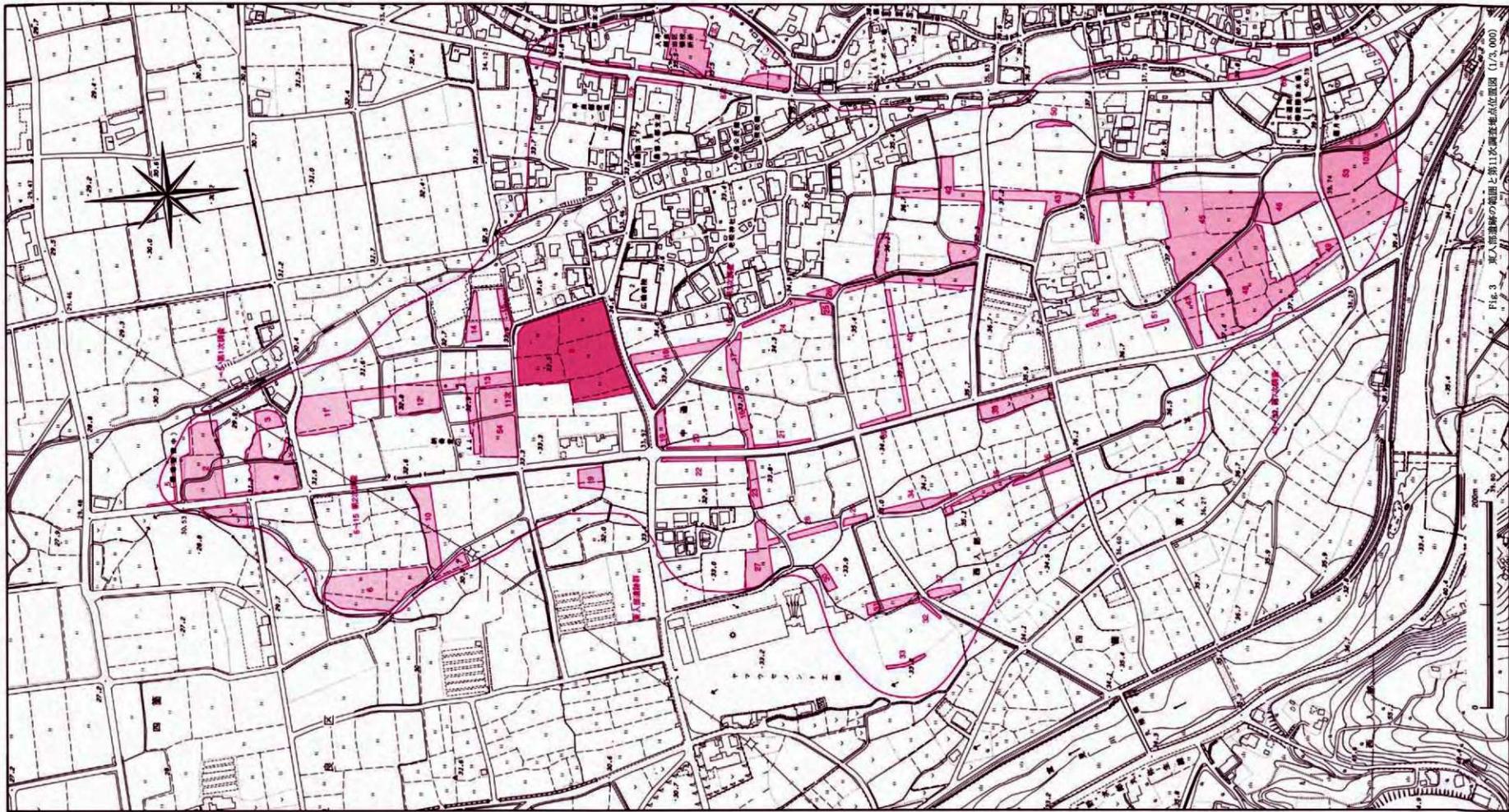


Fig. 3 東入部港の図と第11次港点図 (1/3,000)



III 遺構と遺物

1. 概要

検出された遺構は大きく12～16世紀代の中世と弥生中期の2時期に属する。中世の遺構は灰色砂土の埋土からなり、北西部を中心に堆積した黒褐色の包含層を切って検出された。

中世の遺構は井戸1基、木棺墓2基、土壙11基以上、溝6条以上、復元した掘立柱建物16棟、弥生時代の遺構は竪穴住居跡30軒以上、土壙4基以上、復元した掘立柱建物跡16棟である。



Ph. 1 調査区全景（北西から）



Ph. 2 調査区全景(西から)

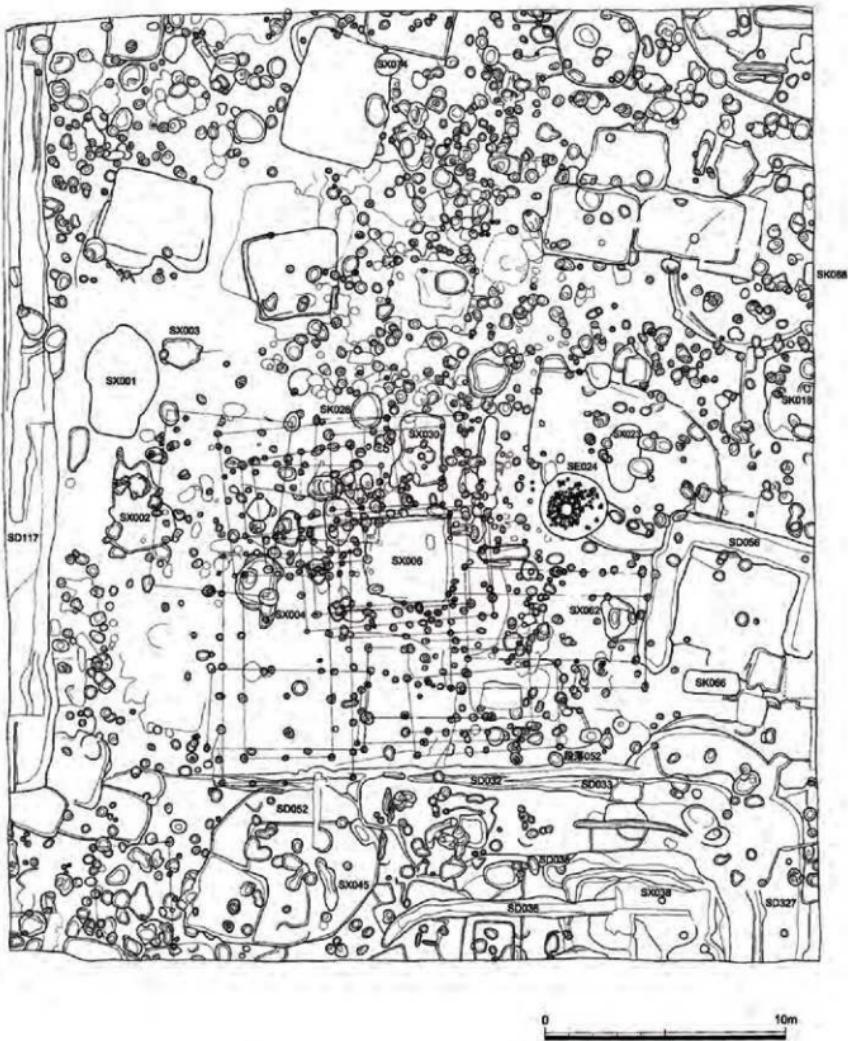


Fig. 4 第11次調查遺構配置図（上面 1/200）

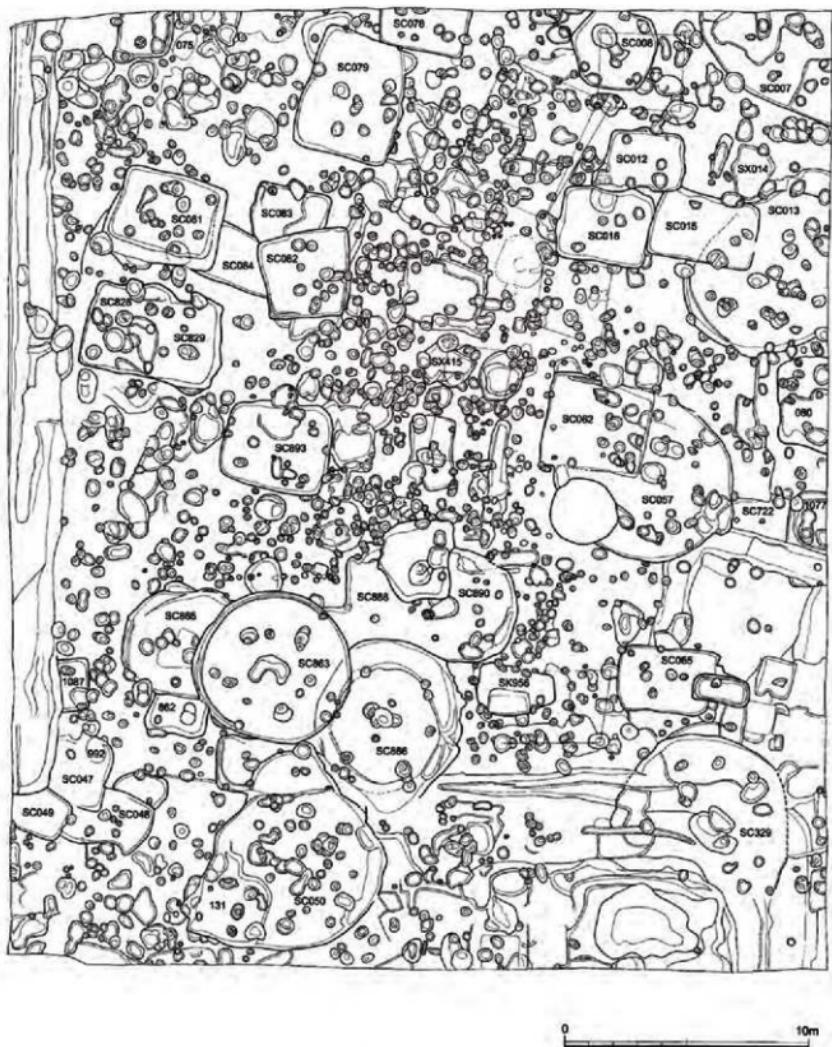


Fig. 5 第11次調査地図 (下面 1/200)

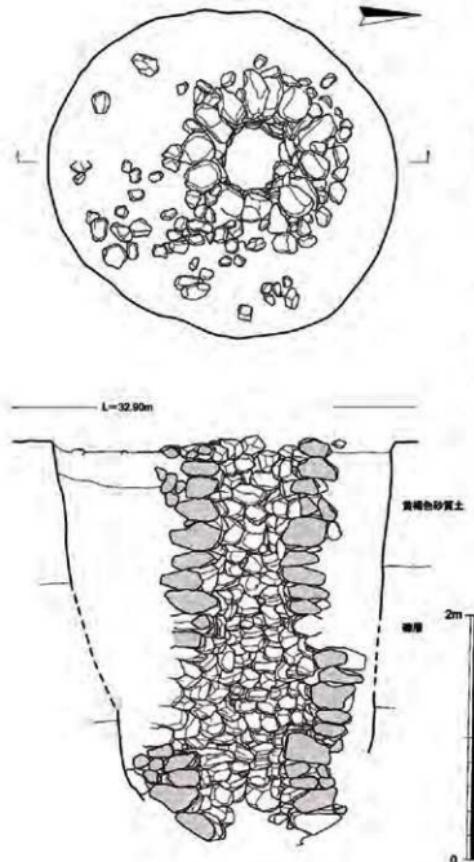


Fig. 6 SE024実測図 (1/40)

である。7は外面に蓮弁文、内底見込みに「玉」の印刻を施す龍泉窯系青磁碗II類である。8は内面底部に柳葉文を施し、龍泉窯系青磁碗II類と思われる。

出土土器の年代は13世紀前後から前半を下限とする。
鉄器

1は刀子である。鞘の木質が残る。2は釣針である。

2. 中世の遺構と遺物

1) 井戸

上、下面含め検出された井戸は中世のSE024のみである。

SE024

調査区の中央南寄りの位置で検出された。周辺には灰色砂の埋土からなる柱穴が多く検出された。

掘方は $255\text{cm} \times 285\text{cm}$ の楕円形プランを呈す。掘方内部に長軸長が $30 \sim 50\text{cm}$ 大の礫を長軸方向が中心に向くように据えて内法 50cm の輪状に組む。控えの礫はみられない。これを21段以上くみあげて井戸側を構築している。石組の下底の深さは検出面から 3.3m を測り標高 29.5m である。礫層より下層に堆積した砂層に達する。曲物等の木質は検出されなかった。

出土遺物

土器

1の土師皿は口径 9.0cm 、器高 1.1cm を測る。内底部に同方向のナデを加え、外底は糸切りで幅 4cm に8本の木目がある板状圧痕が残る。2の土師皿は口径 9.0cm 、器高 0.9cm を測る。内底は中心が瘤む回転ヨコナデ、外底は糸切りで上げ底となっている。3の土師器皿は口径 14.1cm 、器高 3.1cm を測る。内底に同方向のナデを施し、外底には糸切り痕と幅 6.0cm の板状圧痕が残る。体部はヨコナデの痕を明瞭に残し、内湾して立ち上がる。4の土師器皿は復元口径 14.2cm を測る。体部が内湾しながら立ち上がり、口縁端部は短く外反する。5、6は鏡がない蓮弁文の龍泉窯系青磁碗II-a類

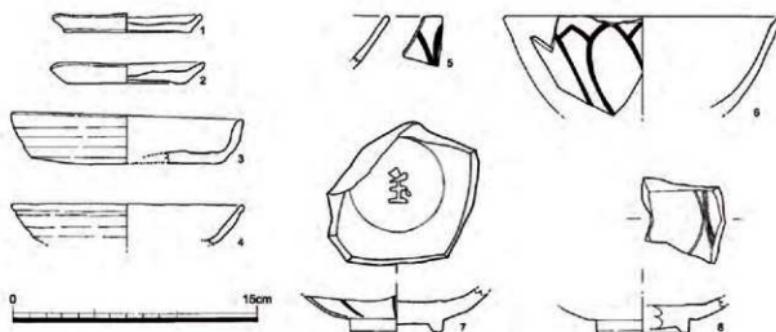


Fig. 7 SE024出土遺物実測図1 (土器 1/3)

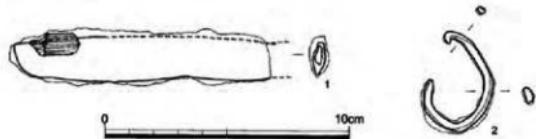


Fig. 8 SE024出土遺物実測図2 (鉄器 1/2)



Ph. 3 SE024検出状況 (南から)

2) 木棺墓

調査区南際でSK066とSK068の2基が検出された。

SK066

主軸方位 N-7° -W に向ける長方形プランの掘方である。検出面から下底までの深さは 70cm を測る。掘方の上端は長軸長 235cm、短辺長の南北両辺は変わらず 93cm を測る。下端は主軸長 206cm、北辺 65cm、南辺 69cm を測る。下底の柱穴は木棺墓に切られた遺構で関連はない。

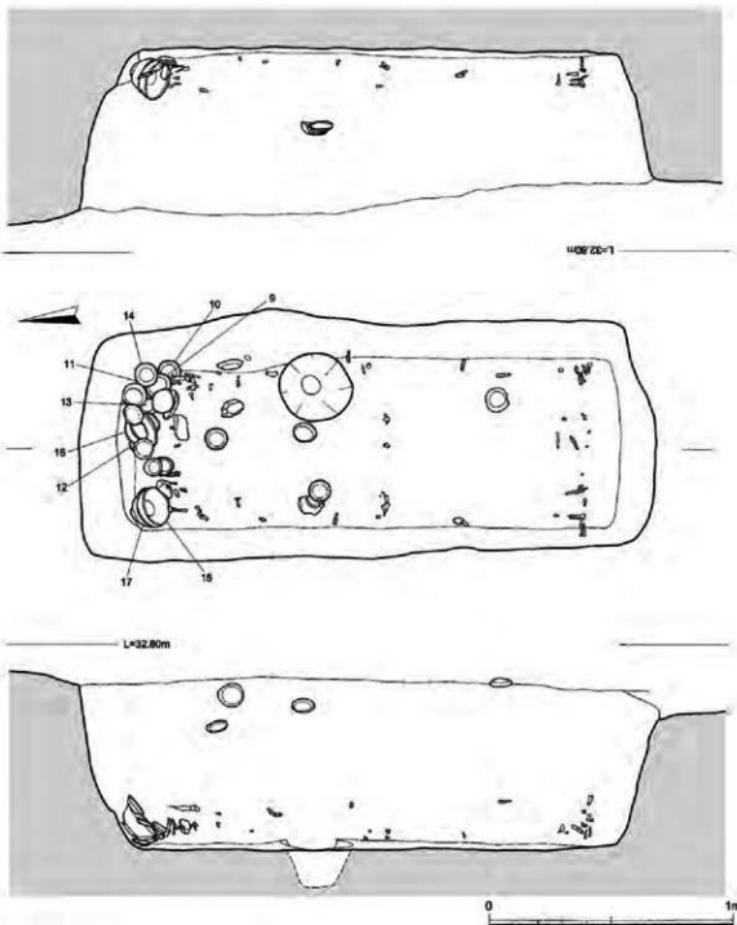
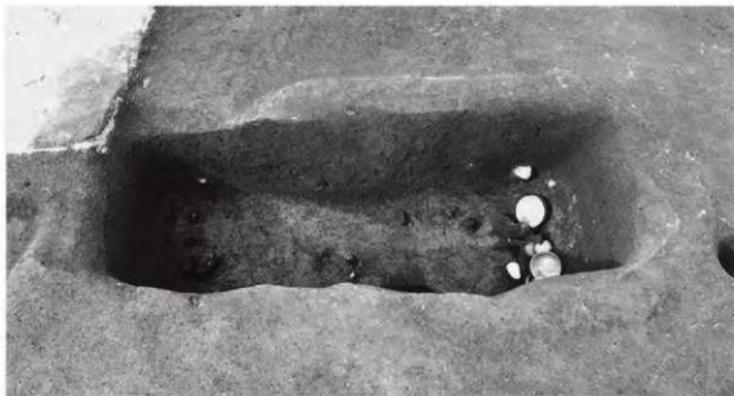


Fig. 9 SK066実測図 (1/20)



Ph. 4 SK066完掘状況（東から）



Ph. 5 SK066遺物出土状況（南西から）



Ph. 6 SK066上部遺物出土状況（東から）

下底から 15cm 浮いた位置までに木質が鈎着した釘が配列して出土したことから木棺墓と判断できる。釘の配列から長辺長 160cm 前後、短辺長 60cm 前後の木棺と考えられる。鉄釘に鈎着した木質から板の厚みは底辺中央の短辺上に釘の配列がみられ連結、補強したものと考えられる。また、北辺寄りの底面には木棺を安定させたものと思われる小石が出土した。

副葬品として頭位の北辺側に青磁碗 3、青磁皿 6、土師皿 9、中央にかけての上部に土師皿 5 が置かれていた。北辺側の副葬品は底辺から 10cm 浮いた高さまでに斜めに重なりあって出土した。その位置が釘の配列より外側であることから棺外とみられる。

個別にみると青磁碗は北西隅に 17 を下にして 15 を重ねて木棺側に内面を向けて傾いた状態で出土した。離れた中央に同様の傾きで 16 が出土した。青磁皿は青磁碗 16 の下から東側隅までに置かれ、9、14 は底面から浮いた状態で重なりあっていたが、他の 4 枚は正置の状態で横に並んだ状態であった。土師皿は乱れ 18、23 のように底面を上に向け重なりあっているものもある。

中央にかけて出土した土師皿は底面から 30 ~ 67cm の高い位置で、これも棺外に置かれていたものと考えられる。土師皿と接して龍泉窯系青磁碗 I 類の破片が出土した。

出土遺物

土器

9 ~ 14 は全面施釉後に外底部の釉を搔き取った同安窯系青磁皿 I -2 類である。露胎の外底部には總て同じ花紋を墨書きしている。無文 I -2a 類の 9、10 と内底部に X 状のヘラ描きとジグザクに櫛齒を点描した文様を組合せた I -2b 類の 11 ~ 14 に分類できる。

15 は龍泉窯系青磁碗 I -2b 類である。蓮花文 2 と葉文 1 の片彫りを組合せた文様である。黄色味がかった緑色に発色している。16、17 は龍泉窯系青磁碗 I -4a 類である。輪花は無く、内底見込みに 3 個の葺状の文様が片彫りされている。ともに青味が強い緑色に発色している。

北端から 9 個、棺外上部から 5 個、計 14 個体の完形土師皿が出土した。これらは形態、焼成など近似している。口径 9.1cm 前後、器高 1.6cm 前後の法量である。底部と体部の境がわずかに浮いて、丸みを帯びて移行する。体部は中位から上位にかけて外反する。内底はすべて同方向の丁寧なナデが施されている。外底はすべて糸切りである。また、23、26 以外はすべて浅い板状圧痕が残る。23 は圧痕がなく、26 は網目状の圧痕が残る。

出土遺物の年代は 12 世紀後半に比定できる。

鉄器

鉄釘は 47 個体以上が出土した。3 ~ 16 の鉄釘は 6.0cm 前後 (2 寸) のものと 7.5cm (2 寸 3 分) のものに分かれる。前者は幅 4 ~ 7mm で断面正方形に近い 7 と扁平な方形に近い 14 がある。後者は幅 6mm を測る。15 は木目の方向から厚み 2.0cm のものが接合されたことが判る。17 ~ 20 は鉄釘片である。

21 から 22 は鍵か。23 は鉄釘であるが、側面と同じ厚みで横に突出している。別個体のものが鈎着したものか不明。24 は刀子片と思われる。

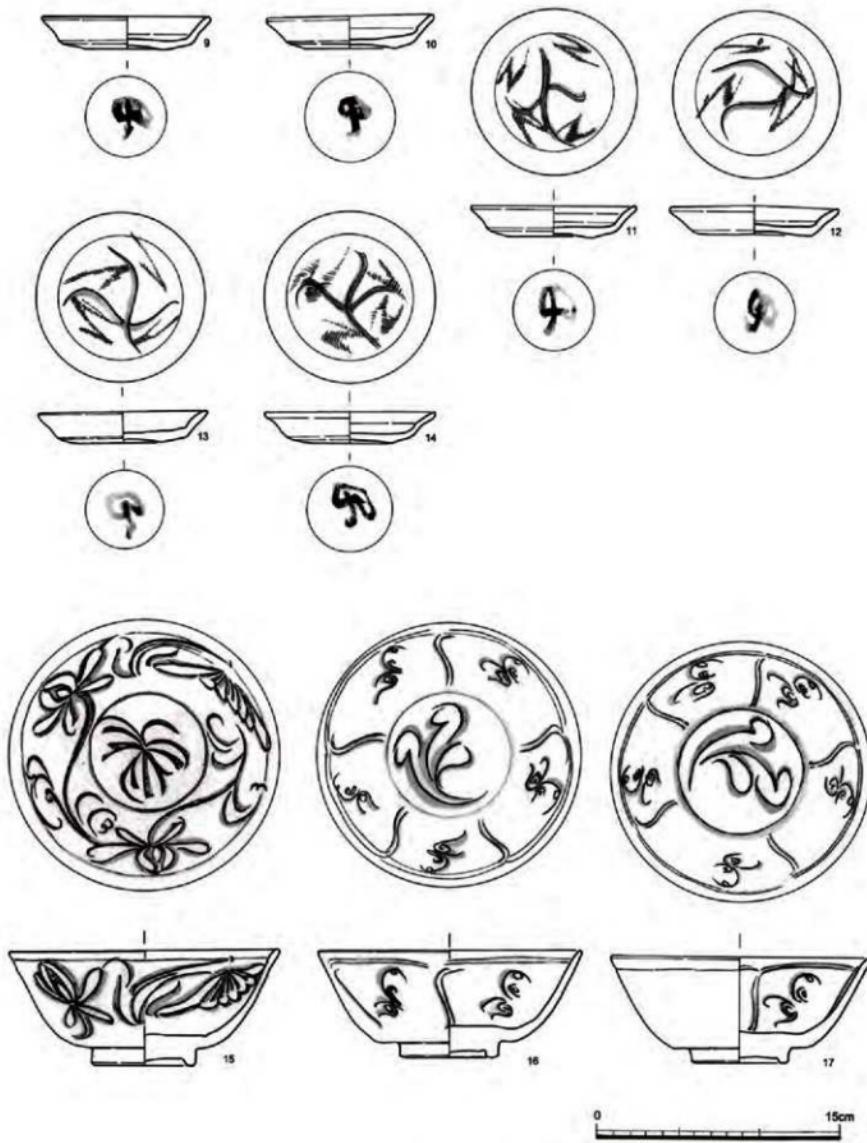


Fig. 10 SK066出土遺物実測図1 (磁器 1/3)

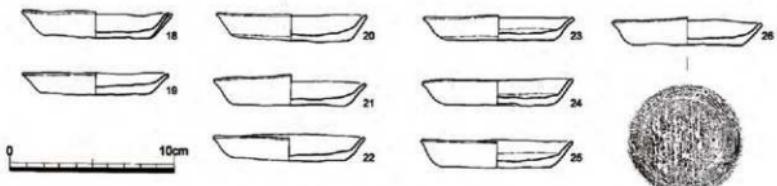
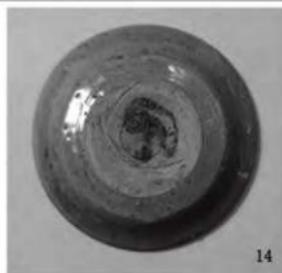
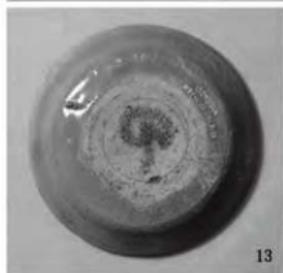


Fig. 11 SK066出土遺物実測図2 (土師器 1/3)



15 16 17
11 13 14 12
9 10

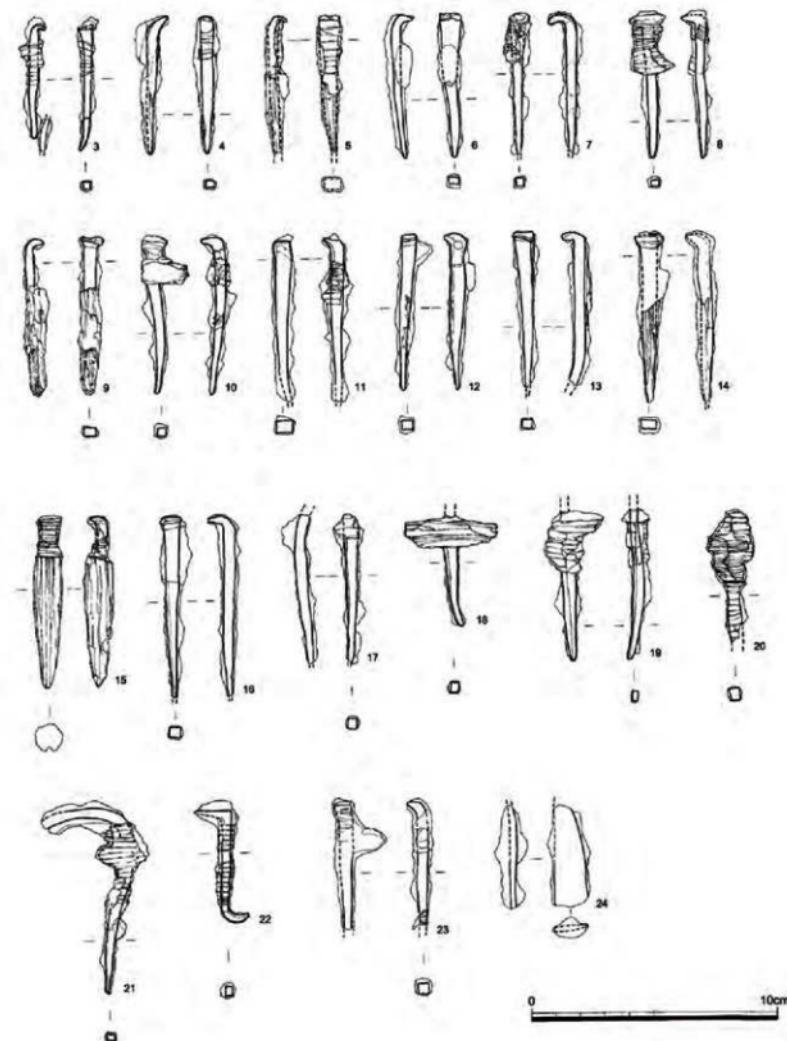


Fig. 12 SK066出土遺物実測図3 (鉄器 1/2)

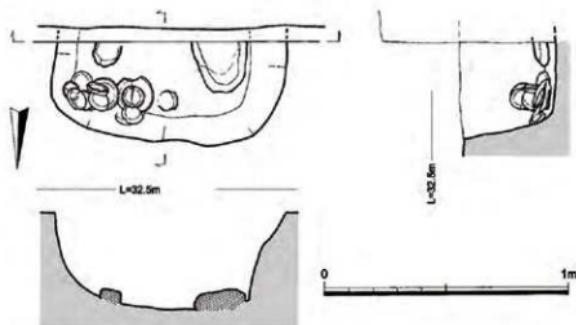


Fig. 13 SK068実測図 (1/20)



Ph. 7 SK068 (北から)

SK068

木棺墓 SK068 の東に約 17m 離れた調査区の南縁で検出された。大部分が調査区外となり北辺付近のみの検出となつた。

主軸方位は SK068 とほぼ変わらないとみられる。北辺長の上端 93cm 下端 70cm、深さ 40cm の掘方である。木質が銹着した鉄釘が出土したことから木棺が埋置されていたことが判る。調査区縁の底面から平石 2 個が出土した。高さ 10cm 程度で棺台と思われる。1 石の上面は火熱を受け赤変していた。

副葬品は北東隅に寄った底面に土師器壺 2、土師皿 12 を置いていた。その配置は土師器壺を 2 枚並べて置き、その上に土師皿が北東隅に 8 枚、離れて 3 枚乱雑に重なり出土した。土師皿は向きが多方向で重ねたものが崩壊したものではない。特に壁際の土師皿は底部を内側に向か斜めに立つ。

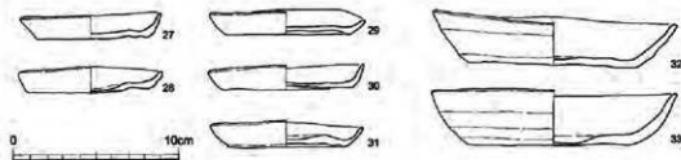


Fig. 14 SK068出土遺物実測図1 (土師器 1/3)

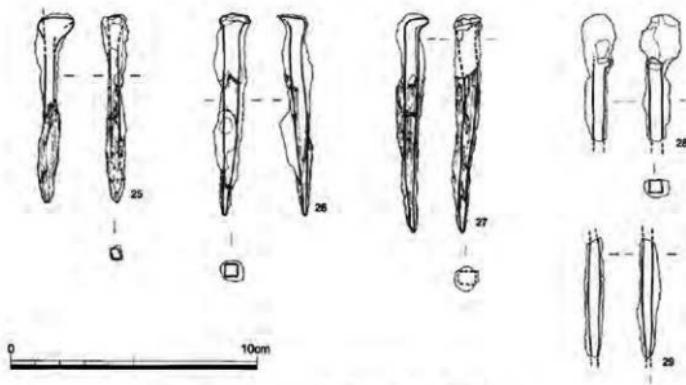


Fig. 15 SK068出土遺物実測図2 (鉄器 1/2)

出土遺物

土師皿 11 個体、土師器壺 2 個体が出土した。土師皿は図示したものの他 5 個体ある。すべて淡黄灰色に発色し、煤状の炭化物が付着している。歪みが大きく、粗雑な作りである。底部は糸切りで切り離した痕が調整されずに残したものや起伏が大きいものがあり、上げ底となったものがある。内底のナデ調整も粗く、起伏がみられる。板状圧痕は明瞭に残すものが 3 個体、無いものが 4 個体、浅くわずかに残るものが 4 個体ある。法量は口径では 27 が最小で 8.6cm、30 が最大で 9.9cm を測る。他は 9.1cm 前後である。

32, 33 の壺 2 個体も淡黄灰色に発色し、煤が付着している。ともに口径 15.0cm、器高 3.3cm を測り、底部は糸切りで浅い板状圧痕が残る。32 は僅かに上げ底であるのに対し、33 は内底中央が瘤み、外底が押し出されている。

出土土器の時期は 12 世紀後半とみられる。

鉄器

図示した鉄器すべて鉄釘である。25 ~ 27 はほぼ完存し、各全長、7.5cm (2 寸 5 分)、8.0cm (2 寸 7 分)、8.7cm (2 寸 9 分) を測る。28, 29 も鉄釘片である。

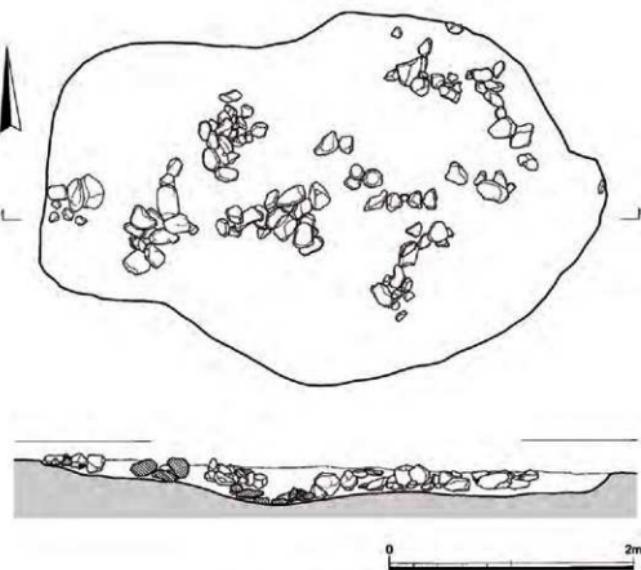


Fig. 16 SX001実測図 (1/40)



Ph. 8 SX001土層と出土状況 (南から)

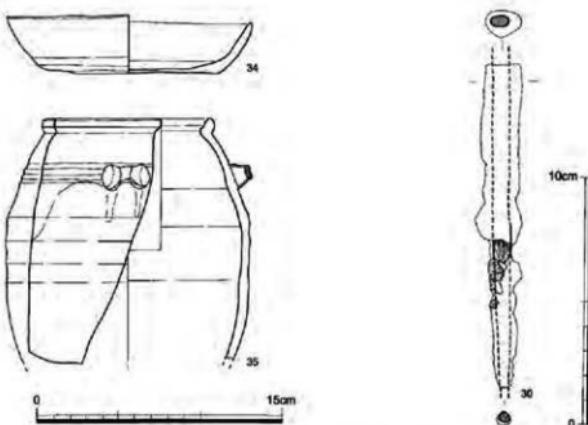


Fig. 17 SX001遺物実測図 (1/3, 1/2)

3) 土壙

SX001

調査区中央北縁で類似した土壙 SK002 と近接している。灰色砂質土の埋土からなり黒色包含層上面で検出された。主軸方位を東西方向の N-87° -W に向けた不整な梢円形プランである。主軸長 230cm、短軸長は 110 ~ 150cm を測る。深さは最も深い中央で 30cm を測る。20cm 大の礫を多く含む。洪水によって浸食された窪みか。

出土遺物

34 は土師器壺である。口径 15.1cm、器高 3.1cm を測る。外底は糸切りで、幅 4cm 程度の板状压痕が残る。内底部はわずかなナデが施されているが、成形において中央にかけて下がり、器厚が 2mm 級の薄さとなっていく。淡赤褐色を呈す。35 は陶器耳壺 VI 類とみられる。胎土は灰色で緻密である。釉は内外面に施され、緑灰色に発色している。口縁内外面に粘土の目跡が付く。

出土土器の時期は 12 世紀後半とみられる。

鉄器

30 は鉄製のヤス状のものである。

SX002

SX001 同様に長軸を東西方向に向けた不整形のプランである。長軸長約 4m、短軸長 2 ~ 3m の規模である。内部に礫も SX001 同様に多く含む。洪水の浸食によるものであろう。

出土遺物の土師皿 197 は口径 8.9cm を測り、12 世紀後半から 13 世紀前半代のものとみられる。

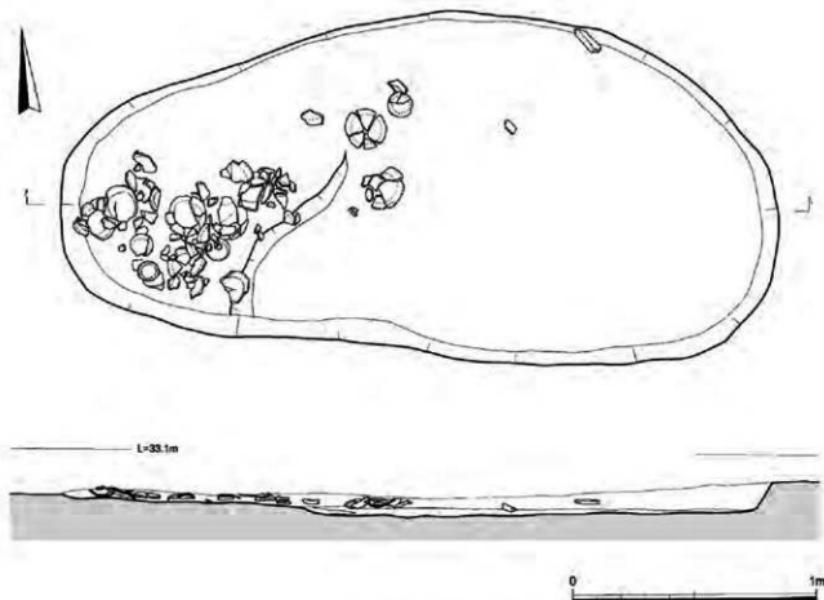


Fig. 18 SX023実測図 (1/20)

SX023

調査区中央の南寄りで検出された。主軸がほぼ東西方向の N-88° -W に向く。平面は東側に広がった梢円形を呈し、長軸長 293cm、短軸長は最大で 140cm を測る。深さは最も深い東側で 10cm、西側は削平されて浅くなる。埋土は他の中世の土壤と同様の灰色砂からなる。

西側に完形に近い土器器の壺 19 個体以上と皿 10 個体以上が集中して出土した。これらの土器群は正、逆位両向きが混在し割れた状態で廃棄されている。底面近くのためか、遺物はほぼ水平の状態で出土した。

出土遺物

土器皿は図示したものの他、完形に近いものが 7 個体ある。これらは口径 9.1cm 前後のものと 9.6cm 前後のものに大きく分類できる。36 は口径 8.9cm、器高 1.4cm を測る。底径 6.3cm の小さい底部から体部が直線的に外方へ延びるが、その中央に凹線が入る。内面は底部と体部の境が不明瞭で、底部の器厚は 6mm 弱と厚い。外底には糸切り痕と極めて浅い板状压痕が一部に残る。内底は丁寧なナデが施され僅かに中央が窪む。黄褐色ないし赤褐色を呈し、口縁一部の内外面に煤が付着する。37 は口径が 9.4 ~ 9.8cm と歪む。底径 8.5cm、器高 1.0cm を測る。底径が大きく、底部の器厚が 5mm と厚いために体部が短く、角度が大きく立ち上がる。外底には糸切り痕と浅い板状压痕が中央の一部に残る。内底はナデが施され、僅かに指頭痕の凹みがみられるがほぼ平坦である。また、内面には煤が付着している。淡赤褐色を呈す。

他の 7 個体は 36 に近い口径 9.1cm 前後のものが 3 個体、37 に近い口径 9.6cm 前後のものが 4 個体ある。

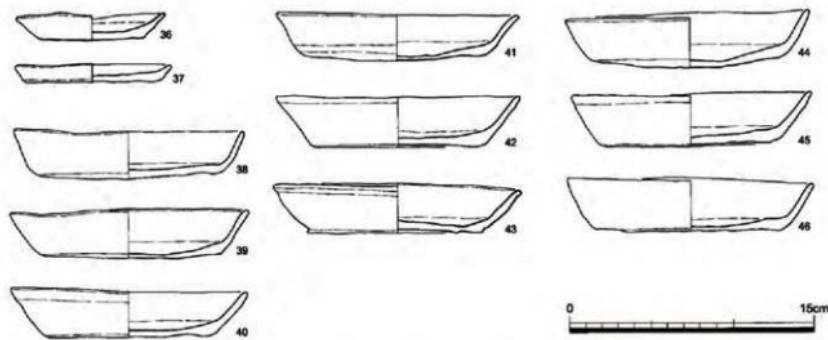


Fig. 19 SX023出土遺物実測図 (1/3)



Ph. 9 SX023発掘状況（南西から）



Ph. 10 SX023遺物出土状況（南西から）

口径 9.1cm の土師皿には 36 と異なり底径が 7cm と大きく体部が角度大きく立ち上がり、器高が 1.1cm のものも含まれる。また、口径 9.6cm の土師皿には底径 7.0cm、器高 1.1cm で体部が 37 より長く、角度が浅く伸び、中位で外反するものが含まれる。

土師器坏は図示したものの他に 7 個体完形に近いものがある。口径 14.0cm 前後のものが 38、39、口径 14.6cm 前後のものが、40、41、15.0cm 前後のものが 42～46 である。未図化のものも大半が 15.0cm 前後のものである。38、39 が明灰色近く、他は淡黄灰色を呈す。内外面に煤が付着するものがあるが、特に 39 は多く付着している。底部には 42 には板状圧痕がみられないが、他は糸切り痕と板状圧痕が残る。40 は糸切りで離した時の刻みを未調整のまま残している。内底はすべてナデ調整が施され、43 が上げ底ぎみになる他は中央にかけて下がり、器厚を減じる。なお、43 は口縁端部を外反させた特徴をもつ。

出土遺物の時期は 13 世紀前後から前半にかけての時期とみられる。

SX062

調査区南西部で検出した。前述の SX023 同様の遺構で 9m 離れている。試掘によって北側の一部が破壊されているが、1 辺が 140cm くらいの菱形に近いプランとみられる。深さは 7cm で、検出時に集中する土師器が露呈していた。

北側に土師器の坏と小皿が集中して出土した。完形に近い土師器坏が 37 個体以上、小皿が 19 個体以上出土した。破砕した小片が散在しているが、3～5枚、正、逆位の両方で 3～5枚重ねた部分がみられる。また、土師器に混じって炭が検出され、灯明など火が用いられたとみられる。

出土遺物

土師皿は口径 9.0～10.2cmまでのものが出土したが、9.4cm 前後のものと 9.7cm 以上の 58～60、63～65 のやや大型のものに分かれる。内底にナデを施し、外底は糸切り痕を残す。板状圧痕が無いかもしくは極めて浅いものが 9 個体、残り 10 個体には板状圧痕が残る。色調は絶て淡黄灰色を呈し、53、62 の内外面にはススが付着している。

91 を除き、完形に近い土師器坏を 25 個体図示した。口径 13.5～15.2cm までの範囲があるが、14.5～14.7cm のものが大半を占める。内底はナデを軽く施し、外底は糸切り痕が残り、板状圧痕が残るもののが 13 個体ある。外底は 75 や 82 のようにわずかに凸状となったものがある。86 の内底には回転ヨコナデによる渦巻状の凹線が明瞭に残るものがある。淡黄灰色～明褐色を呈し、85 には煤が付着している。

出土遺物の時期は 13 世紀前後から前半にかけての時期とみられる。

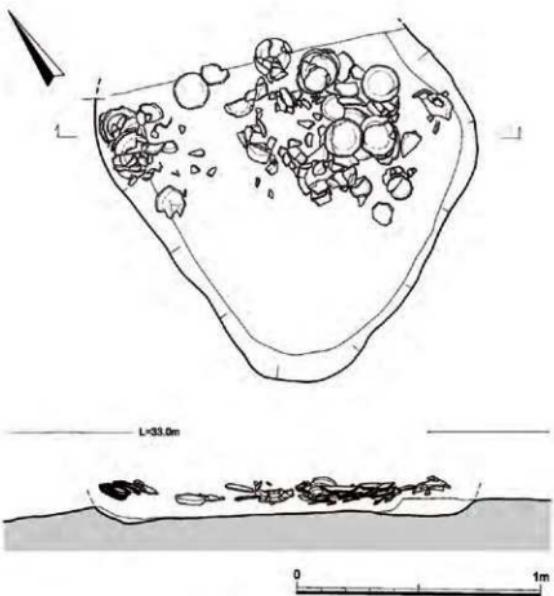


Fig. 20 SX062実測図 (1/40)



Ph. 11 SX062実掘状況 (南から)

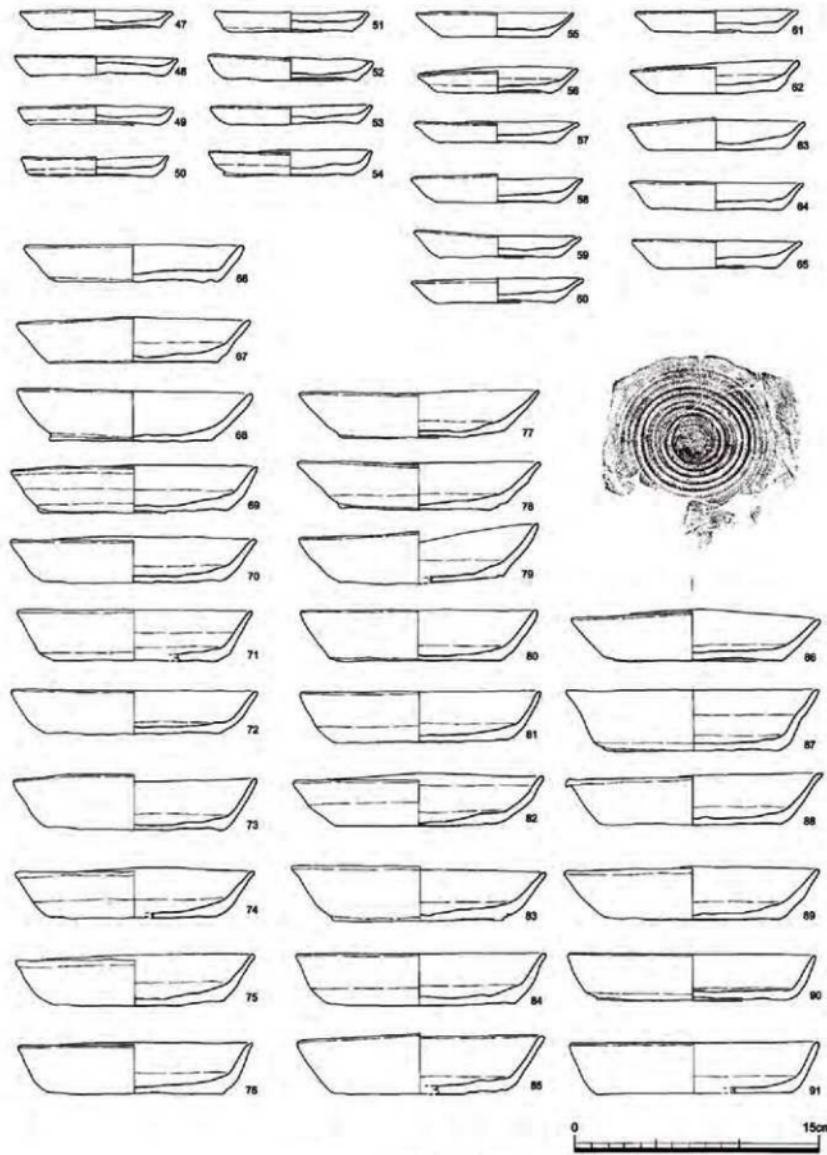


Fig. 21 SX062出土遺物実測図 (1/3)

SX006

調査区中央部で検出された。北辺が突出して不整形となり、底面より 20cm 高いテラス状になっている。全体としてはほぼ方形に近いプランで、軸長は東西、南北変わらず 360cm である。深さは 40cm で壁は斜めに立ち上がる。下端は東西 130cm、南北の最大長で 130cm を測る。

上面では中央の約 2m 四方に火熱を受けてブロック混じりの黄褐色ないし赤色の焼土が分布し、その周辺に炭や灰が広がっていた。また、土師皿の完形品を含む土師器坏、小皿の破片も出土した。

埋土はレンズ状に堆積し、上層に焼土や炭を含むが下層にはそれをほとんど含まない。

出土遺物は土師器坏と土師皿が大半を占め、完形が多い。これらは北側から中央にかけて落ち込んでいくような状況であった。遺物は他に鉄釘、石鍋片や陶磁器片があり、20cm 大の礫も遺物に混じって出土した。

壁や底面は焼けていないが、上層に分布した焼土や炭、さらに土師器坏、小皿、鉄釘や銅錢の出土から火葬墓に関連した施設の可能性がある。

出土遺物

92 ~ 94 は猿連弁文を有した龍泉窯系青磁碗 II - b 類である。92 は鎬が明瞭で青味が強い緑灰色を呈し、93、94 は緑灰色を呈す。95 は部分的に鎬を有するが、ヨコナデが施され全体に凸凹が多くみられる。また、ピンホールも多くみられ、粗雑な感を受ける。緑灰色を呈す。96 は無文の龍泉窯系青磁碗 I - a 類である。外面下半部にヘラ削りが細かく施され、縞状に釉の濃淡がみられる。97 は天目である。釉は黒色に発色し、胎土は灰色で白色の細砂粒を多く含む。98、99 は陶器耳壺の耳部である。98 は褐釉、99 は緑灰色に発色している。

100 は内外面焼された黒色土器である。体部上位が外湾し、外面体部に粗圧痕が付く。101 は土師器甕の底部である。外面に煤が付着している。102 は土師器底部を円盤状に割った遊具と思われる。103 は土師器碗である。内外面、ヨコナデとミガキが施されている。104 は瓦器碗である。105 は土師器甕である。外面に煤が付着している。

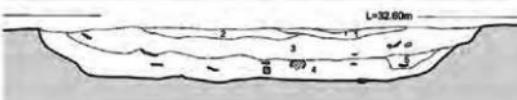
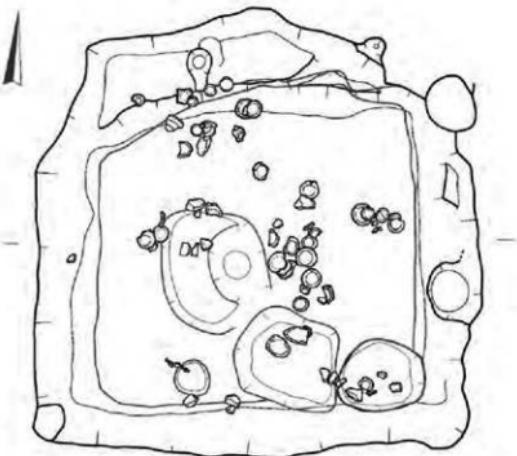
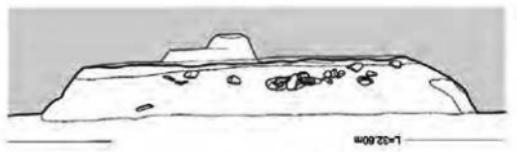
106 ~ 123 は完形ないし近い 18 個体の土師皿である。口径は 106 が最小で 8.1cm、123 が最大で 9.2cm を測るが、8.5cm 前後と 9.0cm 前後に集中する。外底は僅かに上げ底となったものが多く、体部と底部の境が明瞭となる。總てに糸切り痕が付くが板状压痕が無いかもしくは極めて浅いものが 8 個体、残り 10 個体には付く。内底は体部と底部の境が凹み、底部はほぼ平坦で軽いナデを施し、器厚も厚くなっている。

124 ~ 145 は完形ないし完形に近い土師器坏 22 個体である。口径は小形の 124 と高台が付いた坏 144、145 を除き、125 の最小 11.5cm から 133 の最大 14.8cm までの範囲があるが 13.5cm 前後と 14.0cm 前後に集中する。外底に板状压痕を有するものは 13 個体、無いかもしくは極めて浅いものは 5 個体である。137、139 の外底が僅かに突出するほかは平坦に近い。129、132、141 には煤が付着している。色調は淡黄色ないし、褐色を呈す。

124 は口径 9.5cm、体部中位で少し屈曲し内湾しながら立ち上がる。内底の体部と底部の境が沈線状となっている。口縁端部 2 箇所に煤の付着がみられ、灯明皿として利用されている。

144、145 は高台が付いた坏である。ともに口径 15.4cm 前後に復元できる。144 の底部が器厚であるのに対し、145 は他の坏に比べ薄い。ともに褐色を呈す。

146 は須恵質の捏鉢である。東播系に近いが口縁端部を含め内外面すべて灰色を呈し、胎土には黑色粒はみられない。147 は瓦質の捏鉢である。口縁端部を僅かに内側へつまみ出し、内面にハケ目を施す。



1. 灰・燒土
2. 灰色砂
3. 低土・炭ブロック（小塊）黒灰褐色砂
4. 灰褐色砂
5. 黑混灰褐色砂



Fig. 22 SX006実測図 (1/40)



Ph. 12 SX006検出状況（南から）



Ph. 13 SX006発掘状況（南から）



Ph. 14 SX006土層（南から）

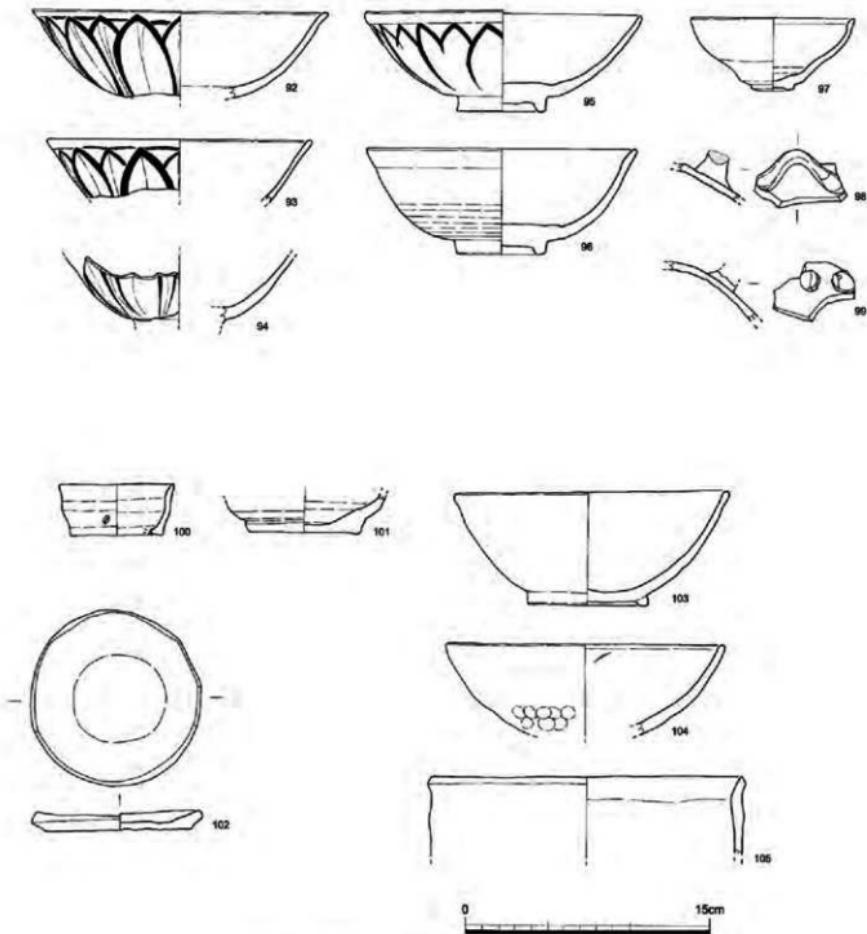


Fig. 23 SX006出土遺物実測図1 (陶磁器 土師器 1/3)

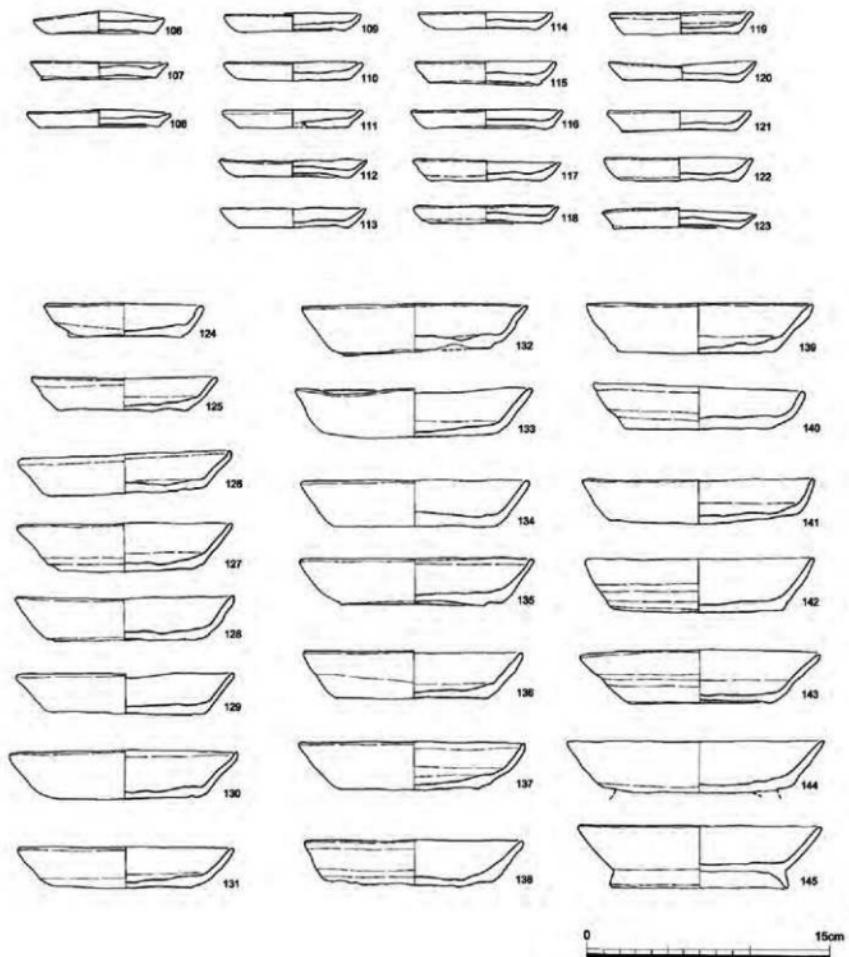


Fig. 24 SX006出土遺物実測図2 (土師器壺、皿 1/3)

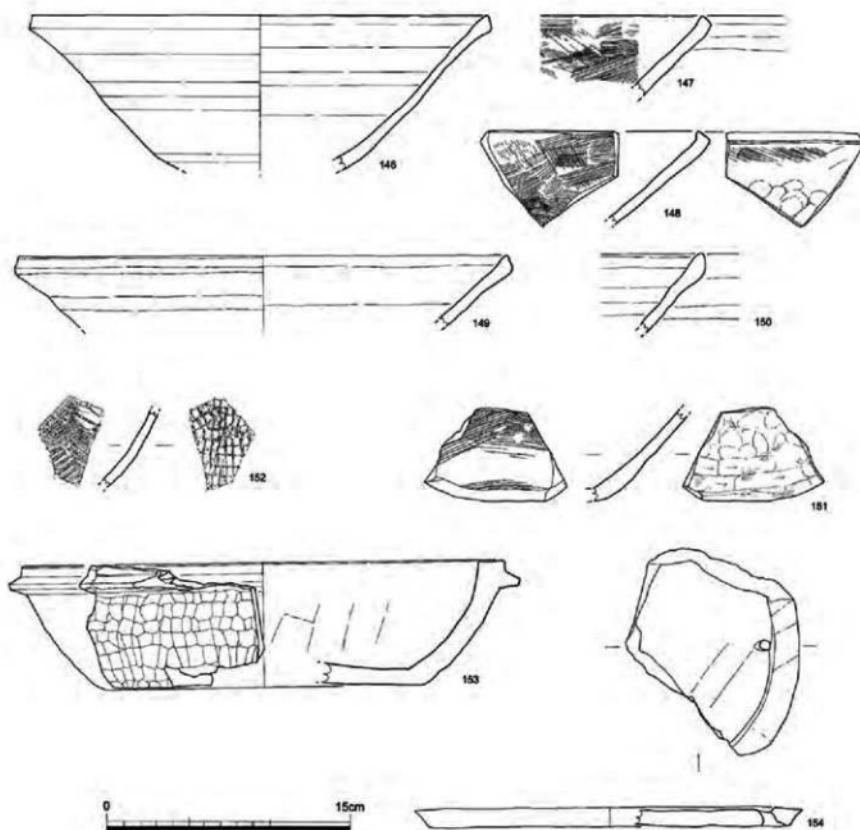


Fig. 25 SX006出土遺物実測図3 (土師器、須恵器等 1/3)

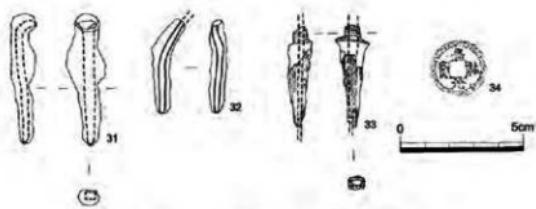


Fig. 26 SX006出土遺物実測図4 (鉄器、銅鏡 1/2)

色調は外面は灰色～灰白色、内面は灰黒色を呈す。148 も瓦質の捏鉢である。147 と近似するが、口縁端部のつまみ出しが大きい。内外面は暗灰色を呈す。149 は須恵質の捏鉢で東播系と思われる。胎土に黒色細粒を含む。150 も須恵質の捏鉢である。口縁端部のみ黒色、他は灰白色を呈し、軟質の焼成である。魚住窯系に近い。151 は瓦質の捏鉢である。胎土、内面は淡黄灰色、外面は黒灰色を呈す。152 は須恵器で壊破片と思われる。153 の滑石製石鍋は口縁部から鋤にかけて破損したものを削り直している。体部はわずかに湾曲する。154 は滑石製石鍋の底部である。補修孔が 1 箇所みられる。欠損した体部との境を削り、円盤を造りだしている。

出土遺物の時期は 13 世紀前半と考えられる。

鉄器

31 は鉄釘、32 は鉄釘、33 は鉄鎌の茎部である。34 の銅鏡は「嘉祐元寶」(1057 年) である。

SX074

調査区東際中央で検出された。長軸長 114cm、短軸長 94cm の楕円形プランを呈す。深さは 21cm を測り、埋土は他の中世遺構同様に灰色砂である。底面は船底状に断面は弧形を描く。

埋土中からは土師器壺 7 個体、土師皿 13 個体が出土した。特に南壁際に中央へ傾斜した土師器が重なり集中していた。中央の遺物や礫は底面から約 10cm 浮いた状態で出土した。

出土遺物

土師皿は図示した 7 個体の完形品のほか、2 個体の完形品が出土している。口径は 155 が最も小さく歪みがあるが 8.5 ~ 9.0cm を測り、他は 9.2 ~ 10.0cm までの範囲におさまる。図示していない土師皿の口径は 9.3cm と 10.0cm であるので 9.3cm 前後のものが 4 個体と最も多い。155 は底部が比較的大きいために体部が短く、大きい角度で立ち上がり、断面三角形に近い形状となっている。この 1 点のみが赤褐色を呈し、他は明灰色から淡黄灰色を呈す。板状压痕は 156 以外にはすべて付く。外底は平坦に近いが底部と体部の境が丸みをおびて浮いているものが多く、158 は全体的に丸みをもつ。

土師器壺の完形は 161 のみであるが、完形に近いものは図示した他に 3 個体がある。口径は未図化であるが 15.0cm のものが最小で 15.7cm までの範囲があり、15.7cm 前後のものが 4 個体と最も多い。外底は平坦に近いが 160 のように体部と底部の境が浮いて丸みをおびたものがある。板状压痕はすべての個体に付く。

出土遺物の時期は 12 世紀後半と考えられる。



Ph. 15 SX074土層（西から）



Ph. 16 SX074発掘状況(西から)

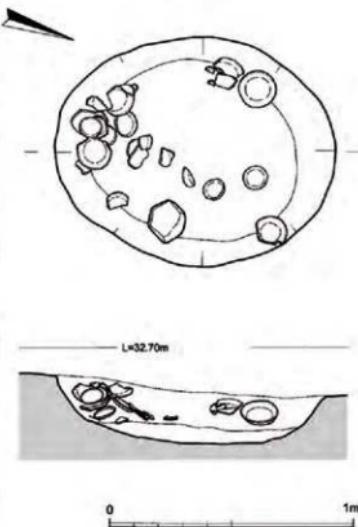


Fig. 27 SX074実測図 (1/20)

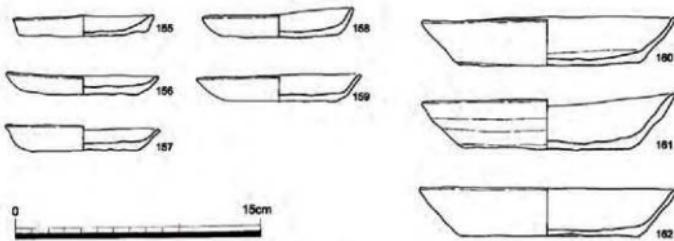


Fig. 28 SX074出土遺物実測図 (1/3)

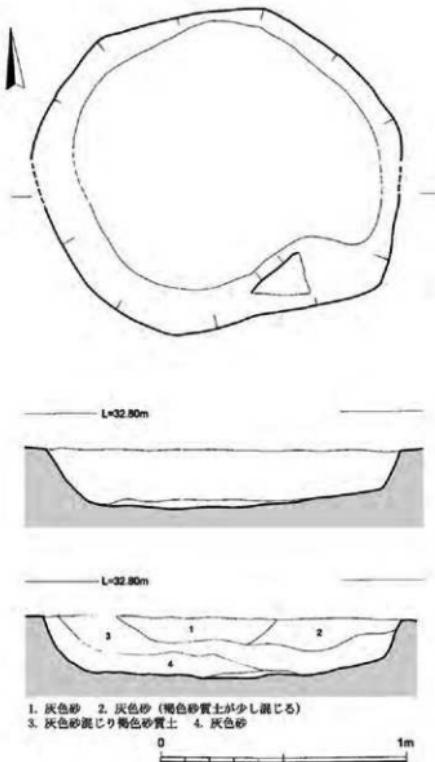


Fig. 29 SK028実測図 (1/20)



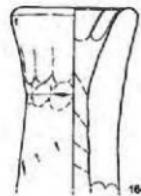
Ph. 17 SK028土層 (南から)

SK028

調査区中央部で検出された。径 130 ~ 150cm の円形プランを呈す。下端は東西 125cm、南北は最大で 110cm を測る。深さは 25cm、埋土は他の中世遺構と同様の灰色砂を多く含み東側に傾斜したレンズ状の堆積であった。

出土遺物

163 は口径 13.0cm の土師器坏である。褐色を呈す。13 世纪前半以降の時期とみられる。164 は弥生中期の器台で、混入したものである。



0 10cm

Fig. 30 SK028出土遺物実測図 (1/3)

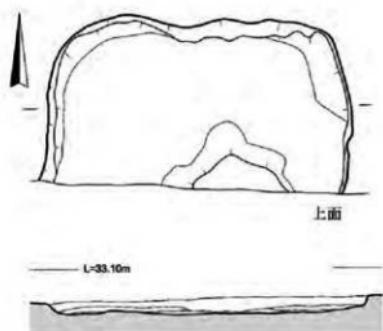


Fig. 31 SK018実測図 (上面 1/60)

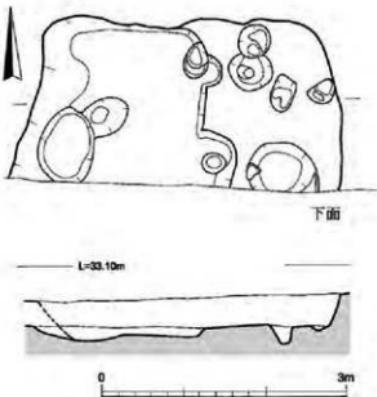


Fig. 32 SK018実測図 (下面 1/60)

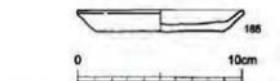


Fig. 33 SK018出土遺物実測図 (1/3)



Ph. 18 SK018発掘状況

SK018

調査区南縁中央で検出された。灰色砂の埋土から中世期のものと判断された。上面で東西長 365cm の方形プランを確認し、約 20cm の深さで起伏のある底面を確認した。その南側の一部が高く、2 つ土壙が重なる形状が認められた。その後、下面調査にて底面の深さも異なり切り合いのある土壙と判断した。西側の 018-1 は長方形プランを呈し、東西長 140cm、上面からの深さ 30cm を測る。

出土遺物

165 は口径 10.2cm の土師皿である。12 世紀後半以降と思われる。

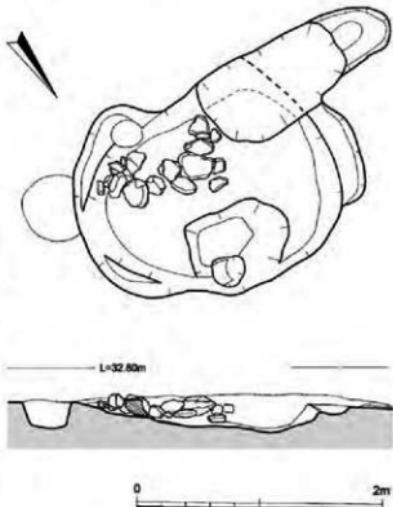


Fig. 34 SX004実測図 (1/40)

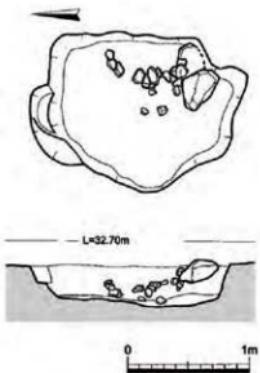


Fig. 35 SX003実測図 (1/40)

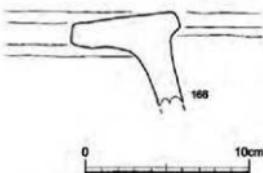


Fig. 36 SX003出土遺物実測図 (1/3)



Ph. 19 SX004完掘状況 (南から)



Ph. 20 SX003完掘状況(西から)

SX004

調査区中央部で検出された。柱穴と切り合いで、西側に突出した部分があるが、概ね長軸長 214cm、短軸長 165cm の楕円形プランとみられる。灰色砂の埋土から中世期と判断できる。下底は北西側に深く最深で 21cm を測る。底面が浅い南東部に 10—25cm 大の礫が集中して出土した。

SX003

調査区北縁で検出された。不整な形状であるが、南北にやや長い方形プランを呈す。埋土は灰色砂で中世期に属す。深さ 30cm、東側に礫が多く出土。SX001、002 同様に洪水の浸食によるものと思われる。

出土遺物

166 は混入した弥生中期後半の壺棺口縁部である。

SX030

調査区の中央で検出された。埋土は他の中世遺構同様の灰色砂層からなり略長方形プランを呈す。東西の長軸長 3.0m、西辺長 1.0m、東辺長 1.9m を測り、深さは 12cm 程度である。壁は緩やかに立ち上がり、特に西側は下端が不明瞭である。底面は凸凹が多くみられる。柱穴はすべて底面から検出された。



Ph. 21 SD056、SK066完掘状況（南から）

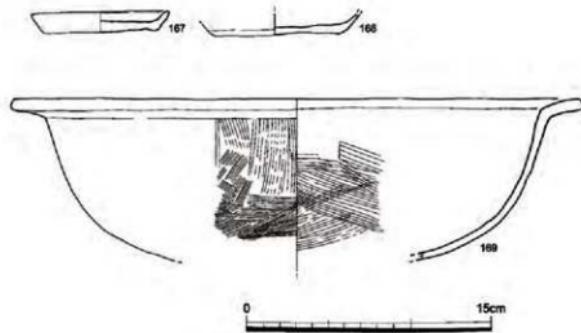


Fig. 37 SD056出土遺物実測図 (1/3)

4) 溝

SD056

調査区南西際で検出された。コの字に巡る溝で開いた西側に木棺墓 SK066 が造られている。溝の幅 110 ~ 135cm、深さ 25cm を測る。南辺の西端は擾乱で壊されている。北辺長 6.9m (内側で 5.7m) 東辺長は内側で 4.7m) を測る。溝の内側は周辺と比較し遺構が少なく基壇が存在していた可能性がある。

出土遺物

167 は、口径 8.5cm を測り、内底は平坦に近く、中央がわずかに盛り上がる。外底も平坦で板状圧痕を残し、体部と底部の境は明瞭である。淡黄褐色を呈す。168 は底径 7.5cm を測り、口径 11.0cm 前後と推定される。外底は平坦で板状圧痕を残す。明褐色を呈す。169 は土師質の土鍋である。復元口径 36.0cm を測る。外面の体部上位は縦位のタテハケ、下位から底部にかけては横位ないし斜位のハケ目を施す。



Ph. 22 SD117、118発掘状況（西から）



Ph. 23 SD117、118土層（西から）

内面は口縁部下はナデ消されているが、下位は斜位ないし横位のハケメを施す。外面に煤が付着する。

出土遺物の時期は13世紀前半以降で14世紀までは降らないと思われる。

SD056周辺出土遺物

198～200はSD056周辺から出土した遺物である。198は口径8.0cmを測り、内底の中央が盛り上がる。外底は上げ底で板状圧痕が浅く残る。口縁端部の1箇所に煤が付着し、灯明皿としての利用が考えられる。199の土師皿は口径9.2cmを測る。体部の上位が湾曲する。底部は内外平坦で外面に板状圧痕が残る。200は復元口径12.4cmを測る。外底に板状圧痕が残り、口縁端部に煤が付着する。

出土遺物の下限は14世紀前半代と思われる。

SD117、118

段落052、SB01西辺を北側へ延長した付近で途切れる。埋土は灰色砂礫土からなり、時期が中世で流水していたとみられる。底面は階段状となり、7、8層を切って2段堀状となっていることから掘り直しているものと考えられる。出土遺物については4、5層出土を

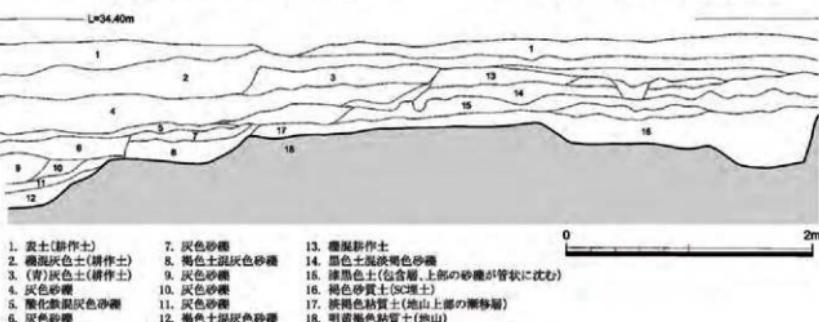


Fig. 38 SD117、118土層断面図 (1/40)

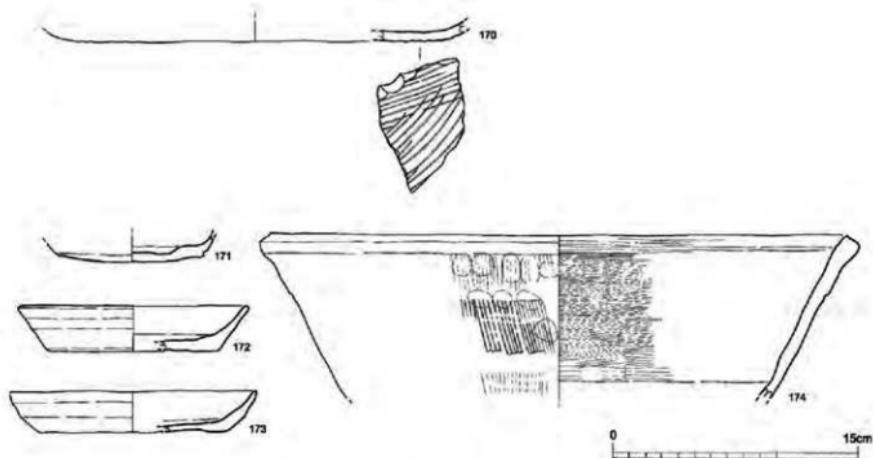


Fig.39 SD117、118出土遺物実測図1 (土師器 1/3)

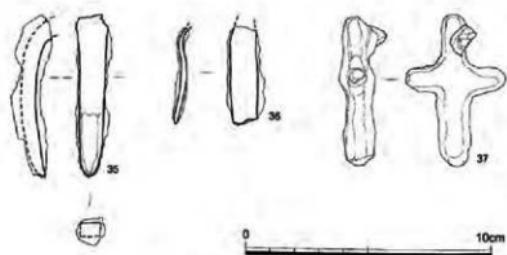


Fig. 40 SD117、118出土遺物実測図2 (鉄器 1/2)

SD117 上位、7、8 層出土を SD118、6、9 ~ 12 層出土を SD117 下位とした。

検出面である 15 層上面からの深さは SD118 の底面までが 60cm、SD117 の最深部は調査区外となるが、検出できた底面まではおよそ 1m である。

テラス状となった SD118 は西側では不明瞭となり、2 段目の落ち際である SD117 下位の上端は北側の調査区外となっている可能性がある。

出土遺物

170 は土師質の土鍋底部である。171 は底径 9.1cm を測る土師器壺である。外底はわずかに丸みをもち、体部と底部の境が浮く。糸切り痕が残る。内底は段を有して中央が凹む。172 は復元口径 14.2cm を測る土師器壺である。173 は小片のため口径の誤差が大きい可能性がある。174 は瓦質の鉢である。外面体部上位には煤が付着し、下位はタテハケがみられる。内面はヨコハケが残る。外面黒色ないし暗褐色、



Ph. 24 段落ち、SD032、033、035、036、
SX038発掘状況（南から）



Ph. 25 段落ち南西隅検出状況（北東から）



Ph. 26 SX038発掘状況（東から）



Ph. 27 SX038発掘状況（南から）

内面は青灰色を呈す。

出土遺物の下限は13世紀前半以降とみられる。

鉄器

35は櫛状の鉄器である。湾曲し、図示した下端がわずかに細くなる。36も不明鉄器であるが、鍔か。37も用途不明である。十字形をした本体に突起がつくが、別個体の鉄器が銹着したものか。

段落ち 052、SD032、033

大溝 SD117の西端付近から南北方向に約20cmの比高差の段落ちが検出された。この段落ちに沿った南北方向にSD052、SD032、033が検出された。また、その西側にも平行してSD035、SD036が走行する。

段落ちは調査区の南縁で西側へ直に曲がる。これに平行しSD327が検出された。この段落ちは水田耕作に伴い、溝は畦溝と考えられる。

SD035

段落ち、SD032と平行し、SD036とともに溜まり状の遺構SX038と接続する。

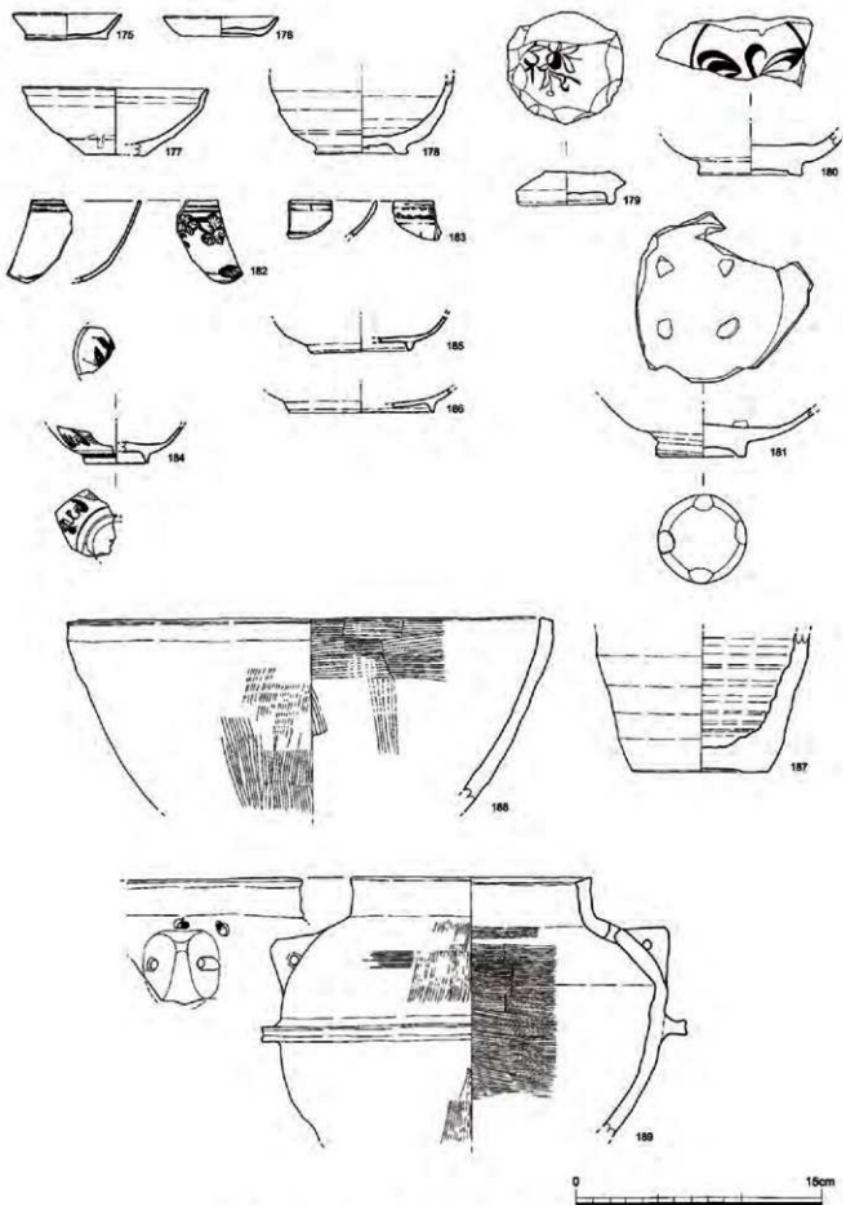


Fig. 41 SX038出土遺物実測図1 (陶磁器 土師器 1/3)

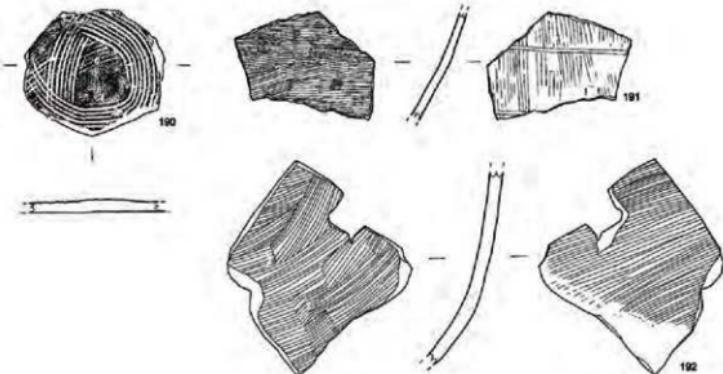


Fig. 42 SX038出土遺物実測図2 (土師器 1/3)

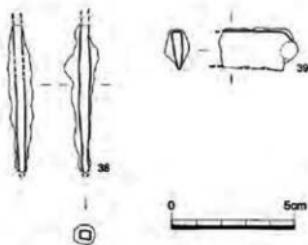


Fig. 43 SX038出土遺物実測図3 (鉄器 1/2)

出土遺物

194 は粉青沙器の青磁碗である。内面見込みと外面高台疊付に砂状の目跡が付く。外面体部に白泥が塗布されている。195 は瓦質の擂鉢である。外面は灰白色、内面は暗灰色を呈す。196 は巴文の軒丸瓦である。

出土遺物の下限の時期は 16 世紀代まで降る可能性がある。

SD036

幅 60cm、深さ 20cm で調査区西縁を南北方向に掘削している。北端は西側へ曲がっていくが、浅くなり延長は不明となる。南端は SX038 を切るが、延長は SX038 内に止まる。上端の検出面のレベルは変わらないが、底面は北端で急に上がり延長がなくなる。

出土遺物

175 の土師皿は口径 6.7cm を測る。外底には板状压痕を残し、淡赤褐色を呈す。184 は明代青花である。SX038

調査区の南西隅で検出された。楕円形に近いプランと考えられ、上端は南北 7m、西側は調査区外認められる。東西方向ではレンズ状の堆積がみられるが、底面は起伏が大きい。南西部に 10 ~ 30cm 大の礫

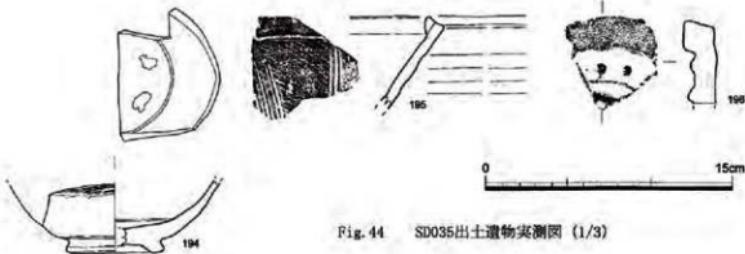


Fig. 44 SD035出土遺物実測図 (1/3)

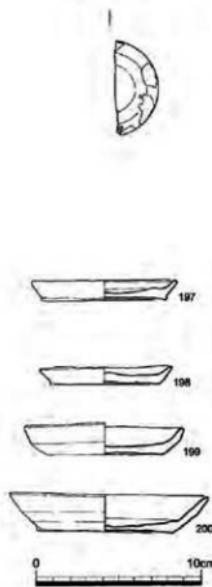


Fig. 45 SX002, SD059出土遺物実測図 (1/3)

が集中して出土した。取排水に伴う灌漑施設の可能性がある。
出土遺物

176 の土師皿は口径 6.9cm を測る。外底には糸切り痕を残すが、板状圧痕は無い。黄灰色を呈す。177 は天目である。体部は柿色、底部は黒色に発色し、禾状となっている。178 は無文の小形青磁碗である。疊付の釉が剥ぎ取られている他は全面に施釉されている。また、高台内側から外底にかけて砂目が付着している。胎土は明黃褐色、釉は明るい緑灰色に発色している。179 は龍泉窯系青磁碗IV類と思われる。外面高台内が輪状に釉が剥き取られている他は全面に施釉されている。見込みには草花文が籠彫りされている。胎土は灰色、釉は緑味が強いオリーブ色に発色している。底部周縁を円形に割り、高台も割りかけている。遊具を作りかけで失敗したものか。180 は龍泉窯系青磁碗I類とみられ、見込みに草花文を片彫りしている。高台は内側の抉りが浅く、疊付は幅広い。疊付およびその内側は露胎である。181 は三島手(朝鮮)青磁である。内面見込みと高台に各 4 箇所、重ね焼きの目跡を残す。高台外側は粗く削り出され、内側は浅く内傾している。疊付およびその内側は露胎である。釉は灰色に近い色調に発色している。182、183 は明代青花である。185、186 は白磁碗底部である。疊付は釉が剥ぎ取られている。釉は不透

明な白色ないし灰白色を呈す。187 は陶器壺である。外底は露胎である他はオリーブ色に発色した釉がかかる。188 は土師質の擂鉢である。口縁端部は水平に面取りされている。外面には部分的にタテハケが残り、内面は口縁部以下の上位がヨコハケ、下位には 6 本単位の刷目が施されている。淡黄褐色を呈し、胎土には白色砂粒を多く含む。189 は瓦質の湯釜である。内外面は焼された黒灰色を呈す。190 は瓦質の擂鉢底部である。内底に 9 本単位の刷目が円形に施されている。外底は褐色、内底は灰色を呈す。191 は瓦質の鍋もしくは鉢と考えられる。

外面のタテハケは部分的にナデ消され、その後横位の沈線を施す。内面は横位のハケ目が明瞭に残る。外面は淡褐色、内面は暗灰色を呈す。193 は土師質の鍋もしくは甕である。褐色を呈し外面下半部に

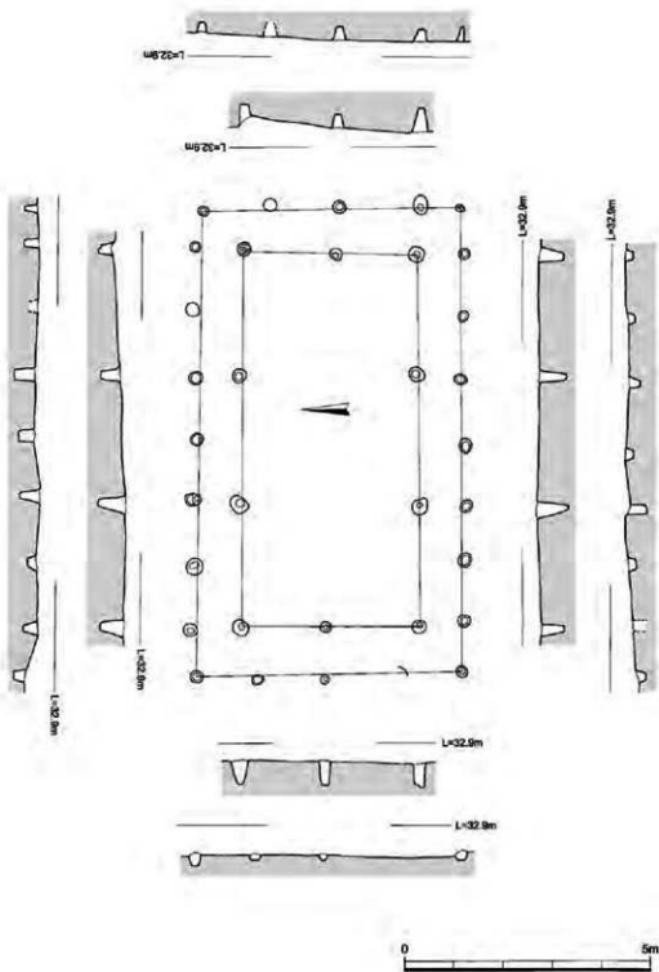


Fig. 46 SB01実測図 (1/100)

煤が付着する。193は弥生中期の丹塗りの壺である。

出土遺物の下限は15世紀代まで降るとみられる。

鉄器 38は鐵鏃の茎もしくは鐵釘とみられる。39は銹膨れが著しく、形状が不明瞭であるが刀子片と思われる。

5) 挖立柱建物跡

SB01

調査区北西部で検出された。調査時に黒色包含層を切って灰色砂～シルトの埋土からなる柱穴が整然と規則的に並んでいるのが確認された。周辺には柱穴が少なく、また、規模や構造からも主要な建

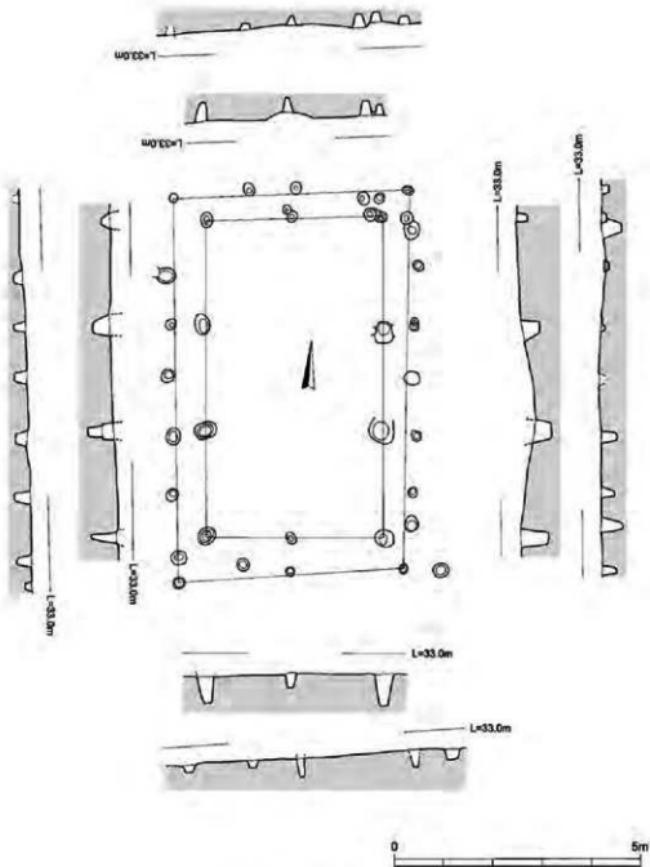


Fig. 47 SB02実測図 (1/100)

物であった可能性がある。

身舎が 2×3 間の東西棟である。梁行は360cmを測り、柱間180cm(6尺)に割る。桁行は760cmを測り、柱間は中央が広く270cm前後(9尺)、両端が240cm前後(8尺)を測る。

庇は4面に付き、身舎の柱筋から100cm離れている。北東隅の柱間が桁行側で狭い。

SB02

調査区中央部で検出された。身舎が 2×3 間の南北棟である。梁行は360cmを測り柱間180cmに割付ている。桁行は約640cmで柱間210cm前後(7尺)を測る。庇は4面に付きその柱筋は身舎の柱筋から50~90cm離れている。

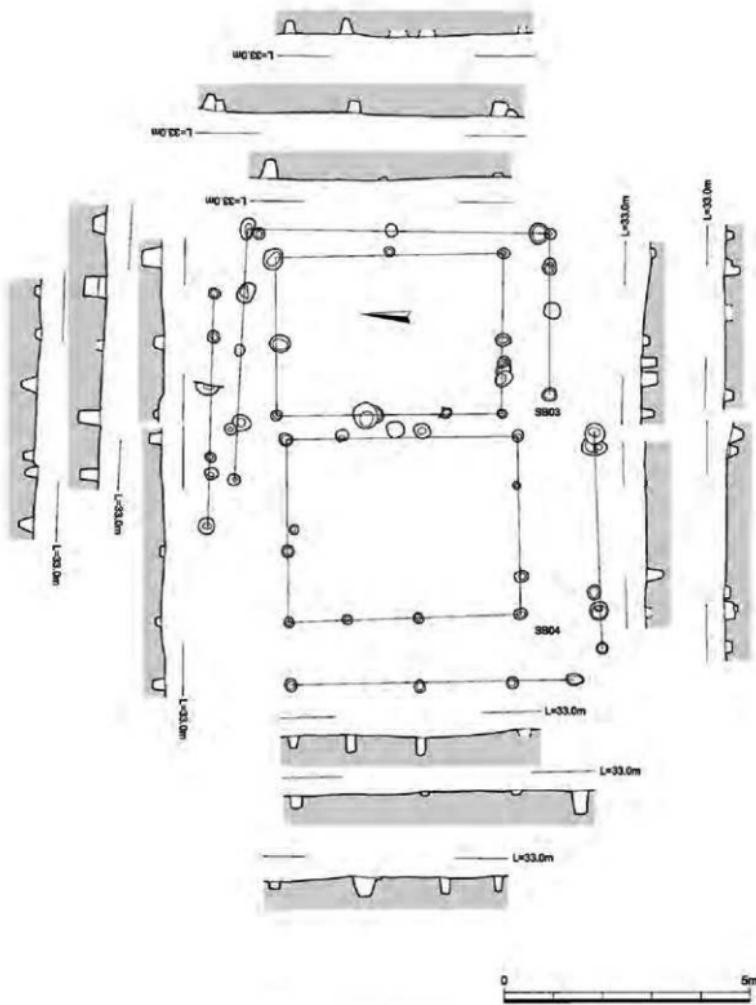


Fig. 48 SB03、04実測図 (1/100)

SB03、04

調査区中央の SB02 と切り合う位置となる。柱筋が直線的に並ぶものを組合わせたが、形状や柱間に疑問が残るところが多い。可能性がある建物として図示しておく。

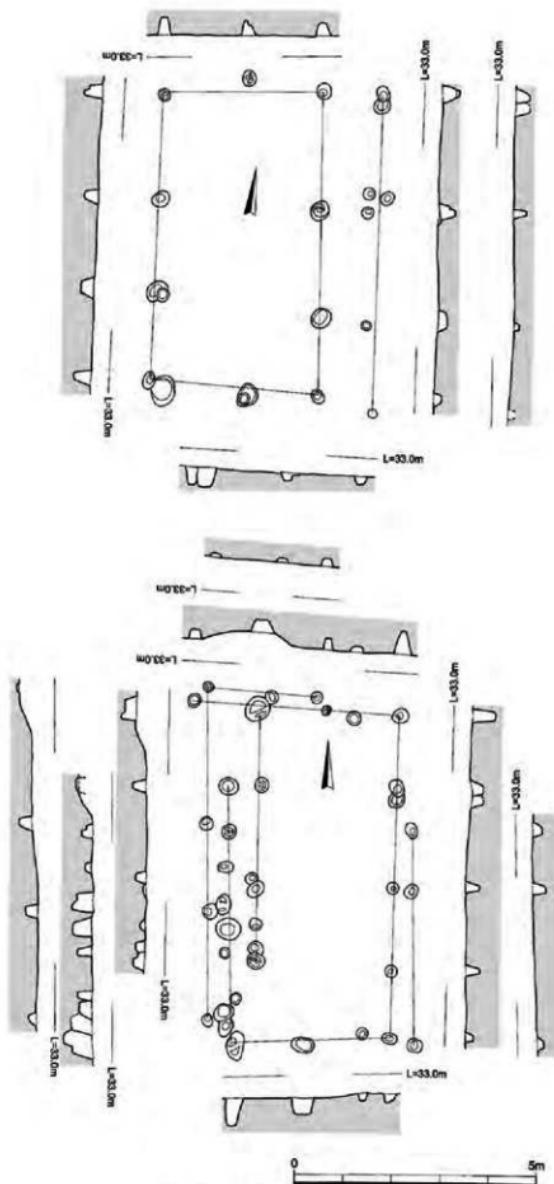


Fig. 49 SB05~06実測図 (1/100)

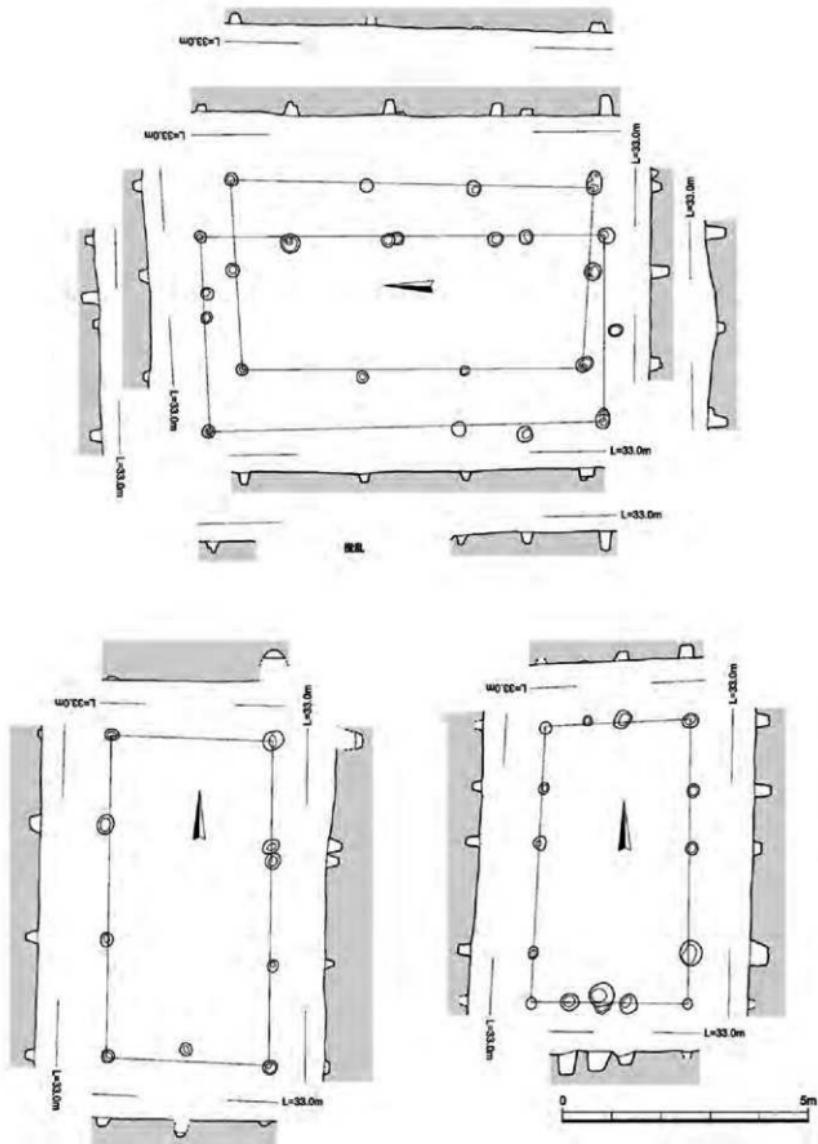


Fig. 50 SB09~12実測図 (1/100)

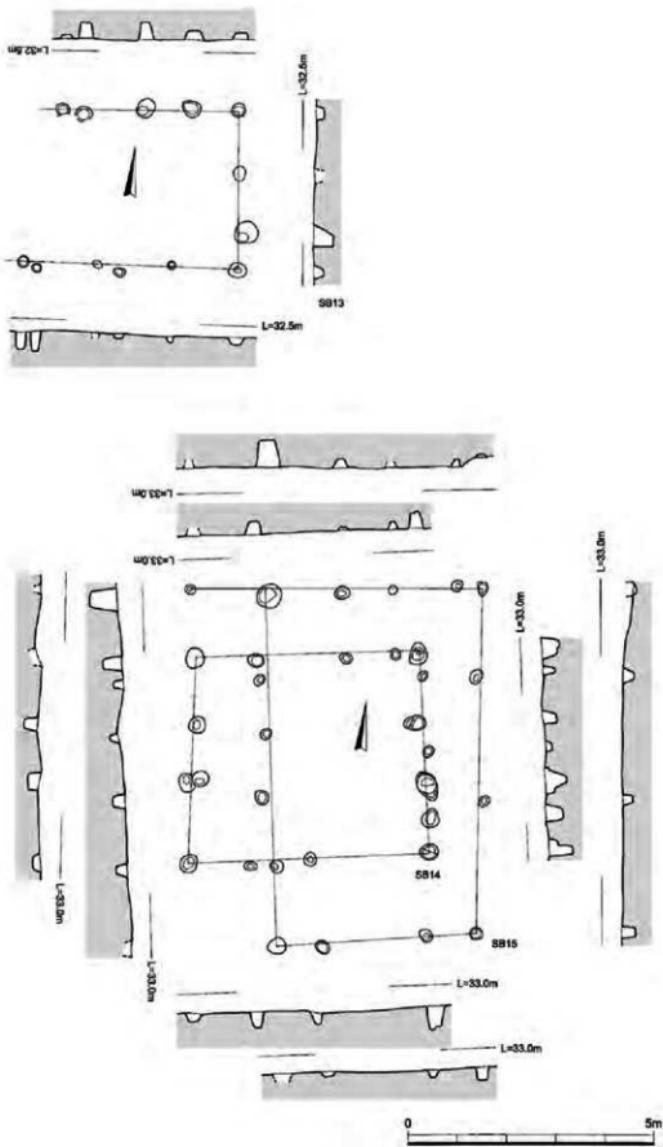


Fig. 51 SB13~15実測図 (1/100)

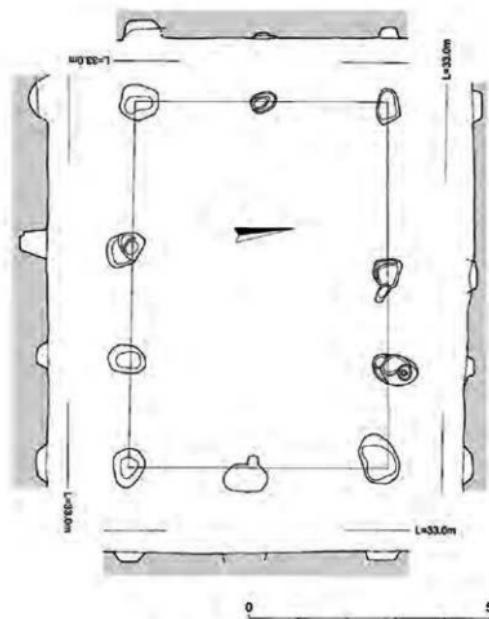


Fig. 52 SB16実測図 (1/100)

SB05

調査区西寄りの中央で検出された。身合は2×3間の南北棟である。梁行は北面335cm、南面350cm、桁行は東面625cm、西面595cmを測る。東側に側柱に対応した柱穴が検出され底の可能性がある。

SB06～08

SB05と切り合う位置で検出された。柱筋が並ぶものを組合わせ、建て替えられた3棟の南北棟を復元した。

SB09、10

調査区中央で検出された。2×3間と2×4間の南北棟の建て替えである。

SB11

調査区北西部で検出された。SB01と切り合う2×3間の南北棟である。梁行336cm、桁行660cmを測る。

SB12

調査区中央で検出された。梁行300cm、桁行580cmの南北棟である。

SB13

調査区北西隅で検出され調査区外へ延びている。梁行き320cmの東西棟である。

SB14、15

調査区中央で検出された。方形のSB14と底の可能性もある南北棟のSB15が切り合う。SB14は北面470cm、南面490cm、東面、西面ともに420cmを測る。SB15は梁行420～444cm、桁行710cm前後を測る。

SB16

調査区北寄り中央で検出された。柱穴が比較的大きいが、埋土が灰色砂土からなり中世と考えられる。2×3間の東西棟で、梁行335cm、桁行660cm前後である。

6) その他の柱穴、土壙等から出土した中世遺物

201～203は土師皿である。201は口径8.3cmを測り、外底に板状圧痕を残す。口縁端部に煤が付着している。202は口径8.9cmを測り、外底は僅かに上げ底である。203は口径9.3cmを測り、外底には板状圧痕を残す。204、205は口径10.5cm、器高1.9cmの口禿げの白磁皿IV類である。口縁端部以外全面に施釉されている。206は口径12.4cm、器高3.3cmを測る土師器壺である。外底に板状圧痕は無い。207は口径12.5cmの土師器壺である。外底に板状圧痕は無い。208、209は土師器壺の底部である。

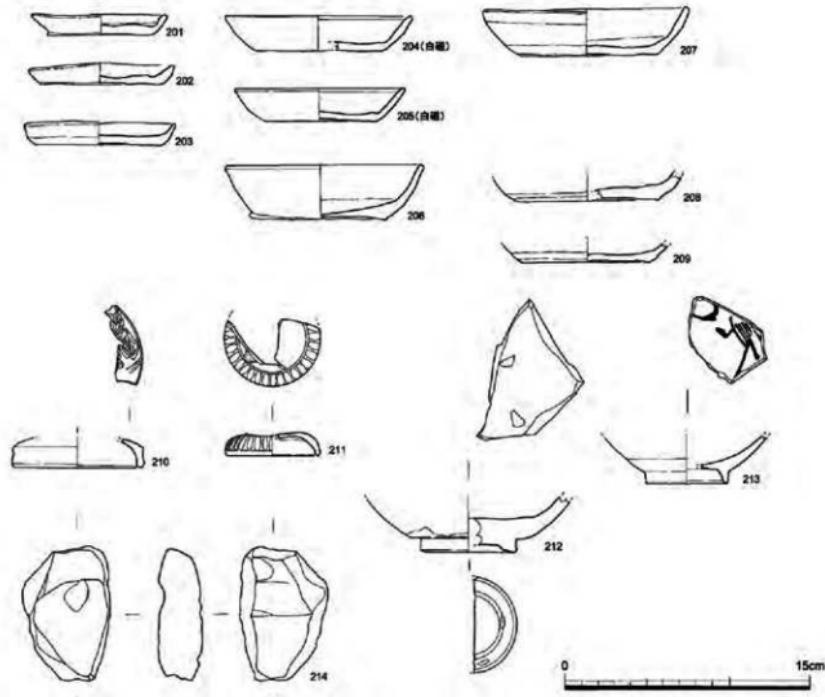


Fig. 53 その他の中世遺物 (1/3)

208 の底部は比較的器厚で外底に板状压痕は無い。209 の外底にはハケメが僅かに残る。210、211 は青磁合子である。210 は黄褐色、211 は緑青色に発色している。212 は青磁碗である。内底と高台疊付に粘土の目跡を残す。外面高台より内側は露胎である。213 は近世陶器碗である。外面体部下位から内側にかけては黒褐色に発色した釉がかけられた他は黄褐色に発色したガラス質の釉である。内面には淡黒釉で文様が描かれている。214 は粘土を焼いた壁体である。赤褐色を呈し、中にスサ状の繊維がみられる。

2. 弥生時代の遺構と遺物

1) 堪穴住居跡

SC013

調査区南東際で検出された。径 6.5 ~ 7.5m のやや東側に張り出した円形プランを呈すが、東側は別

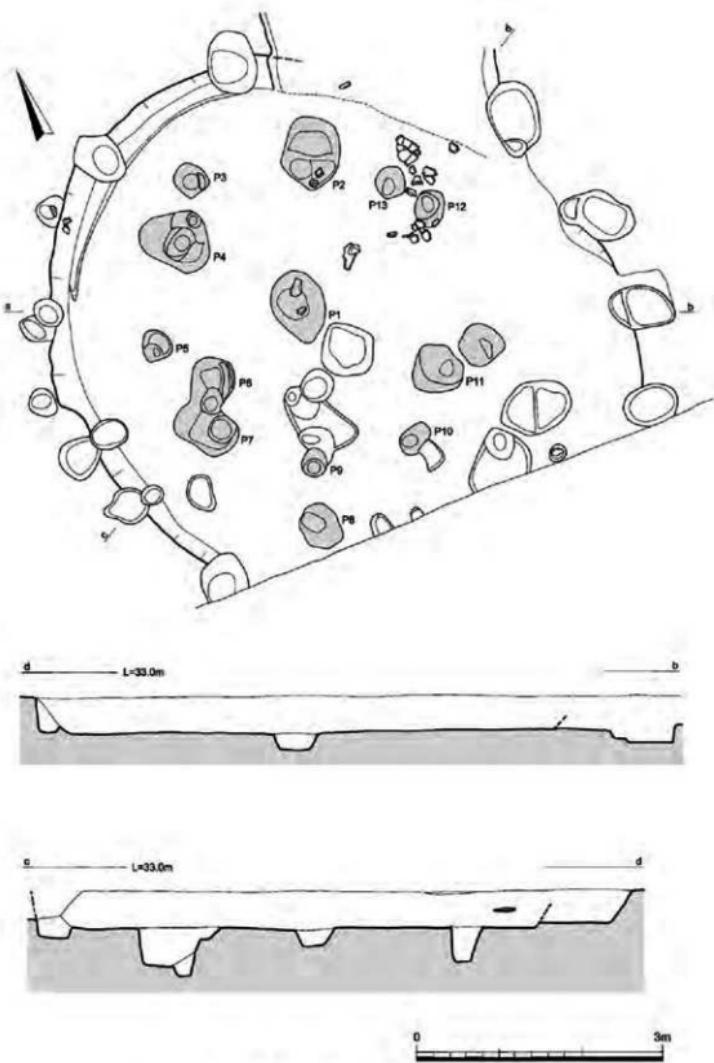
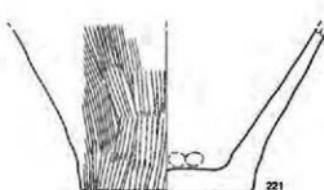
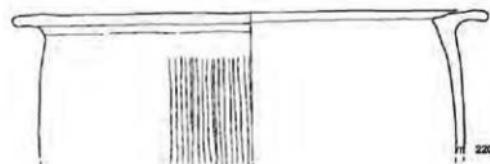
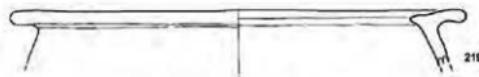
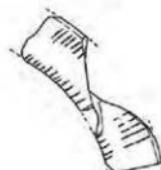
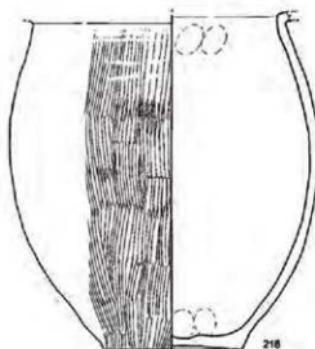
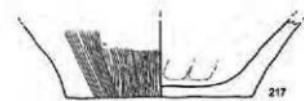


Fig. 54 SC013実測図 (1/60)

造構と切り合って不明確となっている。北東部はSC015を切り、その床面ないし、下層からは218～221の遺物が出土した。壁高40cm、壁溝は北西の一部に幅20cm、深さ約6cmで巡るのが検出された。

柱穴として12個の柱穴が巡っているのが確認されたが、P3、P6、P8、P13は配置が規則的では



0 15cm

Fig. 55 SC013出土遺物 (1/3)

なく、他の 8 個の柱穴で組んでいたと考えられる。その中でも P2, P4, P7, P11 の 4 個の柱穴は他と比較し、掘方は大きく深さも 63cm 以上で深いので、この 4 本で内部に桁を組んでいた可能性がある。

周壁を切って 11 個の柱穴が巡っているのが確認された。上端から深さ 60cm で垂木を入れたことも考えられるが、斜め方向の掘方や柱痕は確認できていない。

中央炉 P1 は深さ 20cm で上層に炭の黒色土が検出された。

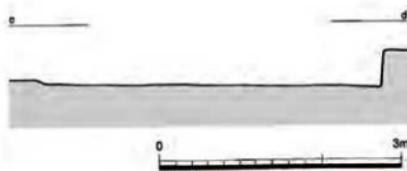
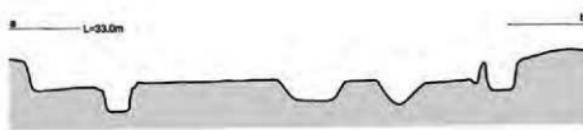
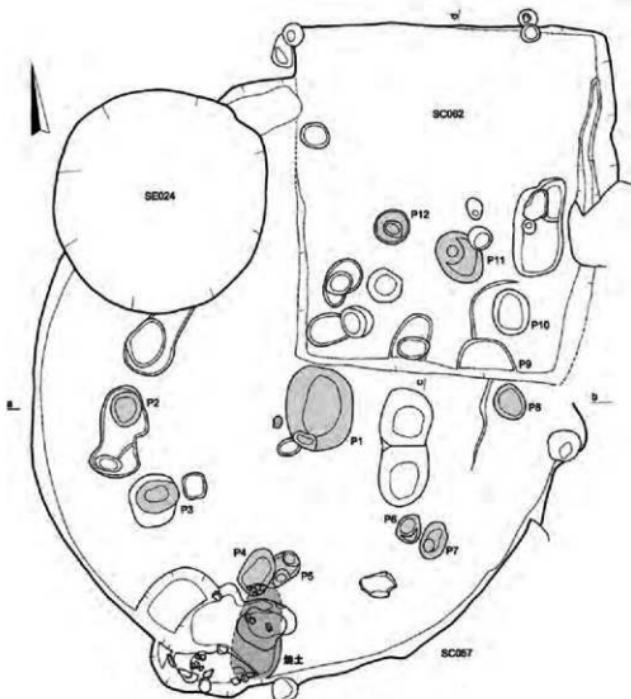


Fig. 56 SC067実測図 (1/60)

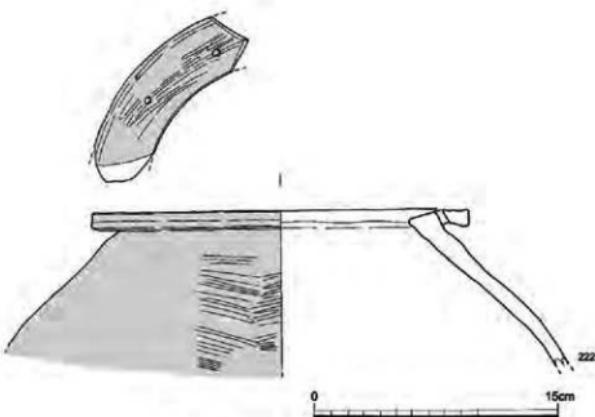


Fig. 57 SC057出土遺物 (1/3)

出土遺物

215 は上面から出土し、混入した龍泉窯系青磁皿である。216 は羽状文を施した前期の壺体部である。217 の壺底部の内面には炭化物が付着している。218 は SC015 と切り合った範囲の床面ないし 15cm 深い下層から出土し体部の 8 割が遺存する。底部はわずかに上げ底となり、体部には明瞭にハケメを残す。内面の口縁部から 5cm 程下がった位置に細かい彫ったような（ネズミカ）痕が全周している。219 の壺口縁部上面に刻みを施している。220 の壺体部のハケメはナデ消され不明瞭である。

221 は厚み 1.5cm の平底である。

Fig. 55 に図示した他、Fig. 69 の遺物 2 点も SC013 に属すると考えられる。

SC057

調査区の南寄り中央部で検出された。北側が SE024 に切られ、SC062 を切っている。このため不明瞭なところがあるが、径 6.6 ~ 7.0m のやや北側に張り出した円形プランとみられる。壁高 40cm で壁溝は検出されなかった。P1 が中央炉で、深さ 25cm を測る。中央炉を中心に P2 ~ P12 が巡っているが、北西部は SE024 に切られ不明となっている。また、P4 と P5、P6 と P7 は補強ないし建て替えによるもので、また、P8 は上面からの掘り込みの可能性があり、P9、P10 とともに深さ 10cm 位で、これらを主柱穴とするには疑問が残る。ただし、位置から 9 本位の主柱穴の配置とみられる。

南側の壁際に深さ約 30cm の不整形の土壙が検出され、焼土や炭がみられた。

出土遺物

222 は赤色顔料を塗布した磨研土器の壺である。口縁部に穿孔が 2箇所みられる。

SC050

調査区北西部で検出された。SX131、SC814 を切る。径 6.7 ~ 7.1m の南北にやや長い円形プランを呈す。壁高 32cm、壁溝は南東部の一部に幅 80cm、深さ 5cm で認められた。

主柱穴は P2 ~ P8 の 7 個が考えられるが P2 が 62cm、P6 が 37cm 以外は 10 ~ 20cm と浅い。地山との識別ができるず掘り足らなかつたものか。中央炉は P1 と考えられるが、穴が連結した形状をなし、中央の最深部で深さ 22cm を測る。

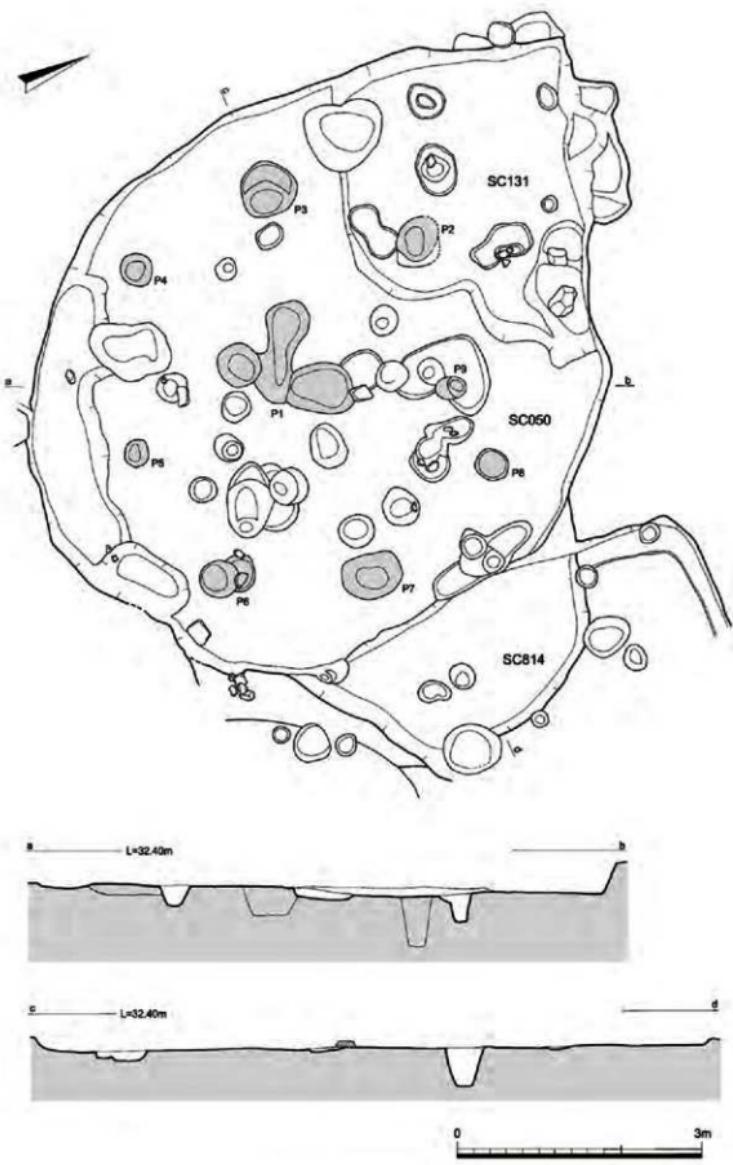


Fig. 58 SC050实测图 (1/60)

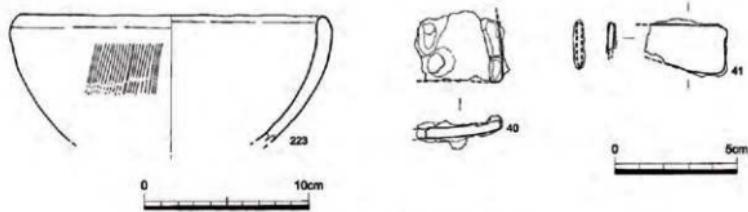


Fig. 59 SC050出土遺物実測図(1/3)



Ph.28 SC013完掘状況（南から）



Ph.29 SC057完掘状況（南から）



Ph.30 SC050完掘状況（西から）



Ph.31 調査区西側完掘状況（東から）

出土遺物

223 の鉢は火熱を受け、外面のほぼ全面に煤が付着している。外面、タテハケ後にミガキ、内面は器面が剥落して不明瞭であるが、ミガキないしヨコナデとみられる。

鉄器 40 は側縁が折り返したように厚くなるが、刃部は認められない。41 は両側縁が薄くなり、鉄鎌もしくは、刀子の可能性がある。

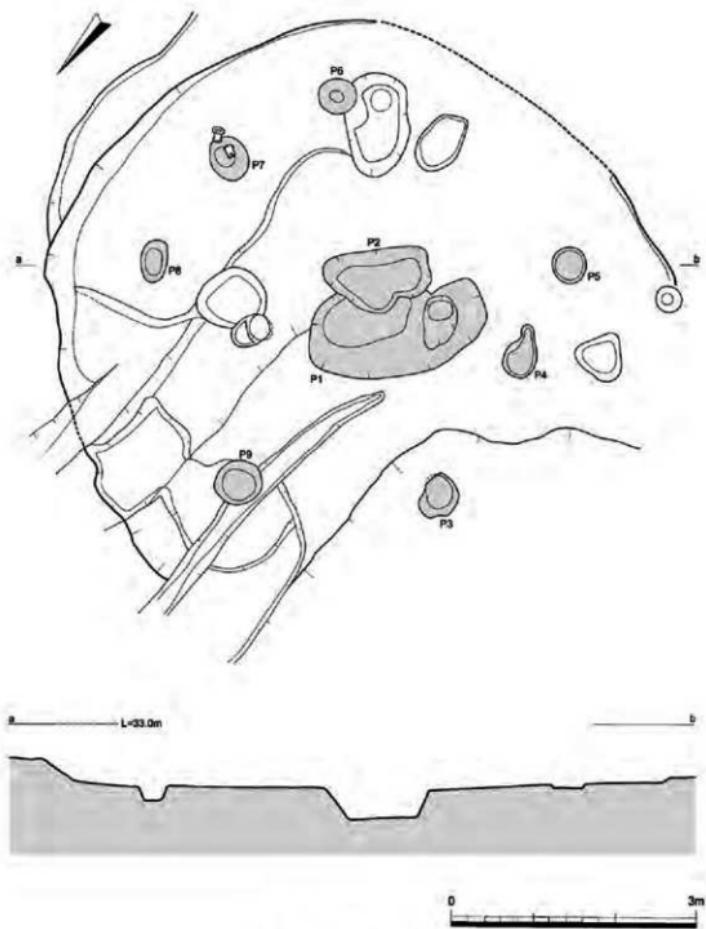


Fig. 60 SC329実測図 (1/60)

SC329

調査区の南西部で検出された。西側を中世の土壤 SX038 で破壊されているので不明確であるが、径 7.5m の円形プランをなすが、東側に弧状に最大幅 50cm、検出面からの深さ 9cm の張り出しがみられた。また、この張り出しの内側には幅 1.5 ~ 2.3m の底面より 7cm 高いテラスが検出された。竪穴の中心部は最も深く検出面からの深さ 32cm を測る。

主柱穴として P3、P5、P6、P8、P9 の 5 穴が対照的に配置されている。深さは P5 が掘り足らずで 3cm と浅いが、他は 14 ~ 31cm である。P9 は深さ 46cm を測り、掘方内からは器台 224、225 が出土した。中央の P1 は上部から検出し中世遺構の可能性がある。床面から検出した不整形の中央炉 P2

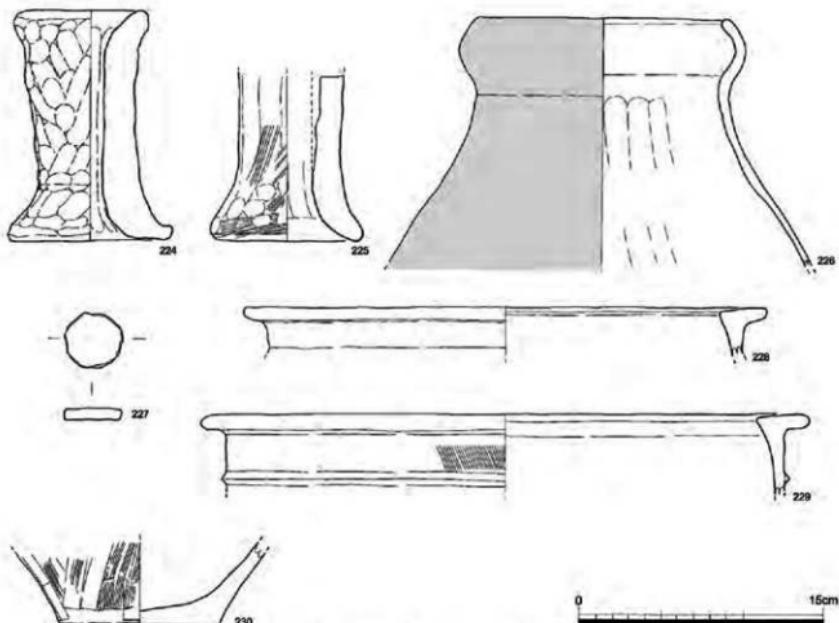


Fig. 61 SC329出土遺物実測図 (1/3)

は深さ 37cm を測る。

出土遺物

224 は床面より約 10cm 浮いた位置から出土した完形の器台である。指押さえの痕が顯著で粗雑な感じを受け、器厚である。225 は 224 の側から出土した器台で約 1/3 の遺存である。226 は赤色顔料を塗布した壺である。研磨はほとんどみられない。227 は赤色顔料を塗布した土器片を円形に打ち欠いたものである。228、229 は壺口縁部、230 は壺底部である。

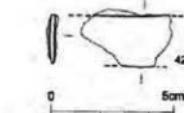


Fig. 62 SC329出土鉄器実測図 (1/2)

出土遺物から弥生中期中頃から後半にかけての時期とみられる。

鉄器 42 の形状は不明であるが、厚みは一定している。

SC863

調査区の北西部で検出された。径 6.5m の円形プランを呈し、SC865、SC889 を切る。壁高 33cm、北側には幅 20cm、深さ 4cm の壁溝が検出された。

主柱穴は P2 ~ P6 の 5 穴で深さ 48 ~ 60cm を測る。中央炉は不整形を呈し、深さ 14cm を測る。

出土遺物

231、232 は刻みを施した口縁部である。233 の小壺は外面は器面が剥落し調整不明、内面はナデ

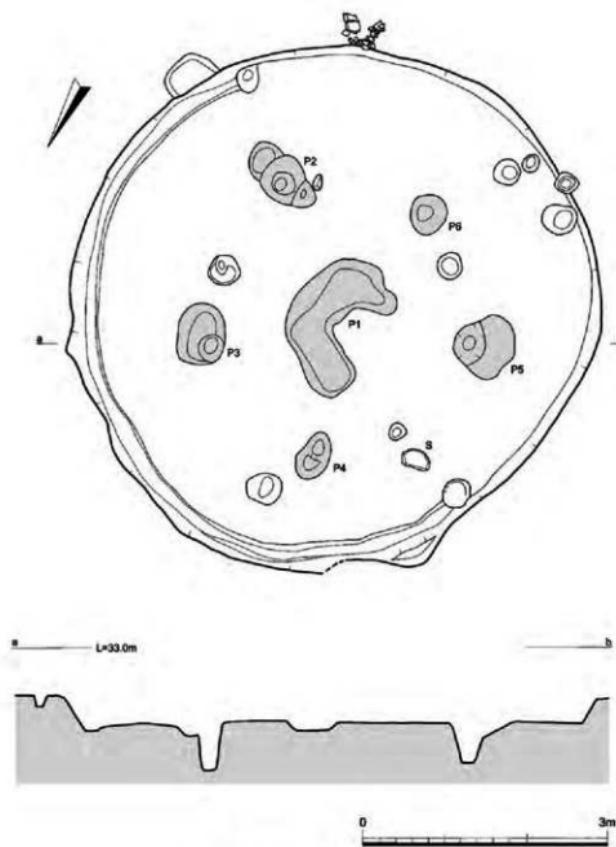


Fig. 63 SC863実測図 (1/60)



Ph.32 SC863完掘状況(北から)

ないしハケ調整とみられる。234 は貼り付けて肥厚させた壺口縁部である。235 の壺体部の外面に施されたハケメはほとんどナデ消されている。236 の壺体部の外面のハケメもほとんどナデ消されている。237、238 の壺底部は僅かに上げ底となる。238 の内面に炭化物が付着している。

出土遺物の時期は弥生中期中頃が下限とみられる。

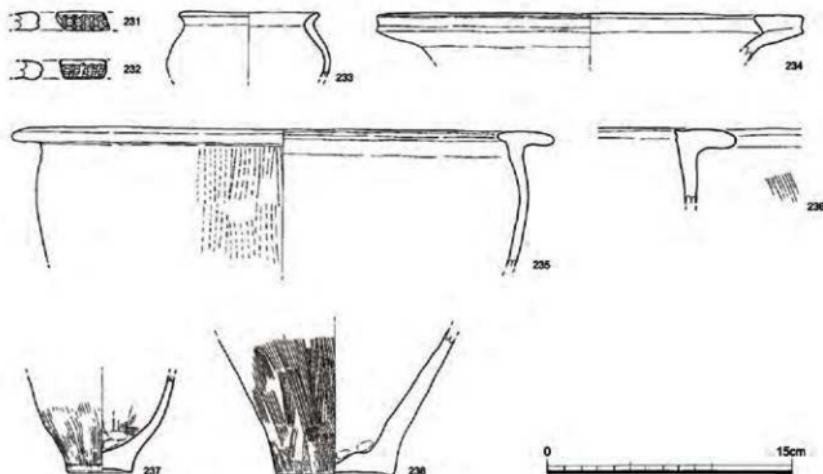


Fig. 64 SC863出土遺物実測図 (1/3)



Ph.33 SC866発掘状況 (北から)

深さ 32cm を測る。

出土遺物

239、240 は赤色顔料を塗布し磨研した高坏片である。241 の壺体部のハケメはヨコナデによってほとんどナデ消されている。242 は壺とみられ頸部下の体部外面に刻みを施した断面が略三角形の突

SC866

調査区の北西部で検出された。東西長 7.0m、南北長約 6.0m の楕円形を呈す。壁高は南側で 50cm を測り、壁に沿って幅 120cm、床面からの深さ 8cm 前後の溝が全周するが、帖床施工前の掘方ないし中央の硬化面との差異と思われる。

主柱穴は P2～P7 の 6 穴で、P7 は掘り足らなかつたためか深さ 15cm と浅いほかは 40～82cm と深い。中央炉 P1 は穴が切り合ひ、中央部の炉底は

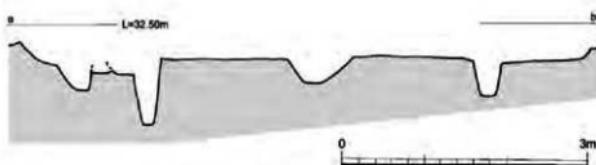
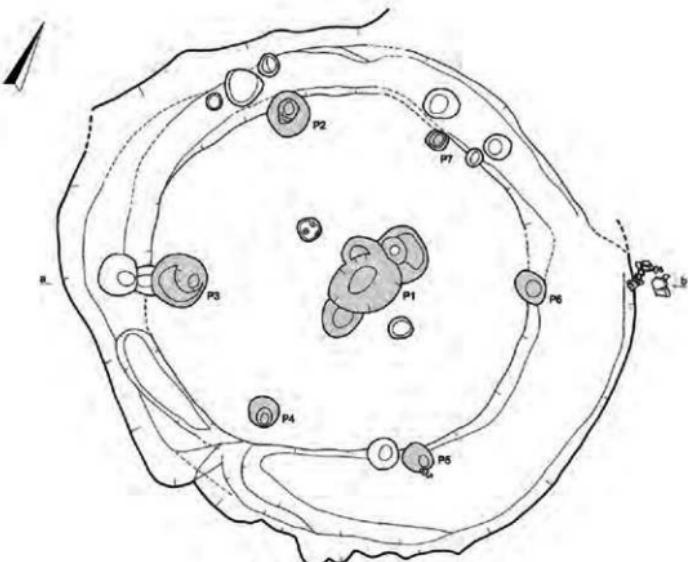


Fig. 65 SC866実測図 (1/60)

帯を貼り付けている。突帯は水平から下方へ高さを減じながら湾曲し、破片際で途切れる可能性がある。この湾曲する付近の上部に別の突帯が平行して貼り付けられている。内外面ナデ調整で、外面体部と内面口縁部にハケメがかすかに残る。244 は赤色顔料を内外面に塗布した鉢口縁部である。245 は壺口縁部である。

出土遺物の時期は弥生中期中頃が下限とみられる。

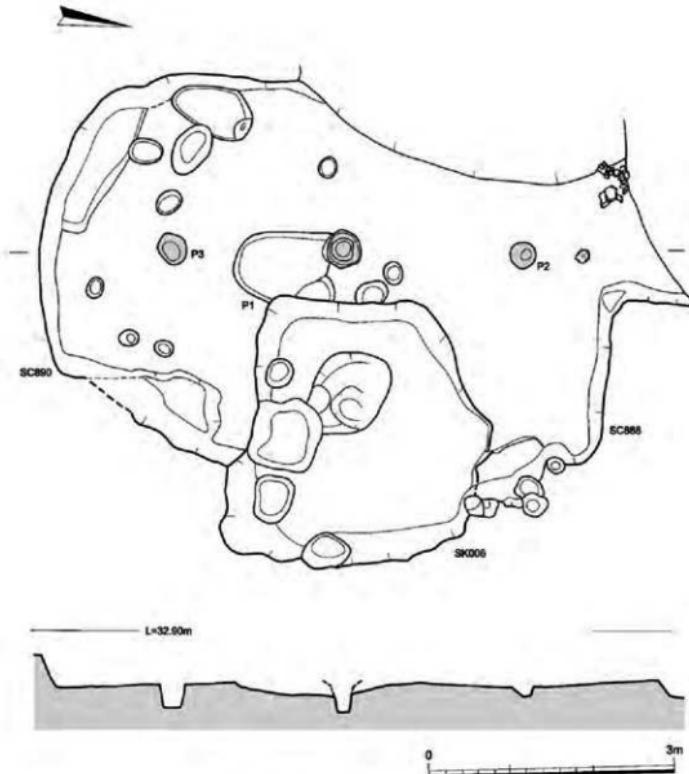
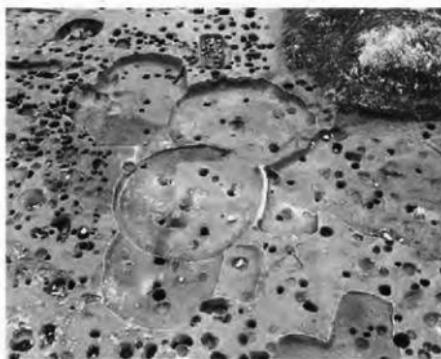


Fig. 66 SC888、SC890実測図 (1/60)



Ph.34 調査区北西部住居跡群完掘状況（北から）

SC888、SC890

調査区中央で検出された。円形窓穴住居跡 SC888 と中世土壤 SK006 に切られれている。南北で別の遺構が切り合っていると判断し、北側を SC888、南側を SC890 とした。しかし、底面の深さは 30cm 前後で変わらず、SK006 をはさんだ東辺が連続しているともみられ、1 つの遺構の可能性もある。

南辺の弧状の幅は約 3.5m、東辺の張り出した部分を含めた最大幅は 4.7m を測る。SC888、890 合わせた南北の主軸長は 7.1m を測る。中央付近の P1 は中

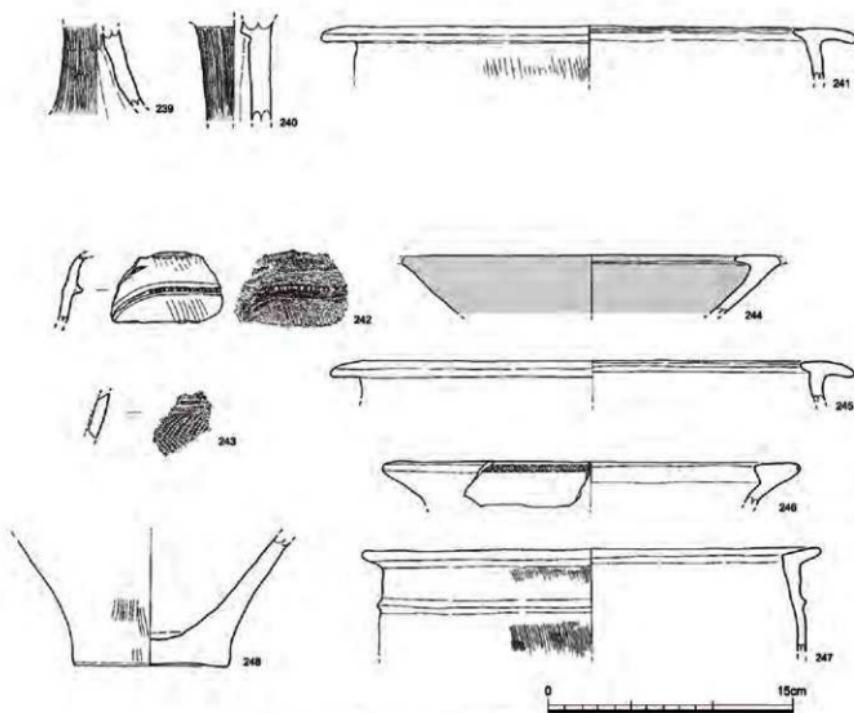


Fig. 67 SC888、SC890出土遺物実測図 (1/3)

央の最深で床面から 12cm の浅皿状の形状を呈し炉とも考えられるが、焼土は検出していない。

出土遺物

243、246、247 は SC890 から、248 は SC888 から出土した。243 は貝殻で羽状文を施す。246 の口縁部上面には黒色顔料が塗布された可能性がある。247 の外面体部には細かいハケメが明瞭に残る。胎土は細かい砂粒のみで精良である。248 は僅かに上げ底となった壺底部である。

出土遺物の時期は弥生中期前半から中頃にかけての時期が下限とみられる。



Ph.35 SC012、015、016完掘状況（東から）

SC012、015、016

調査区の南東部で辺を接して3軒の長方形堅穴住居跡が検出された。SC016は短軸長3.0m、長軸長4.0m、深さ27cmを測る。東辺中央に深さ13cmの土壤が検出され、平石が出土した。また、その南側床面直上からも礫が出土した。

SC015

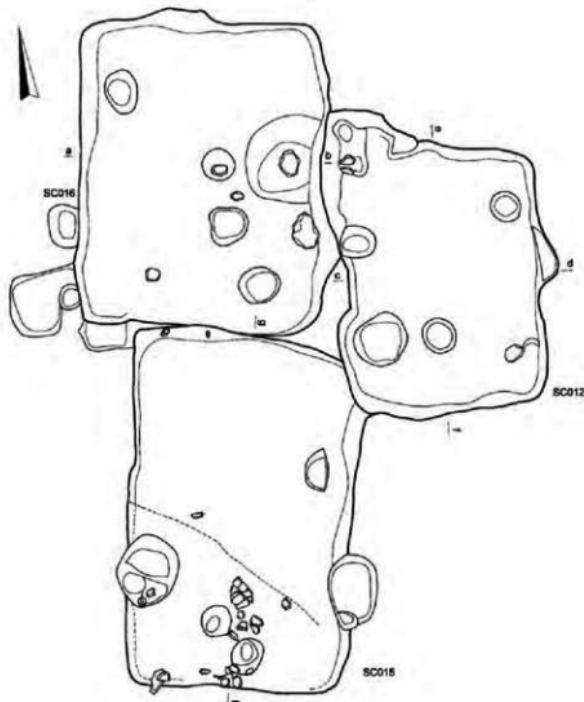
北辺は長さ約3.0mを測り、西側が北側へ張り出す。南側は円形堅穴住居跡SC013に切られ不明であるが、東辺は3.0m以上は延びていく。深さ41cmを測る。

出土遺物

249、250はSC013と切り合った範囲の床面近くから出土し、SC013に属したものと考えられる。249は完形の小鉢である。外面に煤が一部付着し、火熱を受け変色した部分もみられる。250外面のタテハケはヨコナデにより不明瞭となっている。

SC012

東西辺の長さが異なり歪であるが、短軸長2.35m、長軸長3.4mを測る長方形プランを呈す。深さは33cmを測る。



L=32.50m



Fig. 68 SC012, 015, 016 実測図 (1/60)

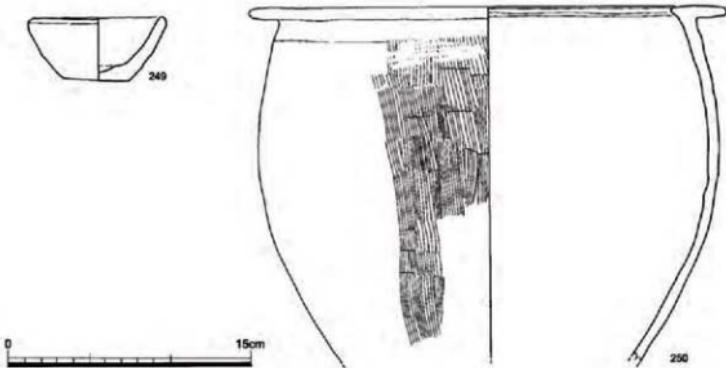


Fig. 69 SC015出土遺物実測図 (1/3)



Ph.36 SC065内遺物出土状況

SC065

調査区南西部で検出された。短軸長 2.7m、東辺長 4.2m、西辺長 3.5m を測る長方形プランを呈す。深さは 40cm を測る。P1(深さ 22cm)、P2 が床面から検出された。

出土遺物

251 ~ 253 の器台はほぼ中央の床面ないし 5cm 程上部から出土した。253 はほぼ完形で他の 2 点も完形に近い。254 も器台と同じ位置から出土した。体部中位で水平に残り、打ち欠いた可能性がある。鉄器 43 は両側縁が肥厚し、刃部の形状はみられない。

SC079

調査区東縁中央で検出された。東辺が SC078 と接する。同様の方形堅穴住居跡が南北方向に長軸をとっていることや、南、北辺の中央付近に折れ曲がった部分があることから、西側 SC077 と東側 SC079 の 2 つの造構が切り合っていた可能性が高いが、底面のレベルは同じである。

南、北辺長同じく 5.25m、東辺長 3.6m、西辺長 4.05m を測る。切り合っていた場合、西側造構の北辺は約 3.1m、南辺長は約 2.7m を測る。検出面からの深さは 25cm を測る。中央付近の床面から検出された P1 からは砥石が出土した。P1 は深さ 7cm の浅皿状に深さ 20cm の柱穴が掘り込まれている。

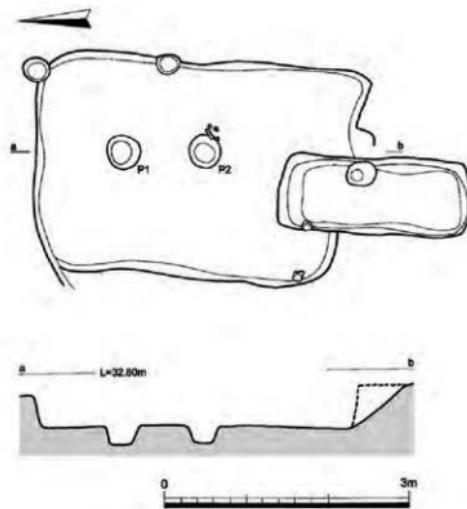


Fig. 70 SC065実測図 (1/60)

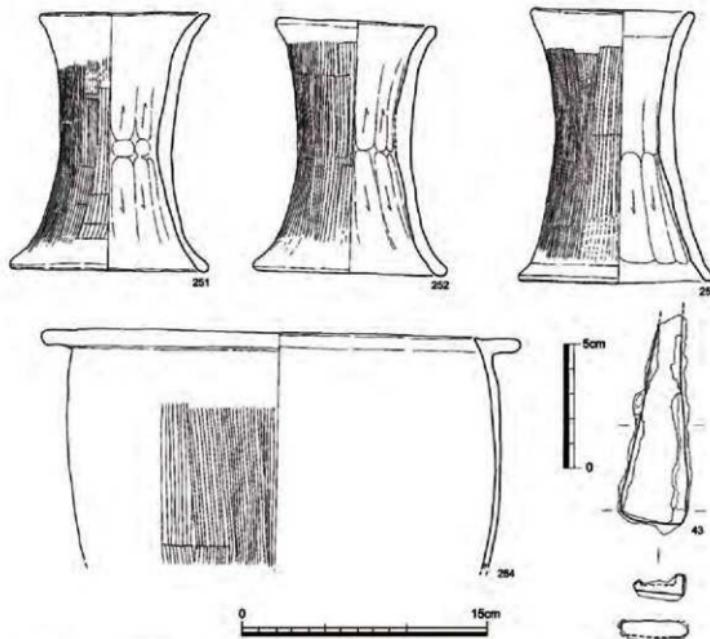


Fig. 71 SC065出土遺物実測図 (1/3)

Fig. 72 SC065出土鉄器実測図 (1/2)

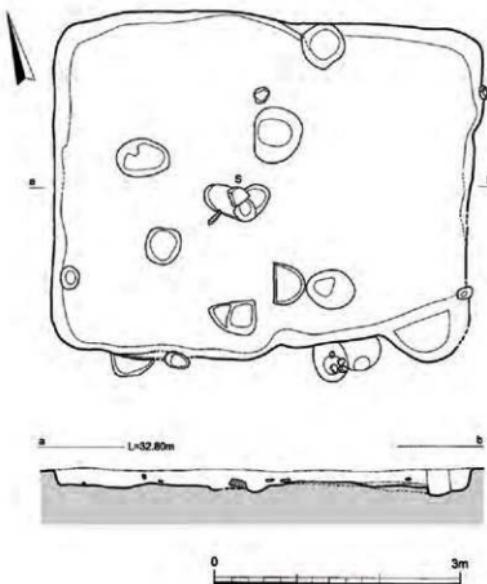


Fig. 73 SC079実測図 (1/60)

出土遺物

255 は前期の如意口縁端部に刻みを施した甕である。256、257 は弥生中期中頃の甕である。258、260、261 は西側の SC077 から出土した。293 はヘラ状工具で有軸羽状文を施している。259 は外面に赤色顔料を塗布し研磨した蓋である。遺存部の 1 箇所に孔を有す。260、261 外面のタテハケはナデ消され不明瞭となっている。

出土遺物の時期は弥生中期中頃から後半にかけてとみられる。

SC078

調査区東際中央で検出された。SC079 に西辺が接し、東側は調査区外となる。西辺長 340cm、壁高 27cm を測る。

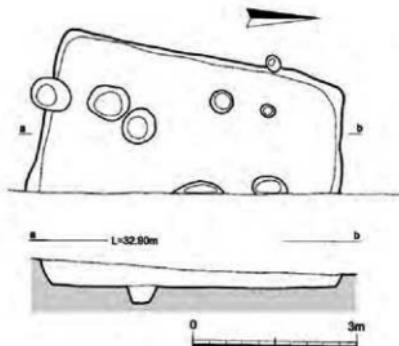
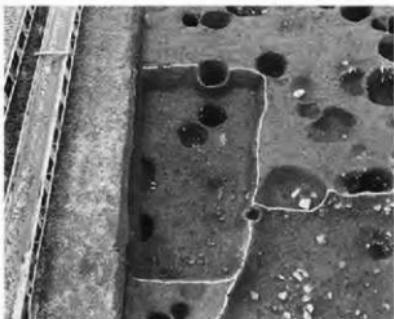


Fig. 74 SC078実測図 (1/60)



Ph.37 SC078実測図 (北から)

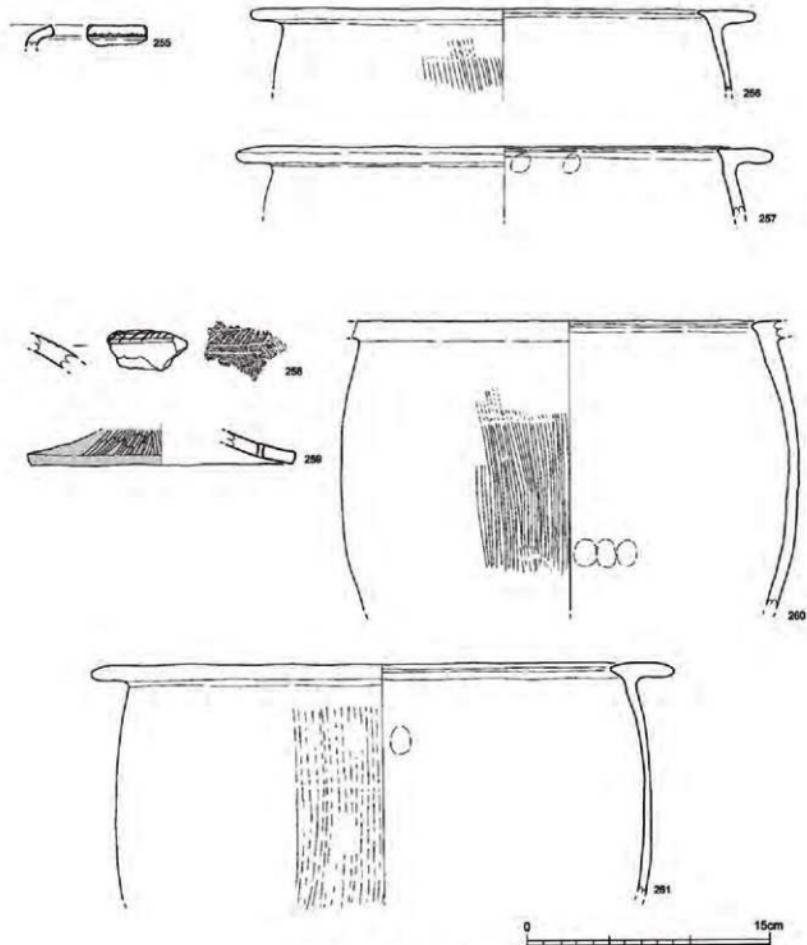


Fig. 75 SC078、SC079出土遺物実測図 (1/3)

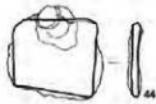
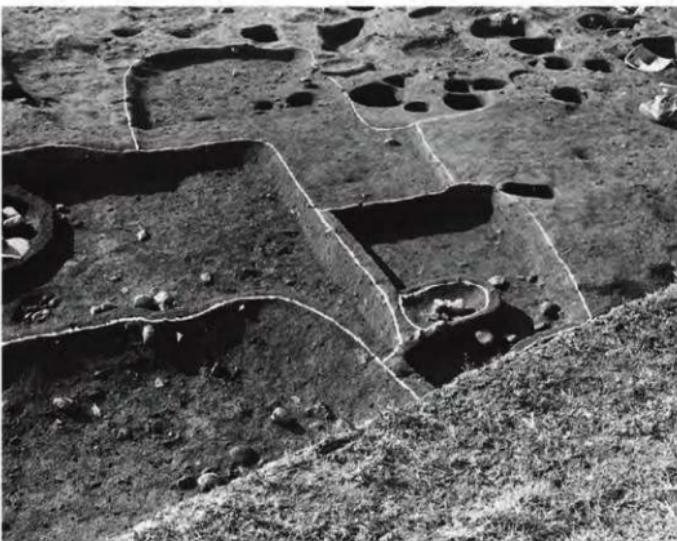


Fig. 76 SC079出土鐵器実測図 (1/2)



Ph.38 SC047、048、049完掘状況（北から）



Ph.39 SC047完掘状況（北から）

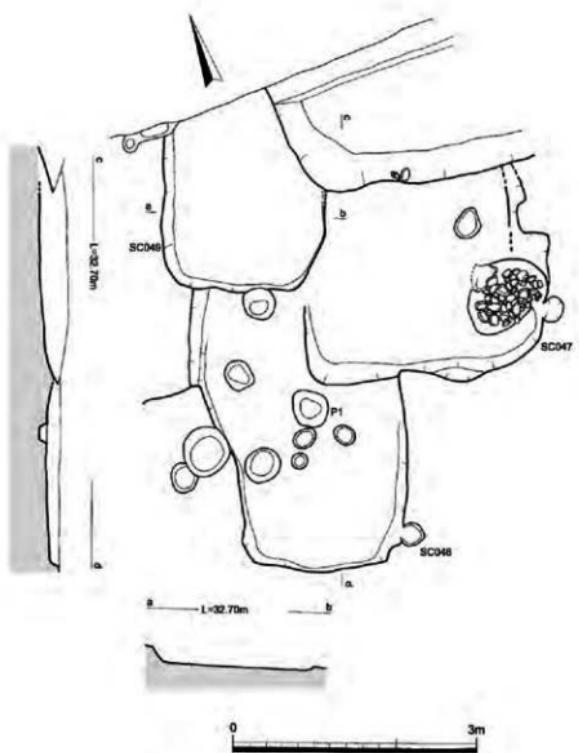


Fig. 77 SC047～049実測図 (1/60)

SC047、48、49

調査区の北西端で検出された。中世の大溝SD117によって北側が切られている。切り合い関係から(古)SC048→SC047→SC049(新)と判断された。

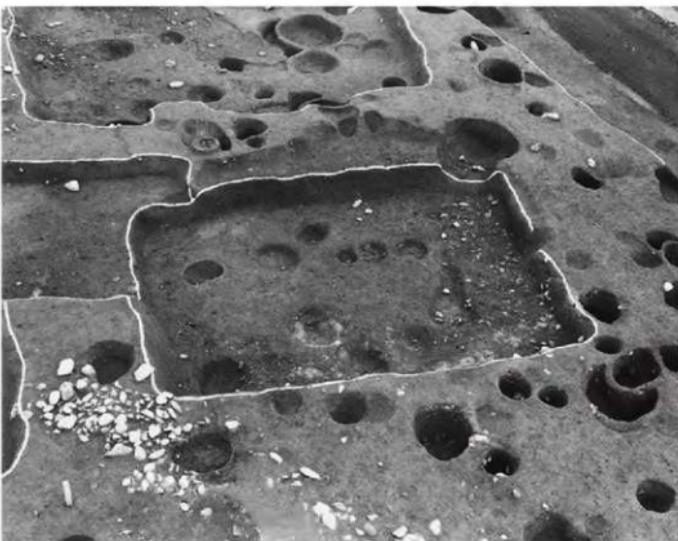
SC047は南辺長295cm 西辺長は240cm以上で、南北に長軸をとるとみられる。深さは26cmで南東部をSX992に切られている。

SC048は東西の短軸長260cm、南北の長軸長330cm以上を測る。深さは20cmを測る。ほぼ中央に位置したP1は17cmの深さである。

SC049は東西の短軸長200cm、南北の長軸長230cm以上を測る。深さは15cmを測る。

SC081

調査区北西部で検出された。SC081～084の4軒の長方形竪穴住居跡が切り合う。SC081はSC084を切り、主軸方位をわずかに変えた建て替えがみられる。建て替え後の東辺長410cm、西辺長は430cmとみられる。短軸長は340cmを測り、整った長方形プランを呈す。壁高は30～40cm(床面標高32.00m)を測る。中央付近の床面から20cm浮いたレベルから遺物がまとまって出土した。焼土や炭



Ph.40 SC081完掘状況（東から）



Ph.41 SC082、083、084完掘状況（東から）

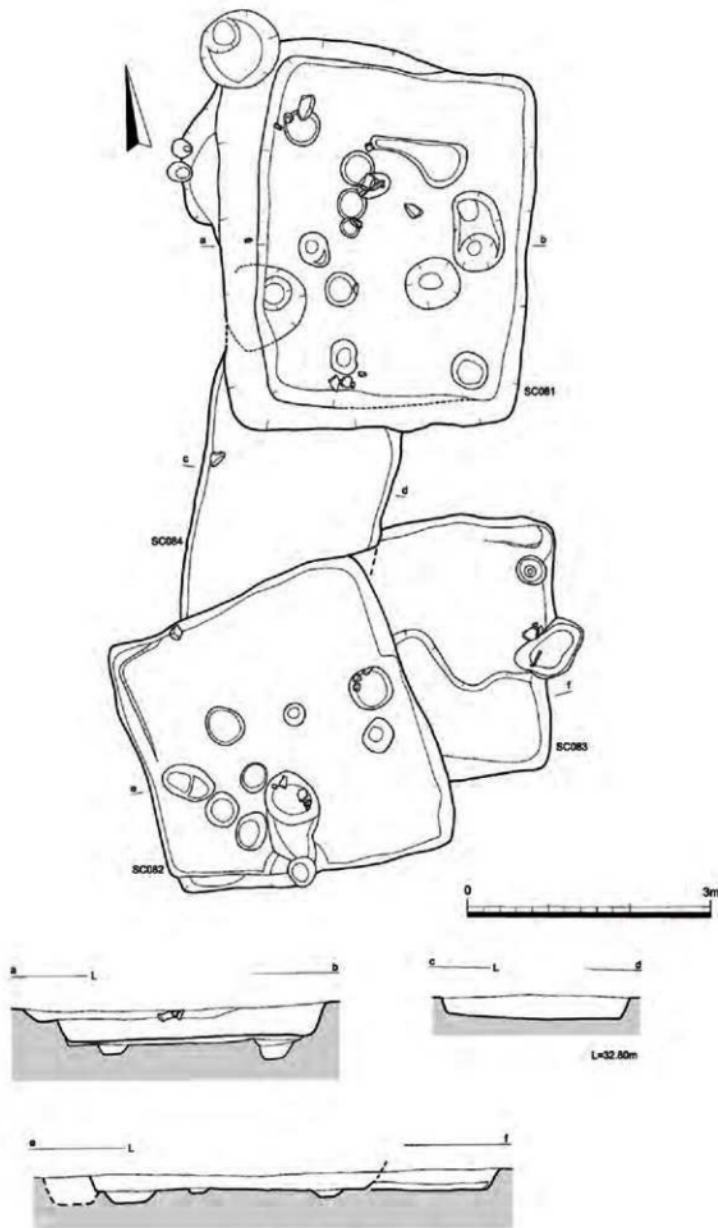


Fig. 78 SC081~084実測図 (1/60)

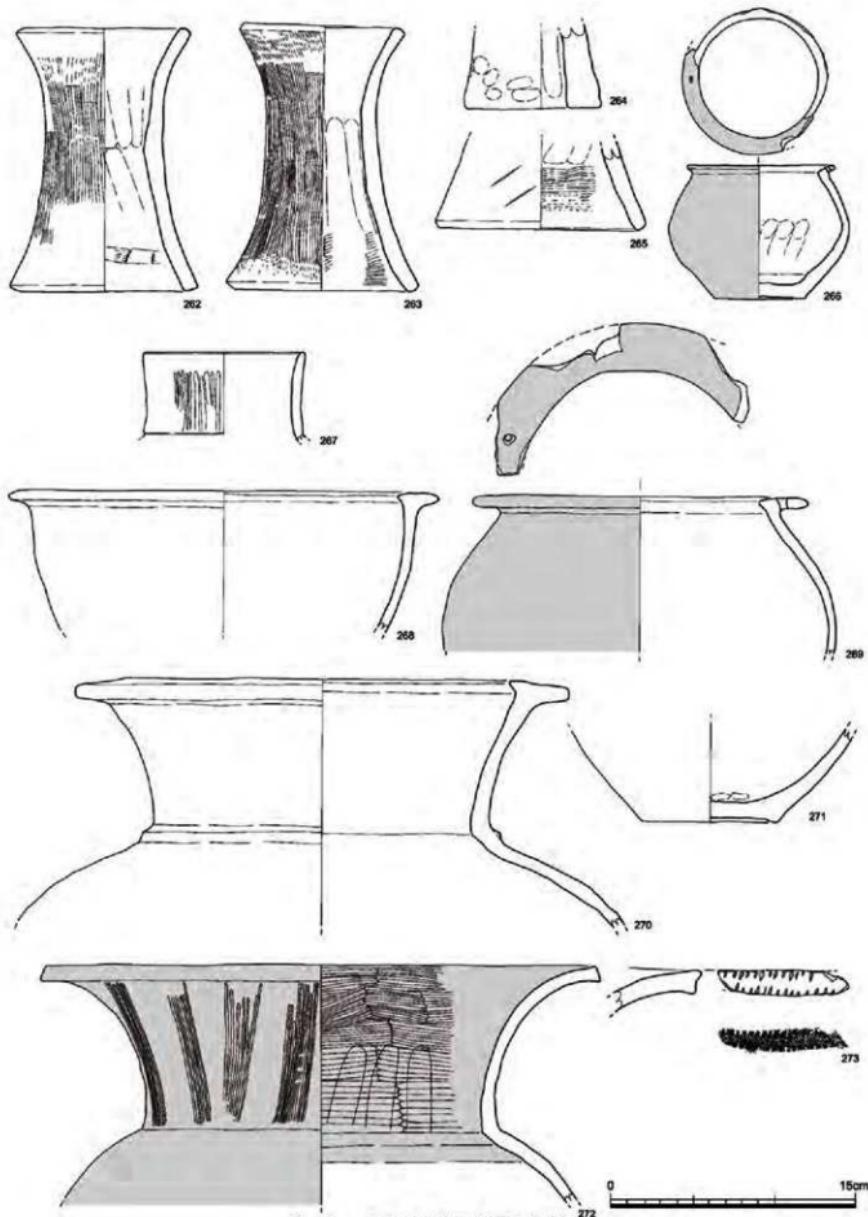


Fig. 79 SC081出土遺物実測図1 (1/3)

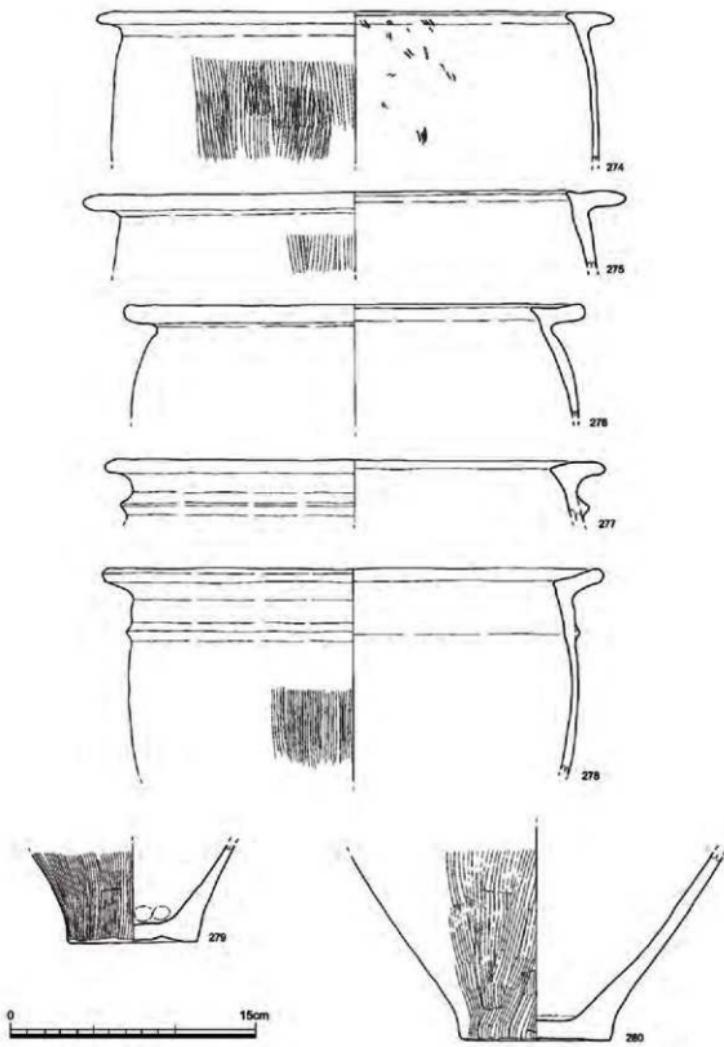
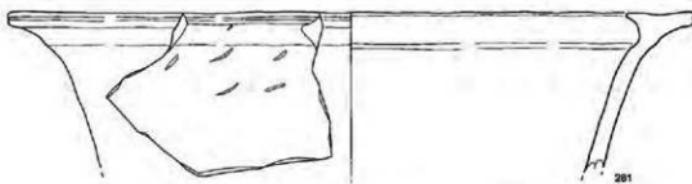
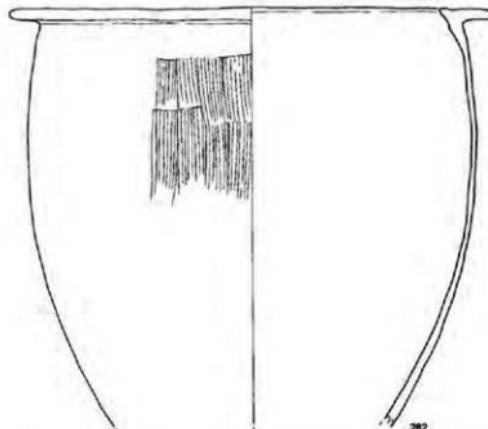


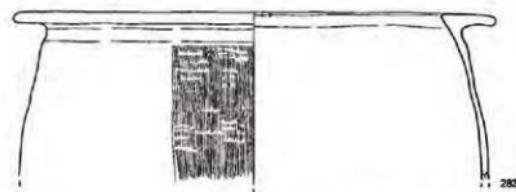
Fig. 80 SC081出土遺物実測図2 (1/3)



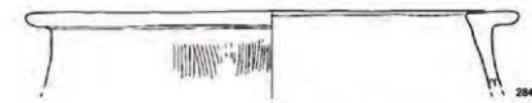
281



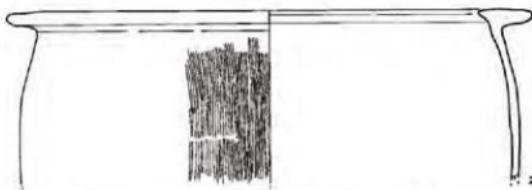
282



283



284



285



Fig. 81 SC081出土遺物実測図3 (1/3)

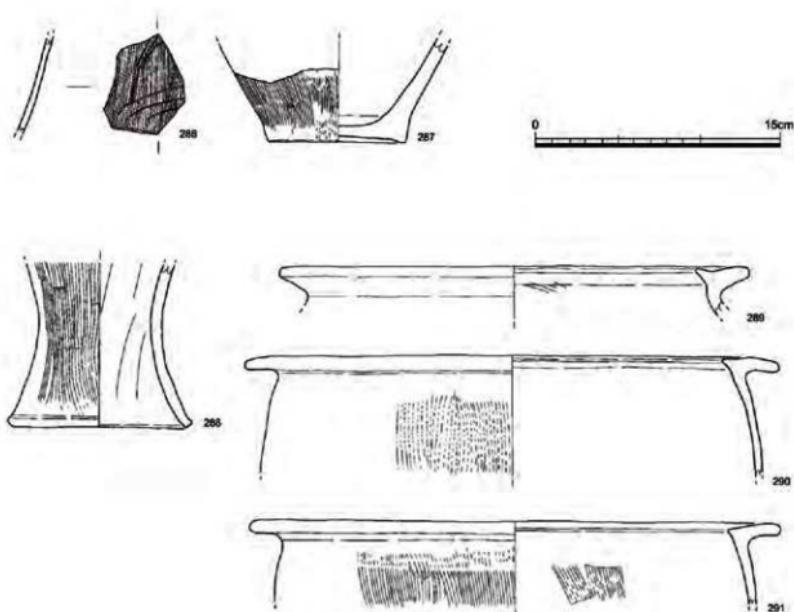


Fig. 82 SC082、083出土遺物実測図 (1/3)

は検出されなかった。

建て替え前の西辺長 480cm である。北西部が他の遺構と切り合う。壁高 25cm で建て替え後より浅い。

出土遺物

262 は埋土中層から出土。263 は完形で床面上から出土した。264 は厚手の粗雑な作りの器台である。265 は器台の脚橋である。266 は赤色顔料を塗布した磨研土器の小壺である。口縁部には穿孔がみられる。底部はわずかに上げ底である。267 の直口壺口縁部の外面は縱方向のミガキを施す。268 の外面は丁寧なヨコナデないしヘラによるミガキ状の横方向のナデが施され、ハケメはみられない。赤色顔料が塗布されていた可能性がある。269 は器面が剥落し口縁部付近ヨコナデ調整のみがみられる。外面と内面にかけてわずかに赤色顔料が残る。270 は器面が剥落し、調整不明であるが、外面に赤色顔料が僅かに付着する。271 の壺底部は周縁部のみが接地する上げ底である。外面ナデないしヘラナデを丁寧に施す。272 は暗文を施し赤色顔料を塗布した磨研土器の壺である。273 は器面が剥落し調整が不明であるが、赤色顔料が塗布されていた可能性がある。274 の内面には爪の痕を多く残す。275 は赤褐色を呈し、硬質な焼成である。胎土も砂粒が少なく精良である。焼成、胎土、280 の底部に近似する。276 は口縁部は端部を平坦に面取りし、内側には強いナデによって跳ね上げて突出させている。277 は赤色顔料がわずかに付着している。278 はくの字口縁で外面全体には厚く煤が付着し

ている。279 の底部は内側を円周して窪ませている。280 は硬質、胎土が 275 に近似する。281 は器面が剥落し調整不明であるが、黒色顔料が塗布されていた可能性がある。頸部の外面に小口状のものによって斜位の列点がつく。283 の外面は口縁部下を強くヨコナデし、凹む。282 は器面が剥落しているが、外面のハケメはヨコナデにより不明瞭となっている。284 の外面のハケメはナデ消され不明瞭となつていている。285 は外面に細かいハケメを残す。

出土遺物は赤色顔料が塗布された祭祀土器が多く、時期は弥生中期後半が下限とみられる。

SC082

SC083、084 を切る。北辺長 328cm、南辺長 364cm、東辺長 373cm、西辺長 320cm の歪な方形プランを呈す。主軸方位も他と異なり、西側に向いた N-8° -W を向く。壁高 24cm (床面標高 32.27m)、周溝、中央炉は検出されなかった。

出土遺物

286 は外面に細かいハケメを残した壺片に線刻を施す。287 は底部周縁が接地する壺底部である。

SC083

規模が判る東辺長は 310cm を測る。北辺西端が曲がりはじめているので、北辺長は 250cm 前後と考えられる。壁高は 30 ~ 40cm (床面標高 32.30m)、比高差 10cm の段を境に南側が深くなる。

出土遺物

288 は外面に粗いハケメを残した器台である。289 の口縁部は内側に跳ね上がり突出している。290 のハケメはナデ消され不明瞭となっているが、291 のハケメは比較的残る。

出土遺物の時期は弥生中期後半が下限とみられる。

SC084

短軸長 225cm、西辺長 340cm 以上の規模のみ判る。壁高 24cm (床面標高 32.18m) を測る。竪穴内には柱穴は検出されない。

SC828、829

調査区北東部で検出された。SC081 の西側に主軸を同じくして平行する。北辺長 365cm、南辺長 370cm、西辺長 570cm、東辺長 525cm を測る長方形プランである。当初、東辺中央が張り出すことから別の造構と切り合うと考え、北側を SC828、南側を SC829 とした。その後、西辺が 1 直線で連続すること、床面のレベルが変わらないことから 1 つの造構と判断した。

壁高 33cm (床面標高 32.08m)、床面は平坦であるが、中央近くに上面で検出した中世の土壙 SX001 の掘り込みが残る。

出土遺物

292 は内外面ヨコナデ調整で外面に煤状のものが僅かに付着している。293 は外面は縦方向のミガキとわずかな横方向のミガキとナデがみられる。内面はナデ調整でヘラを回転し当てた痕が残る。後期まで降るとみられ、混入の可能性もある。294 は内外面ヨコナデ調整。

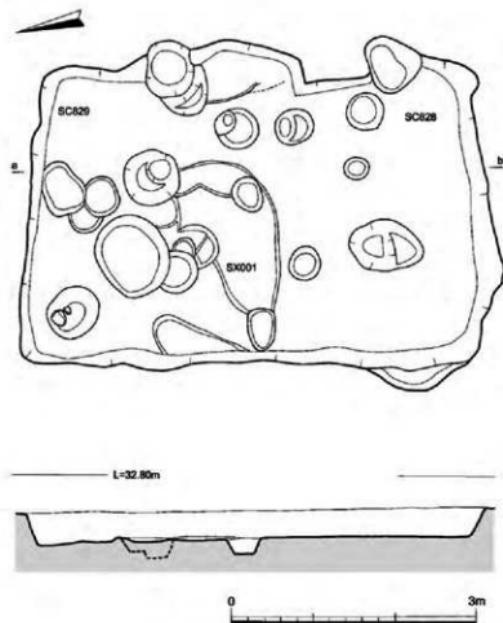
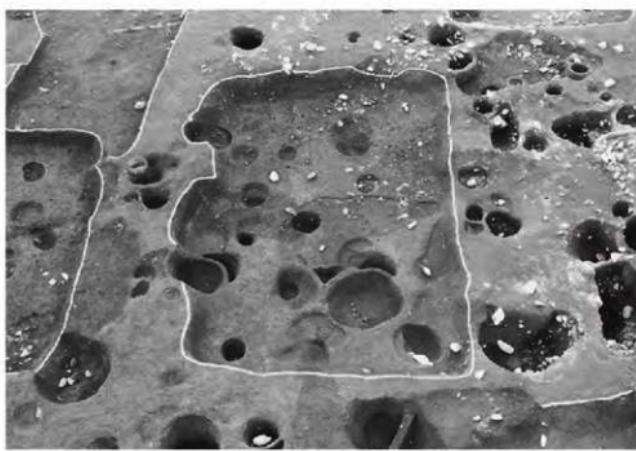


Fig. 83 SC828、829実測図 (1/60)



Ph.42 SC828、829実測状況 (北から)

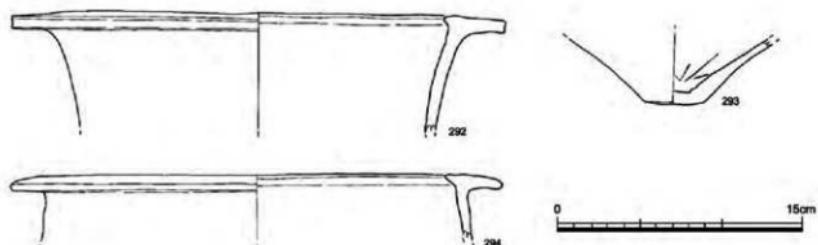


Fig. 84 SC828, 829出土遺物実測図 (1/3)

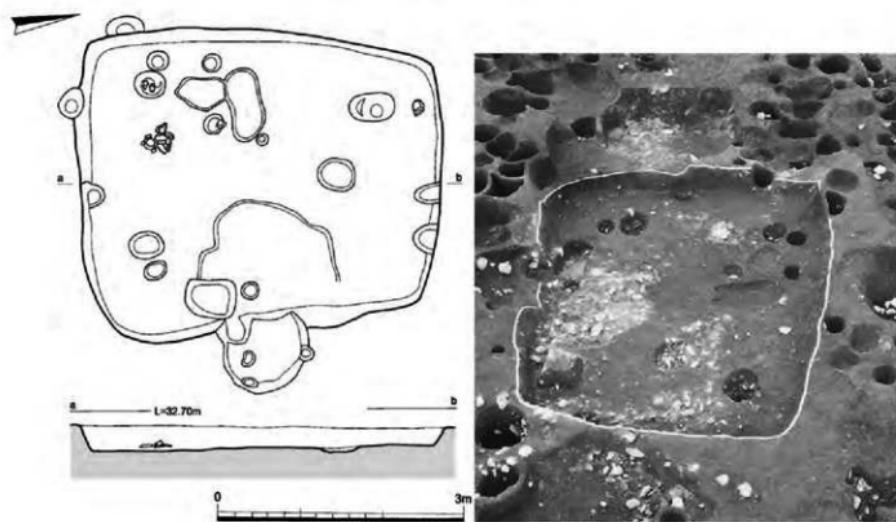


Fig. 85 SC893実測図 (1/60)

Ph.43 SC893発掘状況 (北から)

SC893

調査区中央で検出された。北辺長 305cm、南辺長 372cm、西辺長 436cm、東辺長 400cm、主軸長 446cm を測る歪な方形プランである。西辺と北辺は他の方形堅穴住居跡と方向を同じくするのに対し、南辺が対辺と平行していない。

壁高 27cm、床面標高 32.23m を測る。東辺よりに深さ 10cm 程度の浅い掘り込みがみられた。

出土遺物

295 の壺体部下位の外面は縦方向のヘラナデ後、底部近くに細かいミガキを施す。底部はわずかに

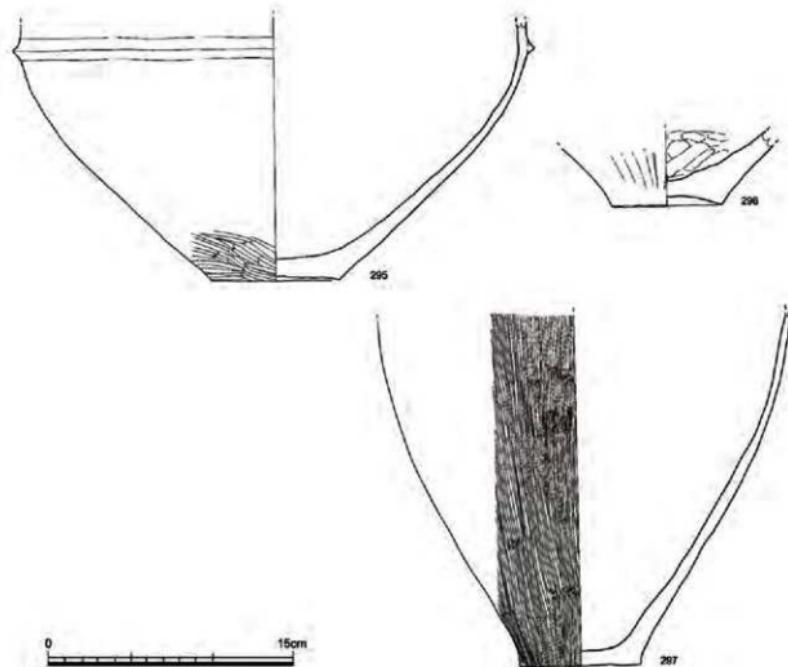


Fig. 86 SC893出土遺物実測図 (1/3)

上げ底である。296は壺底部、297の外面には細かいハケメを明瞭に残す。

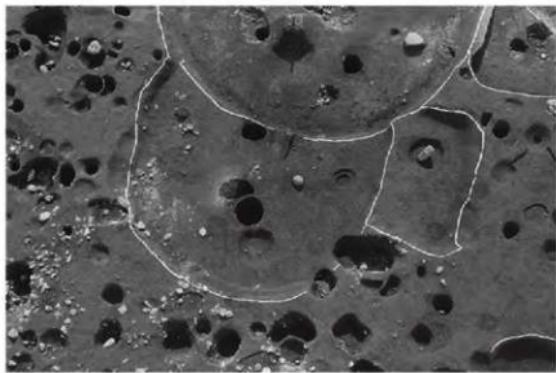
SC865

調査区西寄りの中央部で検出された。SC863に切られ南側の形状は不明である。また、西側は方形土壙SK862を切る。南北長410cm以上、東西長465mを測る楕円形プランとみられる。壁高34cm(床面標高32.10m)を測る。北東の壁際が幅10~40cmに及んで床面より7cm高く、このラインが東側に突出した部分に連続する。

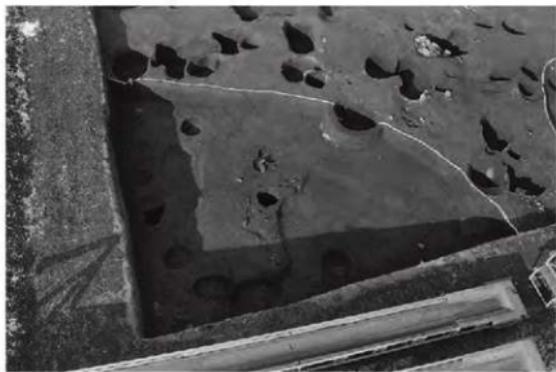
中央炉P1がやや西寄りで検出された。径60cm、深さ約30cmを測る。上層に炭層、下層に焼土が堆積していた。主柱穴はP2、P3とみられる。深さは各36cm、14cmを測る。

出土遺物

298の器台は外面にハケメを明瞭に残す。299の外面は口縁部から頸部にかけてヨコナデ、頸部下位の屈曲近くに細かいミガキが認められる。内面の頸部は細かいミガキを施す。黒色顔料が塗布されている。SC893出土の303と同一個体の可能性がある。300は口縁部へ屈曲する部分の外面を強くナデ巡らし産む。301は口縁端部が窄まり、内側へも突出する。302は刻みを施した口縁部である。303は器面が剥落しているが、ミガキの痕跡を残す。外面に黒色顔料と思われるものが付着している。



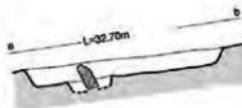
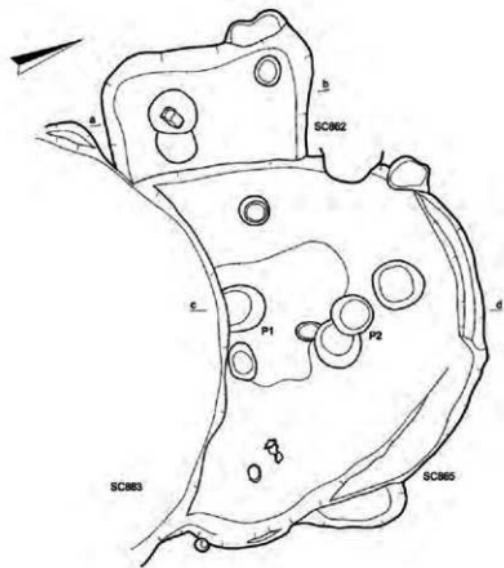
Ph.44 SC865、862完掘状況（南から）



Ph.45 SC007完掘状況（南から）



Ph.46 SC008完掘状況（西から）



a L=32.70m b



c L=32.70m d

0 3m

Fig. 87 SC862、865実測図 (1/60)

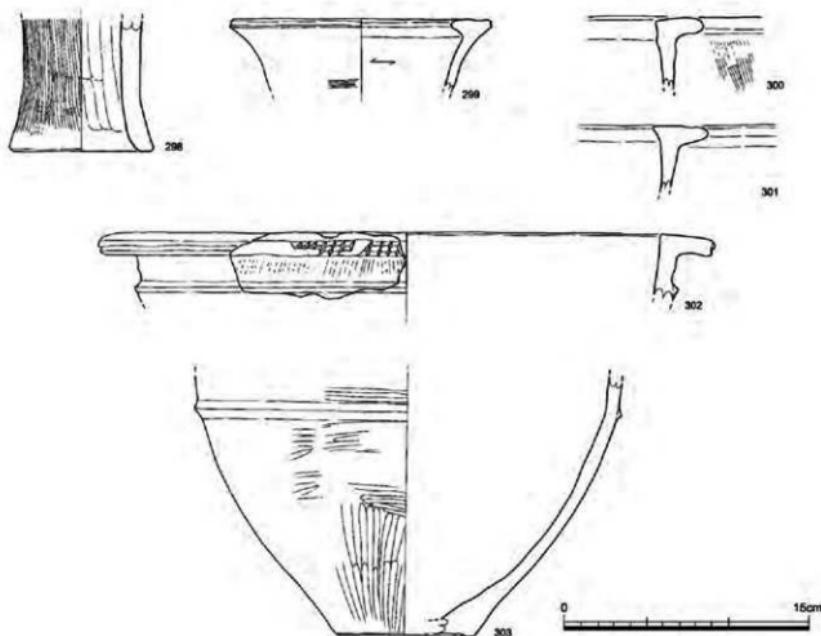


Fig. 88 SC865出土遺物実測図 (1/3)

底部は周縁のみ接地する上げ底である。

出土遺物の時期は弥生中期前半から中頃にかけて下限とみられる。

SC007

調査区の南東隅で検出された。大半が調査区外のために形状は不明であるが、円形竪穴住居跡と考えられる。壁高 24cm、北より中央部が不整形に 7cm 落ち込む。また、南隣が方形に約 10cm 底面が下がる。他の遺構が切り合っていたものとみられる。

Fig. 89 SC862出土鉄器実測図 (1/2)

主柱穴は位置から P1 ~ P3 とみられ、深さは各 7cm、58cm、32cm を測る。

出土遺物

304 は内面に細い線刻がみられる。305 は外面に粗いハケメを明瞭に残す。鉄器 46 の形状は不明。

SC008

調査区の南東隅で検出された。長軸長 3.6m、短軸長 3.2m の隅丸方形プランに近いが北側が尖って張り出している。壁高 17cm (最深の床面標高 32.3m) を測る。主柱穴は P2 ~ P4 と考えられ、深さは各 23cm、25cm、45cm を測る。P1 は中央炉とみられるが、焼土は検出できない。

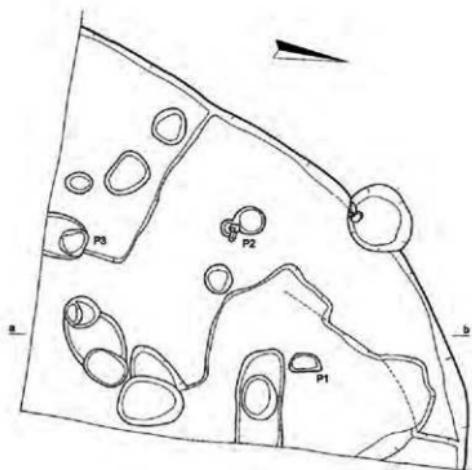


Fig. 90 SC007実測図 (1/60)

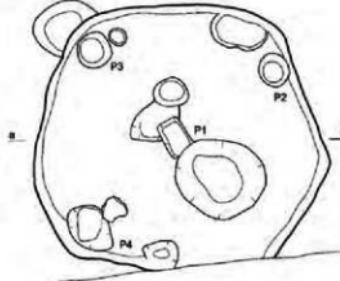


Fig. 91 SC008実測図 (1/60)

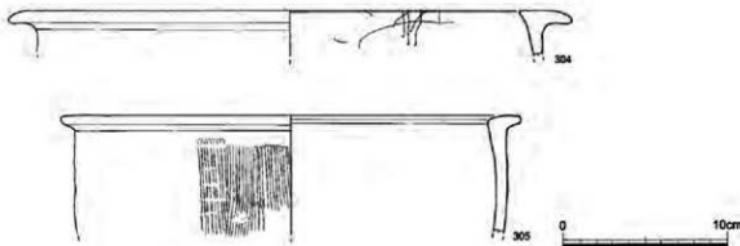


Fig. 92 SC007、008出土遺物実測図(1/3)

SC722、1077

調査区南隣中央で検出された。SC722は北辺長395cmを測る方形プランを呈す。中世の区画溝SD1080に切られ、また、SX1078、SC921と切り合っている。壁高は鉢出面から30cmを測る。

床面まで掘り下げた時点でSK1077を検出した。東西長210cm、壁高はSC722床面から8cmの深さである。主軸方位はSC722同様に磁北に近い。

SC080

調査区北東端で検出された。西辺長225cm、北辺長160cm以上を測る。深さは15cmである。

SC1087

調査区北西端で検出された。北側を中世の大溝SD117に切られる。南辺長215cm、東辺長150cm以上を測る。深さは15cmである。

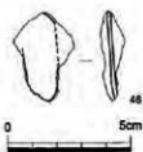


Fig. 93 SC007出土鐵器実測図(1/2)

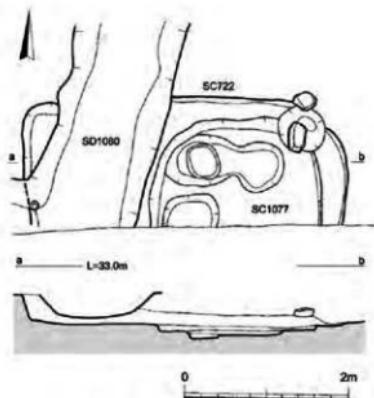


Fig. 94 SC722, 1077実測図 (1/60)

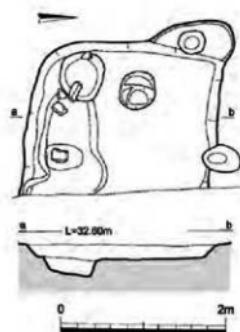


Fig. 95 SC080実測図 (1/60)

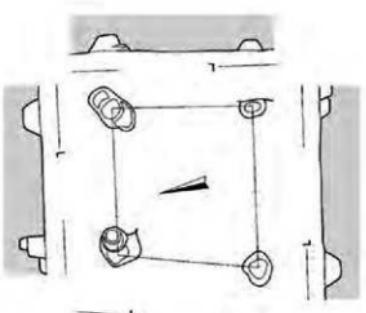
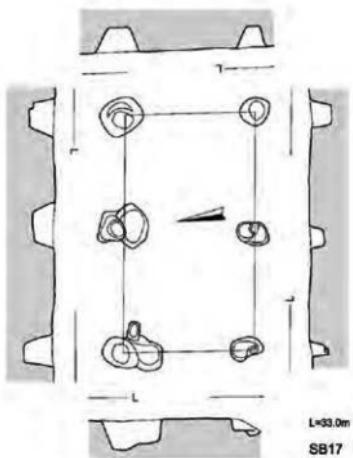


Fig. 96 SC1087実測図 (1/60)

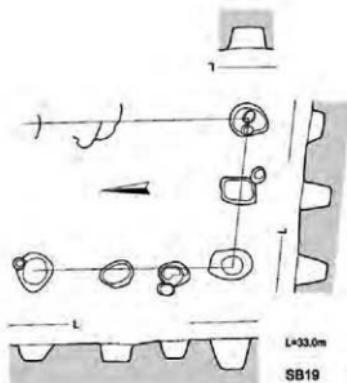
(2) 挖立柱建物跡

調査区中央から東側にかけて検出された。特に方形住居跡と円形住居跡の分布の境近くに集中している。

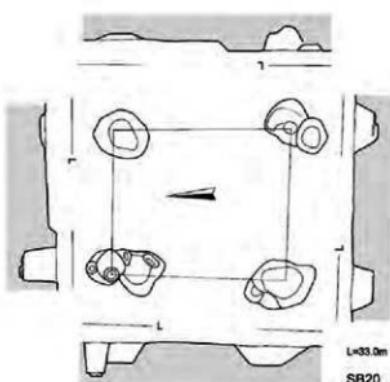
復元した掘立柱建物は 6 棟で、SB17、と SB21 が東西棟である。復元できなかった建物跡も多いと思われるが本調査区の南東の第 2 次調査 8 区で復元された南北に長いものは SB19 のみである。



SB18



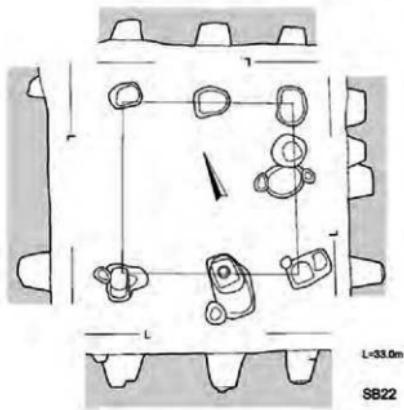
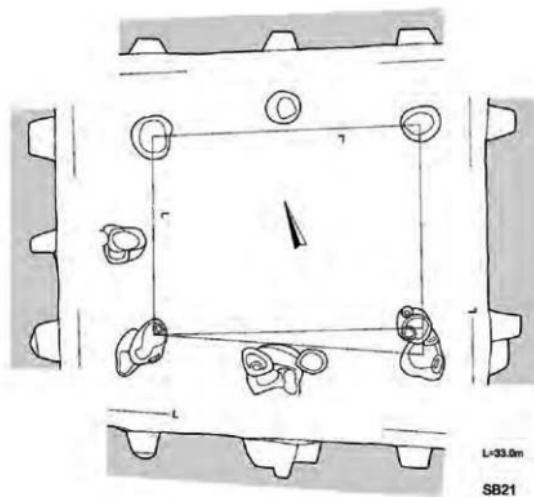
SB19



SB20

0 5m

Fig. 97 幼生時代掘立柱建物跡実測図1 (1/100)



0 5m

Fig. 98 新生時代据立柱建物跡実測図2 (1/100)

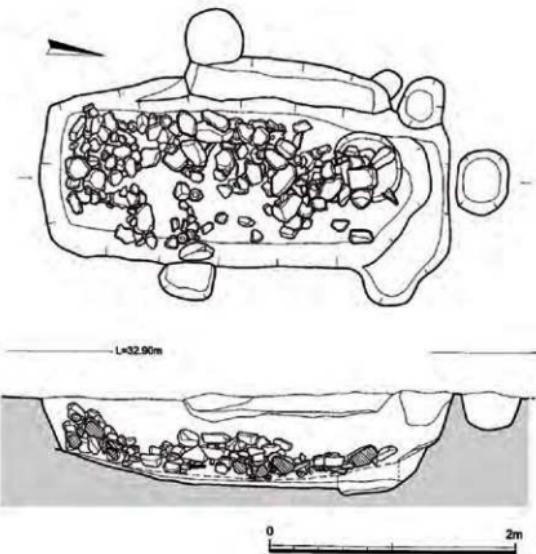


Fig. 99 SK956実測図 (1/40)



Ph.47 SK956完掘状況 (西から)

外付近の礫が疎らになって回んだ部分には焼けた礫がみられた。土器片は礫に混じって出土した。

出土遺物

306 は口縁端部付近の内面には指押さえを一周した痕と細い棒状のもので粗くヨコナデを施した痕跡がみられる。307 の器台は口縁部はあまり開かず、外面に粗いハケメを残す。308 は脚端部が屈曲して開き、外面に粗いハケメが明瞭に残る。309 は孔が通った瓶底部もしくは逆位の蓋の可能性がある。外面は丁寧なナデによってハケメはほとんどナデ消されている。内面には煤が薄く少し付着している。310、311 は同一個体と思われる。310 の外面はヨコナデないしナデ、内面は粗い横位のハケメを施す。311 の外底部は周縁のみが接地し、ヘラケズリが施されている。312 は鉢の約半分が遺存する。

土壤

SK956

調査区西寄りの中央部で検出された。上端の主軸長 334cm、短軸長 150cm、下端の主軸長 302cm、短軸長 105cm を測る。主軸方位は N-7°-W をとる。西辺は攪乱で上部が壊され、北東隅は柱穴と切り合っていたものと思われる。

基底面は南端で 42cm、北端にかけては深くなり最深で 78cm となる。北端は深さ 48cm のところにテラスを設け 2 段に掘り込まれている。また、基底の北西隅に径 40cm、深さ 7cm の落ち込みを検出した。

基底面から最大で 5cm 浮いたレベルで中央にかけて深くなつた舟底状に 10 ~ 20cm 大の礫が敷かれていた。礫の分布には疎密がみられ、南端付近では流入したような状態で多く出土した。また、中

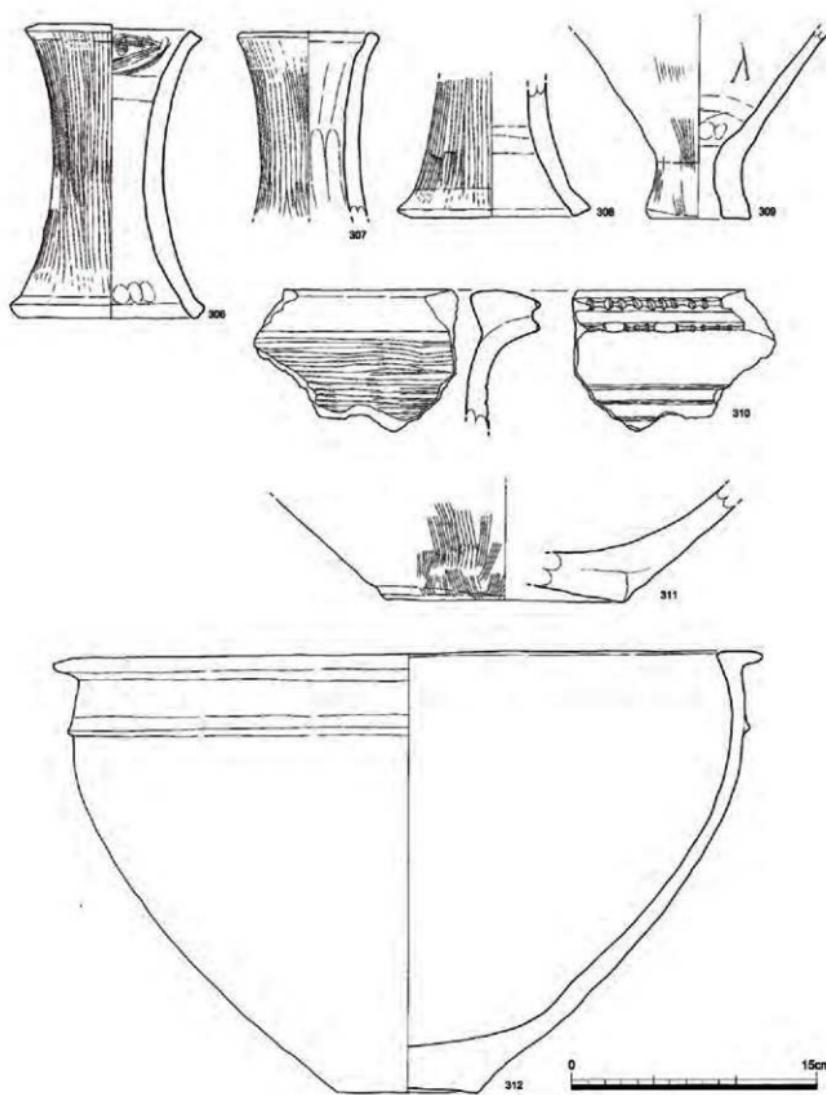


Fig. 100 SK956出土遺物実測図 (1/3)

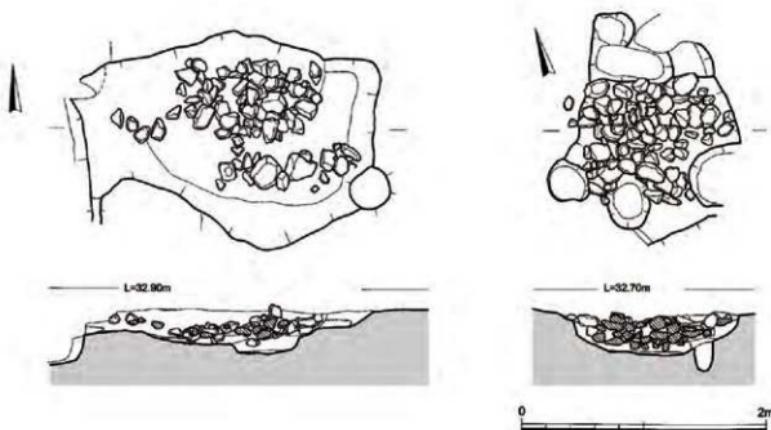


Fig. 101 SX014実測図 (1/40)

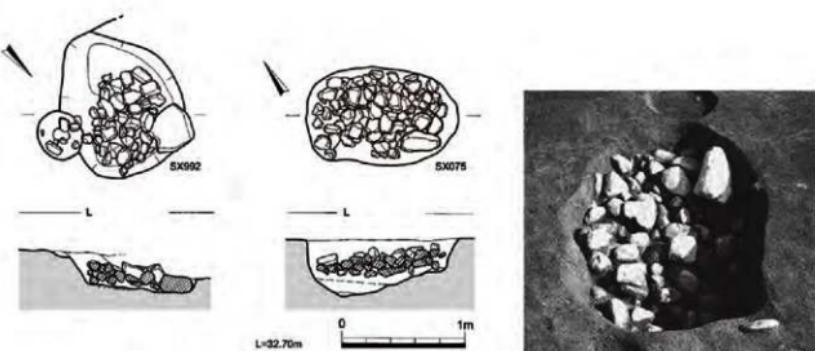


Fig. 102 SX992, SX075実測図 (1/40)

Ph.48 SX075完掘状況 (北西から)



Ph.49 SX014完掘状況 (南から)

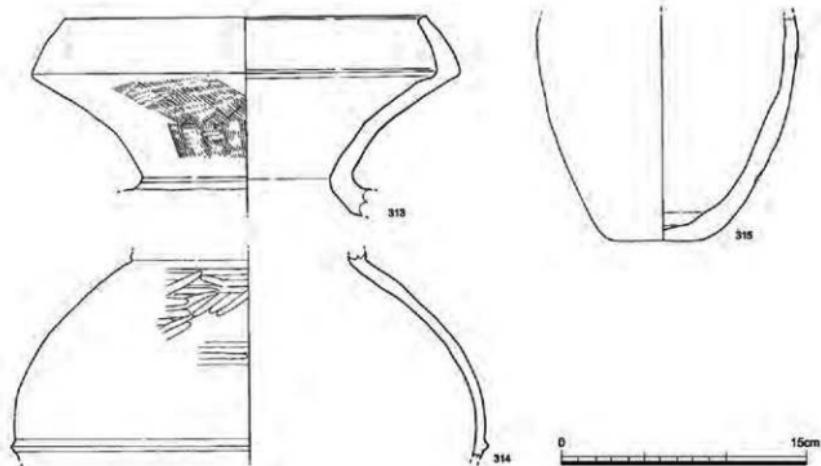


Fig. 103 SX014出土遺物実測図 (1/3)

口縁部上面と突帯以下の外面にヨコナデないしミガキが施されている。内面はナデ調整。外面口縁部から体部全体には赤色顔料が塗布されている。

出土遺物の時期は中期前半が下限とみられる。

SX014

調査区南東隅で検出された。SC013を切る。不整形で深さ約30cmの掘方内から10~20cm大の礫が多く出土した。しかし、疎密がみられ、敷き詰められてはいない。下底の礫下から径60cm、深さ7cmの柱穴状の掘り込みを検出した。礫に混じって出土した遺物は弥生土器であるが時期は中世の可能性がある。

出土遺物

313は器面が剥落し内外面の調整は不明である。314はスリップがかけられ、ミガキが施された上に黒色顔料とみられるものが付着している。315は底部がわずかに丸みを帯びる。内外面調整不明。出土遺物の時期は弥生後期が下限とみられる。

SX992

調査区北西隅でSC047を切って検出された。笠長軸長121cm、短軸長95cmの楕円形プランで深さ30cmの掘方内に、不揃いの大きさの礫を詰めている。礫中には焼石を含む。

SX075

調査区北東隅で検出された。長軸長125cm、短軸長80cmの楕円形プランの掘方内に10cm大の礫が敷き詰められていた。下底は西側に下がるが、黄褐色土で充填し、その上に礫を置く。礫は西端では疎となるが、他は2重位に重なる。

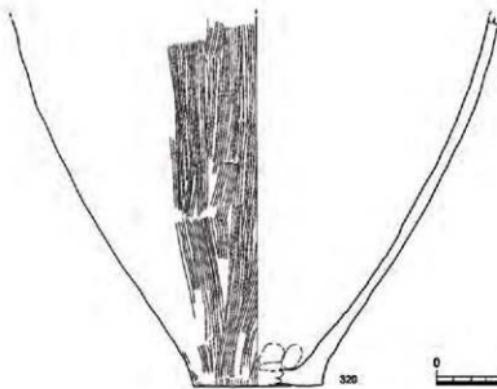
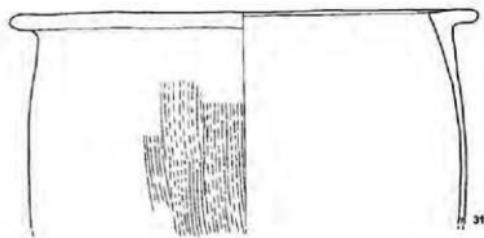
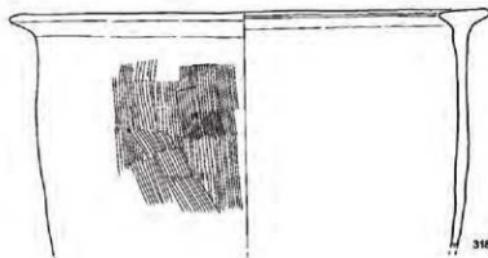
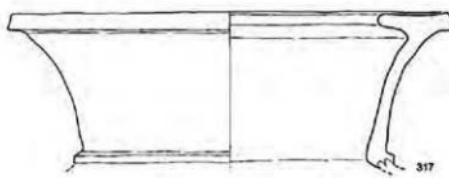
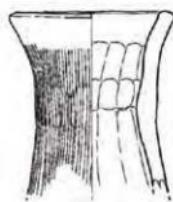


Fig. 104 弥生時代出土遺物1 (1/3)



Ph.50 SP336遺物出土状況

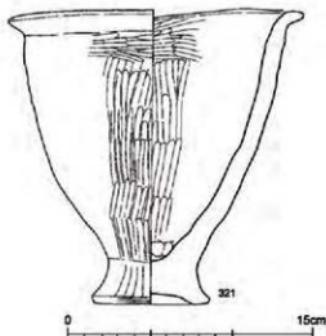


Fig. 105 SP336出土遺物 (1/3)

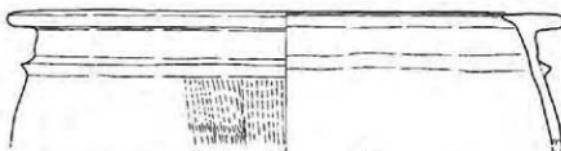
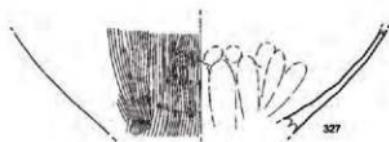
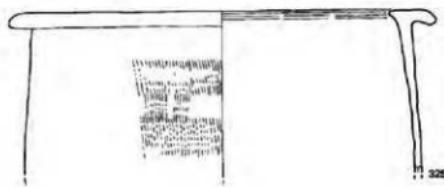
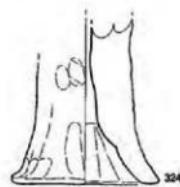
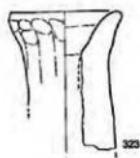
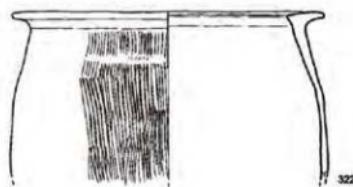


Fig. 106 弥生時代出土遺物2 (1/3)

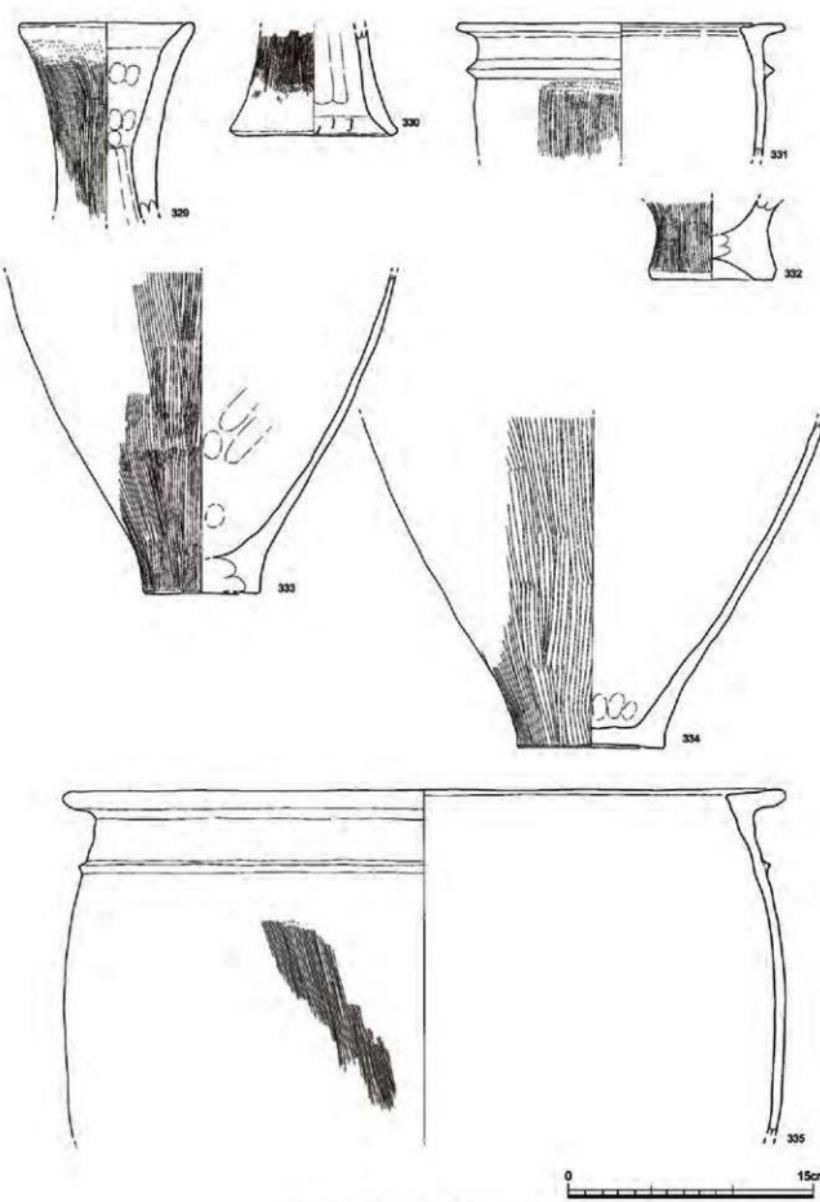
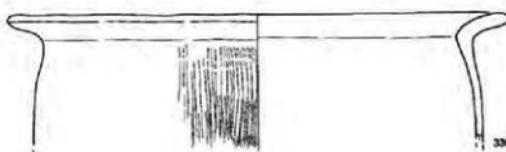
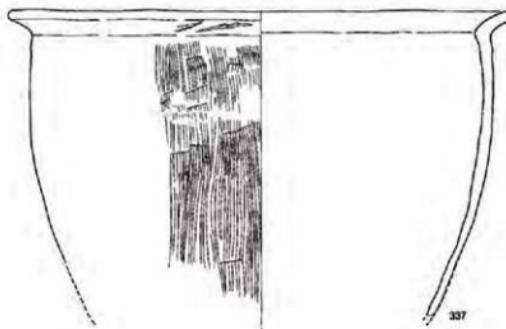


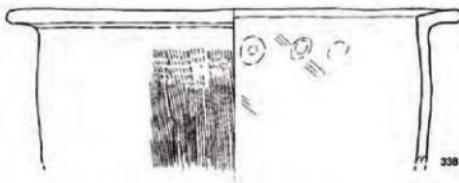
Fig. 107 弥生時代出土遺物3 (1/3)



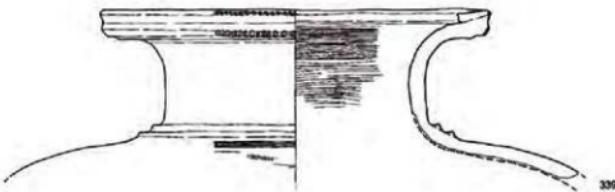
336



337



338



339



Fig. 108 弥生時代出土遺物4 (1/3)

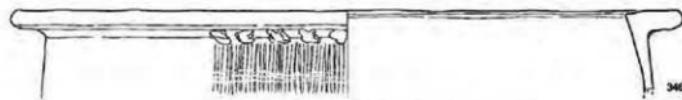
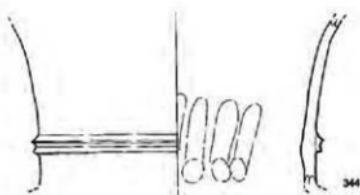
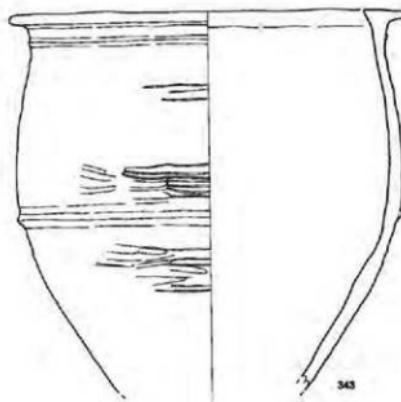
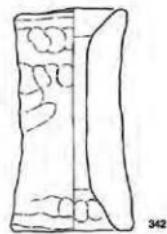
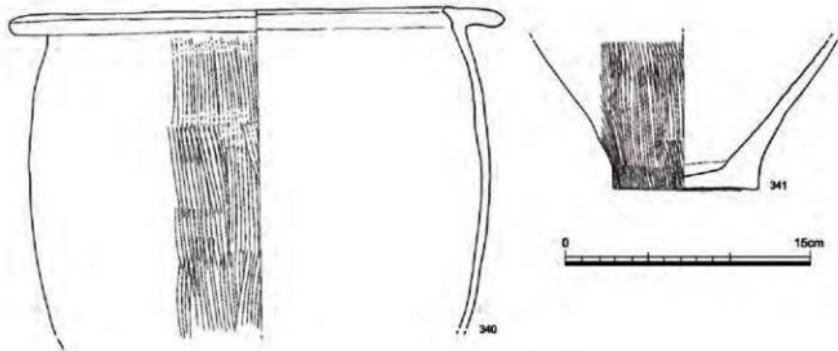


Fig. 109 弥生時代出土遺物5 (1/3)

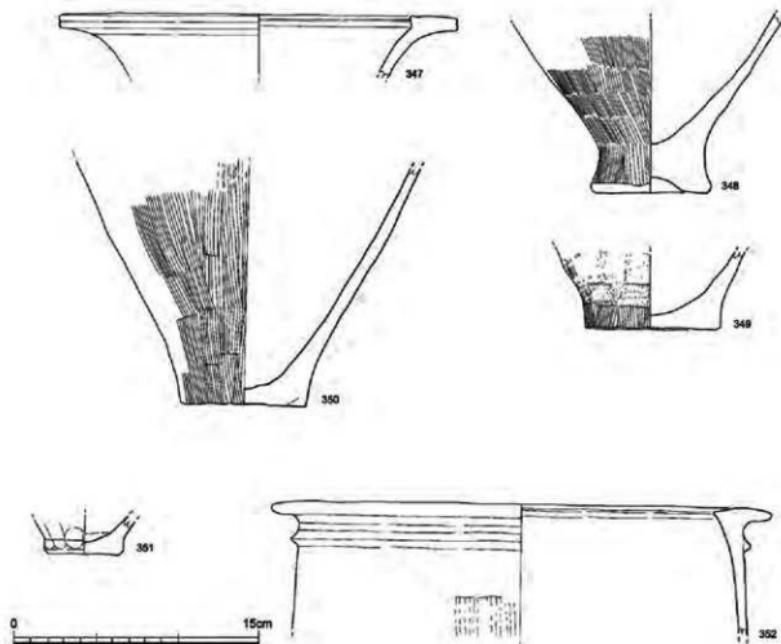


Fig. 110 弥生時代出土遺物6 (1/3)

出土遺物

316 の器台はくびれが上位に位置している。317 の外面口縁部から頸部にかけて丁寧なヨコナデが施されている。318 壺の体部は張らず、外面のハケメは口縁部直下ではヨコナデによって消され、他は部分的にナデ消されている。319 壺口縁部は内側へは突出せず、体部はわずかに張る。外面のハケメは不明瞭である。320 壺底部は平坦で比較的薄く、外面体部のハケメは器面の剥落とナデによつて不明瞭となっている。

SX415

321 壺は口縁部の一部を欠くほかは完形である。外面は口縁部とその屈曲部以下 2cm 程まで横位のミガキ、以下縱位のミガキを施す。内面は口縁下 4cm 程度までは横位のミガキ後ナデ押さえ、以下は底部まで縱位のミガキが施されている。外面には赤色顔料とともに黒色顔料も塗布されていた可能性がある。弥生中期初頭から前半代にかけてとみられる。

(3) その他の柱穴等出土遺物

322 壺の外面のハケメは明瞭に残る。323、324 は同一個体の器台である。粗いナデによって成形されている。325 と 327 は同一個体の壺とみられる。外面体部上位のハケメはヨコナデによって消され不明瞭となっているが下位では明瞭に残る。326 壺底部には植物の繊維質の圧痕が多く付く。328

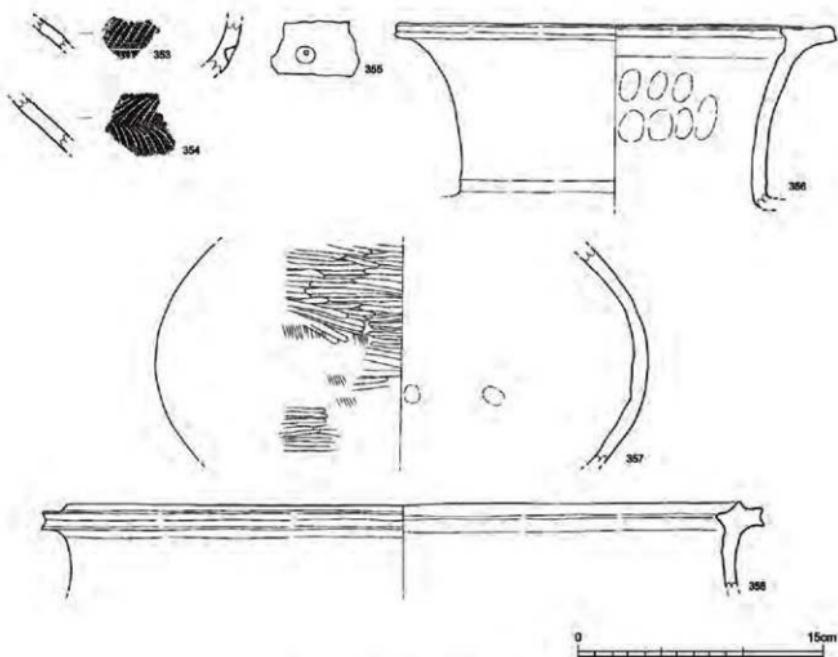


Fig. 111 弥生時代出土遺物7 (1/3)

の胎土は砂粒が少なく精良で、調整も丁寧なヨコナデ調整が施されている。器面が剥落し範囲は不明瞭であるが、赤色顔料が塗布されている。329 器台の胎土は砂粒が少なく精良である。赤色顔料が塗布されていた可能性がある。330 器台の外面には細かいハケメが残る。331 壺外面のハケメは比較的明瞭に残る。332 は上げ底の壺底部である。333 壺体部下位には細かいハケメが比較的残る。334 の外面体部の粗いハケメはナデによって不明瞭となっている。335 は器面が剥落し調整の大半が不明である。336 の口縁部は湾曲しながら少し上方に延びる。外面体部には粗いハケメが残る。337 は「く」の字に近い口縁部で外面に細かいハケメが残る。338 の口縁部は僅かに上方へ延長し、端部が肥厚する。339 壺の頸部突帯以下に横位の粗いハケメが巡るが、以下は丁寧なナデによって消されている。340 の外面には磨耗した細かいハケメが明瞭に残る。341 内底部は中央へ下降する。342 器台の外面はナデ調整による。343 は器面が剥落しているが、外面体部には横位のミガキが施されているのが分かる。344 の胎土は砂粒が少なく緻密で焼成も硬質である。顔料が塗布されていた可能性がある。345 は赤色顔料が塗布された磨研土器である。346 の口縁部下の体部には指押さえによる凹みが連続する。347 は外面頸部に 6、7 本の縦位の細いミガキを単位とした暗文がわずかに残る。器面が剥落しているが、顔料が塗布されていた可能性がある。348 は上げ底の壺底部である。349、350 の内底は中央にむけて下がる。351 は手捏土器で暗灰色を呈し、胎土は緻密。352 の突帯の先端は丸みがあり、外面のハケメはヨコナデによって不明瞭となっている。353、354 は貝殻腹縁を用いて羽状文を施し、

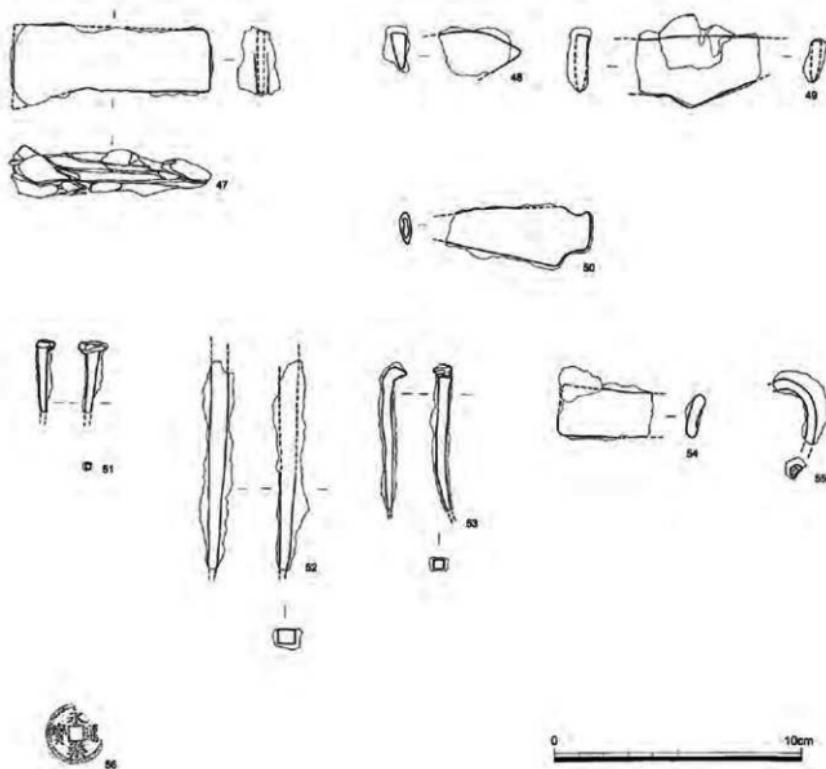


Fig. 112 出土鉄器、銅鏡 (1/2)

353 はヘラを用いて有軸とする。355 は外面に径 1cm の略円形の凹みを有す。指もしくは茎状のもので突いたものとみられ、貫通していない。用途は不明であるが底部の中心である場合、脚部を連結する軸受けの可能性もある。外面は手捏のような粗いナデ調整、内面には粗いハケメがみられる。356 は図示した頸部までが完形で遺存する。外面頸部はタテハケ後ヨコナデを施し、ハケメは消されている。頸部中央にヨコナデによる 1 条の沈線が巡る。357 は横位のミガキが施され、黒色の顔料が塗布されていた可能性がある。358 は広口壺の口縁部か、丁寧なヨコナデが施され、胎土も砂粒が少なく緻密である。赤色顔料が塗布されていたものとみられる。

鉄器

47 は鍔の進行により原状を留めていないが、鋤先もしくは鎌などが考えられる。48～50 は刀子である。51～53 は中世の鉄釘、54、55 は用途不明。56 は永楽通寶である。

(4) 出土石器について



石器について詳細な報告は続編の「入部」報告書にて行うことにして、ここでは概略のみを記す。

石鎌は掲載した写真の 1～7 までの 7 点が出土した。石核は掲載した 8～10 の 3 点、石包丁は 14 の未製品を含め 4 点出土した。15 は扁平片刃石斧の未製品と思われる。16～19 の石剣は 18 と 19 が未製品である。20 は石鎌、21 は石斧を転用し蔽石として使用している。22 は大型蛤刃石斧、23 と 24 は砥石である。

出土地点

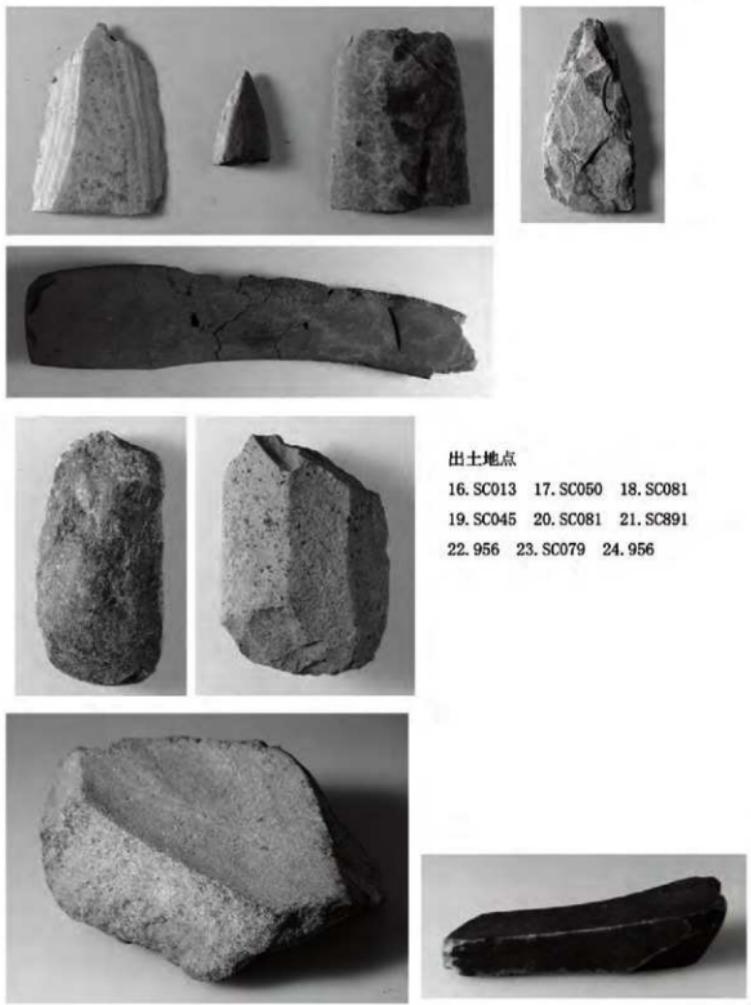
1. 1092 2. 1143 3. SC045
4. SK077 5. SC920 6. 652
7. SK068
8. 323 9. 699 10. 853



11. SC013 12. SC078
13. SC013 14. SC079
15. SC013



Ph.50 出土石器 (1)



出土地点

16. SC013 17. SC050 18. SC081
19. SC045 20. SC081 21. SC891
22. 956 23. SC079 24. 956

Ph.51 出土石器 (2)

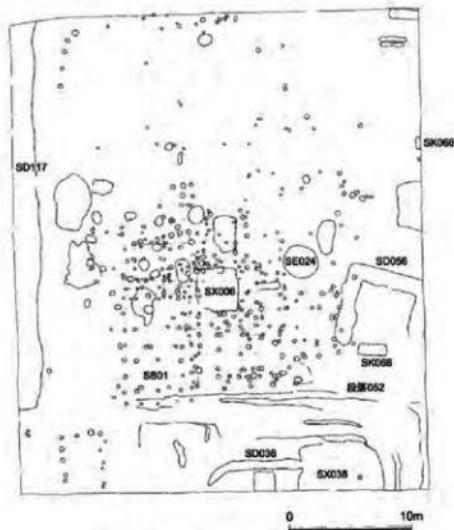


Fig. 114 中世の主要遺構 (1/400)

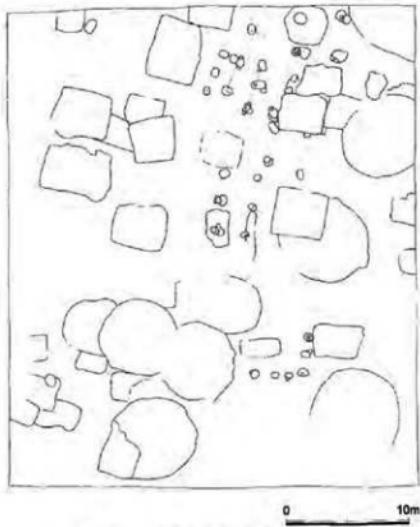


Fig. 115 弥生時代の主要遺構 (1/400)

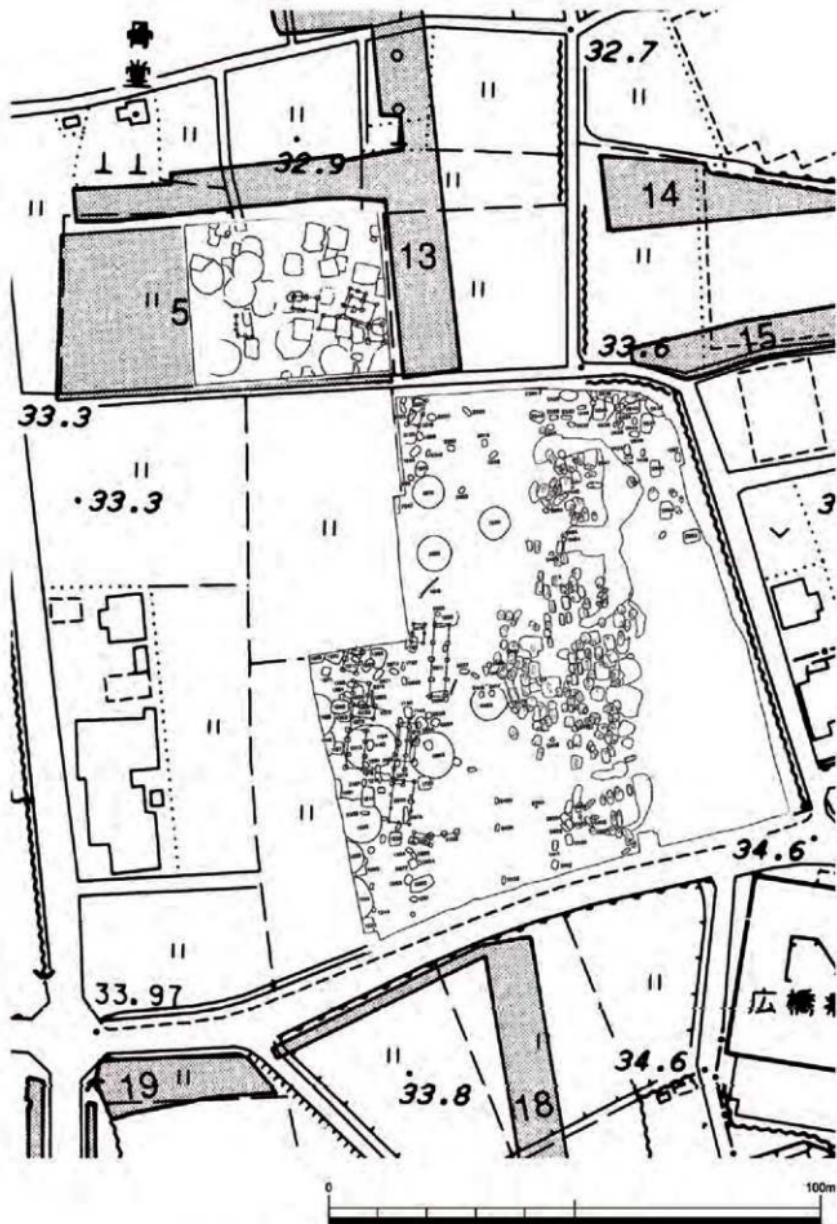


Fig. 116 第8次、第11次調査の弥生時代主要遺構 (1/1,000)

IV おわりに

ここでは本調査の中心となった弥生時代の竪穴住居跡群と 12 世紀後半から 15 世紀代の中世遺構についてまとめておきたい。

(1) 弥生時代の集落について

本調査において前期の突帯文土器、板付式土器や後期中頃の土器が若干出土したが、これらの時期の明確な遺構は検出されなかった。中心となったのは弥生時代中期前半から中期末までの竪穴住居跡群である。第 2 次調査の 8 区同様に方形と円形プランの 2 つの竪穴住居跡が検出された。切り合った竪穴住居跡も比較的多かったが、埋土が極めて近似し、そのプランを検出することは困難を極めた。8 区では「前期末に炉をもつ方形住居がまず築かれ、中期初頭には円形住居と掘立柱建物が加わり、中期後半まで継続する。」ことが報告されている。本調査でも同様のことが言えるが、前期末から中期初頭の遺物は少數で、柱穴上に完形の甕 321 が埋置されていた遺構を除くと明確にこの時期に属した遺構は不明である。遺物量をみると中期前半から中期後半のものが大半を占め、方形プランは中期前半に円形プランは中期中頃から後半に属したものが多いと思われる。

本調査区における 2 つの竪穴住居プランの分布をみると、方形プランの竪穴住居跡は全体に分布するが、東側に集中している。逆に円形プランは西側に集中し、8 区の配置と合わせると、南北に配列した壇塚墓群の墓域から西側に拡張していったものとみられる。

既往の調査からみると第 II 章「位置と環境」で記したように前期の遺構は低地に近い北側に分布し、中期初頭～中期前半にかけて微高地の内側に移動、展開するようになる。

(2) 中世の遺構について

既述のとおり中世の遺構はその埋土が灰色砂からなり、他の時期と明確に区別できた。度重なる洪水に襲われたものと想像される。

中世の遺構は 12 世紀後半から 13 世紀代にかけてのものが中心となり、その後、15 世紀代までは廃絶され西側が水田開削により段落ちしている。

SD117 は水路を兼ねた区画溝とみられるが、北西部で途切れ、この位置から水田開削の段落ちが築かれたことや、主要な建物と考えられる 4 面庇が付いた SB01 の西辺と一致していることからこの南北のラインが何らかの境界に位置していたものと思われる。SK066、SK068 は屋敷墓とみられ、本調査区一帯が屋敷の可能性がある。SD056 の内部には基壇があった可能性があり、先祖を祀るなど祭祀的な機能を有していたことが考えられる。SX006 は報文に記したように火葬に関連した施設の可能性がある。

報告書抄録

ふりがな	いるべ15							
書名	入部XV							
副書名	東入部遺跡第11次調査報告							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1141集							
編著者名	荒牧宏行							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8番1号							
発行年月日	2012年3月16日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	発掘期間	発掘面積m ²	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
ひがいのべいせき 東入部遺跡	ふくおかんふくおかじさわらく 福岡県福岡市早良区 ひがいのべ 東入部	40132	343	35° 31' 12"	130° 19' 56"	951004 ~ 960214	1,330	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
東入部遺跡	集落	弥生時代・中世	竪穴住居跡30、壠立柱 建物、井戸1、木棺墓2、 大甕1	弥生土器、石器、土師器 人骨器がまとまって出土。	12世紀後半の木棺墓から輪 人骨器がまとまって出土。			
要約	東入部遺跡は青銅器が出土する弥生時代の聚落である。本調査では第2次調査地点から広がる中期前半から中期後半を中心とした竪穴住居跡が検出された。中世は12世紀後半から13世紀を中心に周防墓2、井戸1基、条理にあって水路を兼ねた区画溝が検出された。その後、15世紀代に新田開墾に伴う水利施設が築かれる。							

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1141集

入部 XV

2012年3月16日

発行 福岡市教育委員会
 福岡市中央区天神一丁目8-1
 印刷 株式会社 ハザマ印刷
 福岡市南区郡の川一丁目20-23

